

續國譯漢文大成

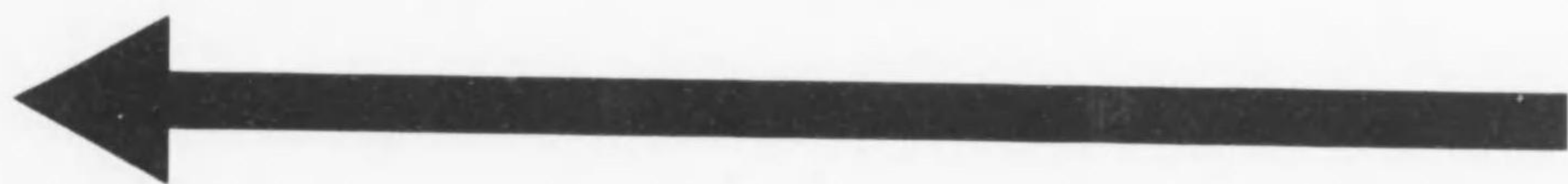
文學部 二十一の下

309
65

帙
入



始



續國譯漢文大成

吉田律郎氏

寄贈

文學部第二十一冊（第六帙の下ノ一）
杜少陵詩集 下の下ノ一



表面影版の筆蹟は此書の脱稿に際して著者より本會へ寄せられたるもの。特に先生に請うて讀者の一餐に供する事としたのである。左に訓讀を掲ぐ。

詩五首

豹軒 鈴木虎雄

老杜生涯旅苦中
船窗釋到巴閩卷
客淚數行下
夜風

昭和己巳八月 航歐舟中 釋社詩

杜老生涯旅苦中卜居錦水復
西東船窗釋到已闌卷客淚數
行下夜風 昭和己巳八月航歐舟中

釋杜詩

月出空山鵲繞枝新秋爽氣透
窗帷神來走筆如風雨注到少
陵上水詩 丹心白首病郎官
句上憂愁血流殘蕭寺更深尋
木義四山風雨一燈寒 辛未八月

寓高野山中釋杜詩二首

老杜文章日月光經綸比興各
擅場千年杜托鍾期後卻學
朱家經解方 理氣細微穿
道體疏箋牽強失詩精誠心正
意培根本須賴真詩養性情

辛未九月二十四日杜詩譯解成

書後二首

豹軒學人鈴木虎雄識



杜少陵詩集 下卷の目次

卷十八

偶題……………	一	縛雞行……………	三五
君不見簡蘇侯……………	七	小至……………	三七
贈蘇四侯……………	八	寄柏學士林居……………	三九
別蘇侯……………	三	折檻行……………	四〇

表面影取の筆蹟は此書の脱稿に際して著者より本會へ寄せられたるもの。特に先生に請うて讀者の一餐に供する事としたのである。左に訓讀を掲ぐ。

詩五首 豹軒 鈴木虎雄

老杜生涯旅苦中
船窗釋到巴閬卷
客淚數行下夜風

昭和己巳八月 航歐舟中 釋杜詩

月出空山鶴繞枝
神來走筆如風雨
注到少陵上水詩

新秋爽氣透窗帷

丹心白首病郎官
蕭寺更深尋本義
四山風雨一燈寒

句句憂愁血淚殘

老杜文章日月光
千年枉托鍾期後
卻學朱家經解方

經綸比興各擅場

理氣細微穿道體
誠心正意培根本
疏箋牽強失詩精
須賴眞詩養性情

辛未九月二十四日杜詩譯解成書後二首

杜少陵詩集 下卷の目次

卷十八

偶題	一	縛難行	三
君不見簡蘇侯	七	小至	三
贈蘇四侯	八	寄柏學士林居	三
別蘇侯	三	折檻行	三
李潮八分小篆歌	五	覽柏中丞兼子姪數人除官制詞	三
峽口二首	二〇	覽鏡呈柏中丞	三
南極	三	陪柏中丞觀宴將士二首	三
瞿唐兩崖	三	奉送蜀州柏二別駕將中丞命	三
瞿唐懷古	二四	送鮮于萬州遷巴州	三
夜宿西閣曉呈元二十一曹長	二五	奉送十七舅下邵桂	三
西閣口號呈元二十一	二六	荆南兵馬使太常卿趙公大食刀歌	三
閣夜	二七	王兵馬使二角鷹	三
瀟西寒望	二八	見王監兵馬使說請余賦詩二首	三
西閣曝日	二九	玉腕驪	三
不離西閣二首	三〇	醉爲馬陸諸公攜酒相看	三

月出空山鶴繞枝
 神來走筆如風雨
 丹心白首病郎官
 蕭寺更深尋本義
 老杜文章日月光
 千年枉托鍾期後
 理氣細微穿道體
 誠心正意培根本
 新秋爽氣透窗帷
 注到少陵上水詩
 句句憂愁血淚殘
 四山風雨一燈寒
 經綸比興各擅場
 卻學朱家經解方
 疏箋牽強失詩精
 須賴眞詩養性情
 辛未八月 寓高野山中 釋杜詩 二首
 辛未九月二十四日杜詩譯解成 書後二首

卷十九

履舟二首	七	入宅三首	100
送李功曹之荊州充鄒侍御判官重贈	七	赤甲	104
送王十六判官	八	卜居	105
別崔暹因寄薛據孟雲卿	八	暮春題漢西新賃草屋五首	107
寄杜位	八	寄從孫崇簡	111
立春	九	江雨有懷鄭典設	114
江梅	九	熟食日示宗文宗武	115
庭草	九	又示兩兒	117
愁	九	得舍弟觀書自中都已達江陵	118
王十五前閣會	九	喜觀卽到復題短篇二首	120
崔評事弟許相迎不到	九	晚登漢上堂	121
遣悶戲呈路十九曹長	九	寄薛三郎中球	125
書夢	九	送惠二歸故居	130
暮春	九	承開河北諸道節度入朝十二首	133
卽事	九	月三首	133
懷瀟上遊	九	晨雨	135

過客相尋 一四七 豎子至 一四八

園	一四九	溪上	二二
歸	一五〇	樹間	二三
園官送菜	一五一	白露	二四
園人送瓜	一五二	諸葛廟	二五
課伐木	一五三	見螢火	二七
柴門	一五三	夜雨	二八
槐葉冷淘	一五七	更題	二九
上後園山脚	一七〇	舍弟觀歸藍田迎新婦送示二首	三〇
季夏送鄉弟韶陪黃門從叔朝謁	一七五	別李秘書始興寺所居	三三
澆澗	一七五	送李八秘書赴杜相公幕	三四
七月一日題終明府水樓二首	一七七	巫峽敝廬奉贈侍御四舅別之澧朗	三六
行官張望補稻畦水歸	一八〇	孟氏	三七
秋行官張望督促東渚耗稻向畢	一八三	吾宗	三九
阻雨不得歸瀆西甘林	一八六	奉酬薛十二丈判官見贈	四〇
又上後園山脚	一九一	寄狄明府博濟	四三
奉送王信州峯北歸	一九五	同元使君春陵行	四四
驅豎子摘蒼耳	一九九		
甘林	二〇一		
暇日小園散病將種秋菜督勸耕牛兼書觸目	二〇六	秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻	二五八
雨	二〇九	寄劉峽州伯華使君四十韻	二六二

【附錄】春陵行(元結)
賊退示官吏(元結)

秋清

目次

二九二

搖落

目次

二九四

卷二十

秋日寄題鄭監湖上亭三首 二九七
 秋野五首 三〇一
 課小豎鋤研舍北果林三首 三〇六
 返照 三〇九
 向夕 三二〇
 天池 三二一
 復愁十二首 三二四
 自瀼西荆扉且移居東屯茅屋四首 三二一
 社日兩篇 三二六
 八月十五夜月二首 三二九
 十六夜對月 三三一
 十七夜對月 三三二
 曉望 三三三
 日暮 三三四
 諷 三三五

晚 三三六
 九月一日過孟十二倉曹十四主簿兄弟 三三八
 孟倉曹步趾領新酒醬二物滿器見遺老夫 三四〇
 送孟十二倉曹赴東京選 三四一
 憑孟倉曹將書覓士婁舊莊 三四二
 簡吳郎司法 三四三
 又呈吳郎 三四五
 晚晴吳郎見過北舍 三四六
 九日五首 三四七
 草山人隱居 三四八
 東屯月夜 三四九
 東屯北峽 三五〇
 從驛次草堂復至東屯茅屋二首 三五七
 暫往白帝復還東屯 三六九

茅堂檢校收稻二首

三六〇

刈稻了詠懷

三六一

季秋葦弟纓江樓夜宴崔評事章少府姪三首

三六三

戲寄崔評事表姪蘇五表弟章大少府諸姪

三六六

季秋江邨

三六七

小園

三六九

寒雨朝行視園樹

三七〇

傷秋

三七二

卽事

三七三

耳聾

三七五

獨坐二首

三七六

大曆二年九月三十日

三七九

十月一日

三八〇

孟冬

三八二

雷

三八三

悶

三八四

卷二十一

目次

夜二首 三八四
 朝二首 三八六
 戲作俳諧體遣悶二首 三八九
 昔遊 三九一
 兩四首 三九五
 大覺高僧蘭若 三九九
 謁真諦寺禪師 四〇一
 上卿翁請修武侯廟遺像缺落時崔卿權夔州 四〇二
 奉送卿二翁統節度鎮軍還江陵 四〇四
 久雨期王將軍不至 四〇五
 虎牙行 四〇九
 錦樹行 四一一
 自平 四一四
 寄裴施州 四一六
 鄭典設自施州歸 四一九
 觀公孫大娘弟子舞劍器行并序 四二四
 寫懷二首 四二五

冬至	四元	遠懷舍弟穎觀等	四八六
柳司馬至	四四〇	續得觀書迎就當陽居止正月中旬定出三峽	四八八
別李義	四四二	太歲日	四九〇
送高司直尋封閩州	四四七	人日二首	四九二
可歎	四五一	喜聞盜賊總退口號五首	四九四
奉賀陽城郡王太夫人恩命加鄧國太夫人	四七七	送大理封主簿五郎親事不合卻赴通州	五〇〇
送田四弟將軍將夔州柏中丞命起居衛公幕	四六〇	將別巫峽贈南卿兄讓西果園四十畝	五〇三
題柏學士茅屋	四六一	巫山縣汾州唐使君十八弟宴別	五〇五
題柏大兄弟山居屋壁二首	四六三	敬寄族弟唐十八使君	五〇七
白帝樓	四六五	春夜峽州田侍御長史津亭留宴得筵字	五二〇
白帝城樓	四六七	大曆三年春白帝城放船出瞿唐峽凡四十韻	五二一
有歎	四六八	行次古城店汎江奉呈江陵幕府諸公	五二三
舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄三首	四六九	泊松滋江亭	五二三
夜歸	四七三	乘雨入行軍六弟宅	五二四
前苦寒行二首	四七五	上巳日徐司錄林園宴集	五二六
晚晴	四七七	宴胡侍御書堂	五二七
復陰	四七九	書堂飲既夜復邀李尚書下馬月下賦絕句	五二八
後苦寒行二首	四八〇	奉送蘇州李二十五長史丈之任	五二九
元日示宗武	四八三	暮春江陵送馬大卿公恩命追赴闕下	五三一
又示宗武	四八四	和江陵宋大少府暮春同諸公及舍弟宴書齋	五三四

卷一二十一

暮春陪李尚書李中丞過鄭監湖亭汎舟	五三五	水宿遣興奉呈羣公	五五三
宇文晁崔或重泛鄭監前湖	五三六	遣悶	五五八
歸雁	五三八	江邊星月二首	五六〇
短歌行贈王郎司直	五三九	舟月對驛近寺	五六二
憶昔行	五四一	舟中	五六三
惜別行送向卿進奉端午御衣之上都	五四五	江陵節度使陽城郡王新樓成	五六五
夏日楊長寧宅送崔侍御常正字入京得深字韻	五四八	又作此奉衛王	五六七
夏夜李尚書筵字文石首赴縣聯句	五五九	秋日荆南述懷三十韻	五六八
多病執熱奉懷李尚書	五五二	秋日荆南送石首薛明府辭滿告別三十韻	五七六
卷一二十一			
暮歸	五七五	官亭夕坐戲簡顏十少府	六〇九
哭李尚書之芳	五七八	移居公安敬贈衛大郎鈞	六一〇
重題	五八一	公安送韋二少府匡贊	六一二
哭李常侍嶧二首	五九三	公安縣懷古	六三三
舟出江陵南浦奉寄鄭少尹審	五九五	呀鵲行	六四四
移居公安山館	五九八	宴王使君宅題二首	六六六
醉歌行贈公安顏十少府請顧八題壁	六〇〇	送覃二判官	六六九
送顧八分文學適洪吉州	六〇二	公安送李二十九弟晉肅入蜀余下沔鄂	六二〇

留別公安太易沙門……………六三
 久客……………六三
 冬深……………六四
 曉發公安……………六六
 發劉郎浦……………六七
 別董道……………六九
 夜聞驚策……………六九
 衡州送李大夫七丈勉赴廣州……………六九
 歲晏行……………七〇
 泊岳陽城下……………七〇
 纜船苦風戲題四韻奉簡鄧十三判官……………七〇
 登岳陽樓……………七〇
 陪裴使君登岳陽樓……………七一
 南征……………七一
 歸夢……………七二
 過南嶽入洞庭湖……………七二
 宿青草湖……………七二
 宿白沙驛……………七二
 湘夫人祠……………七二
 祠南夕望……………七二

上水遣懷……………六五
 遣遇……………六五
 解憂……………六五
 宿鑿石浦……………六六
 早行……………六六
 過津口……………六六
 次空靈岸……………六六
 宿花石戍……………六六
 早發……………六七
 次晚洲……………六七
 清明二首……………六七
 發潭州……………六七
 發白馬潭……………六八
 野望……………六八
 入喬口……………六八
 銅官渚守風……………六八
 北風……………六八
 雙楓浦……………六八
 詠懷二首……………六八

〔附錄〕 杜員外兄垂示詩因作此寄上(郭受)

酬郭十五判官受……………六九
 望嶽……………六九
 嶽麓山道林二寺行……………七〇
 奉送韋中丞之晉赴湖南……………七〇
 湘江宴饒裴二端公赴道州……………七〇
 哭韋大夫之晉……………七一
 江閣臥病走筆寄呈崔盧兩侍御……………七一
 〔附錄〕 潭州留別杜員外院長(韋迥)……………七一
 潭州送韋員外迥牧韶州……………七一

卷二十一

湖南送敬十使君適廣陵……………七九
 晚秋長沙蔡五侍御飲筵送殷六參軍歸澧觀省……………七九
 別張十三建封……………七九
 送盧十四弟侍御護軍尚書靈輿歸上都……………八〇
 蘇大侍御訪江浦賦八韻記異……………八〇
 暮秋枉裴道州手札率爾遺興寄近呈蘇渙侍御……………八〇
 奉贈李八丈暉判官……………八〇
 奉送魏六丈佑少府之交廣……………八〇

〔附錄〕 早發湘潭寄杜員外院長(韋迥)……………七二
 酬韋韶州見寄……………七二
 樓上……………七二
 遠遊……………七二
 千秋節有感二首……………七三
 奉贈盧五丈參謀琚……………七三
 惜別行送劉僕射判官……………七三
 重送劉十弟判官……………七三

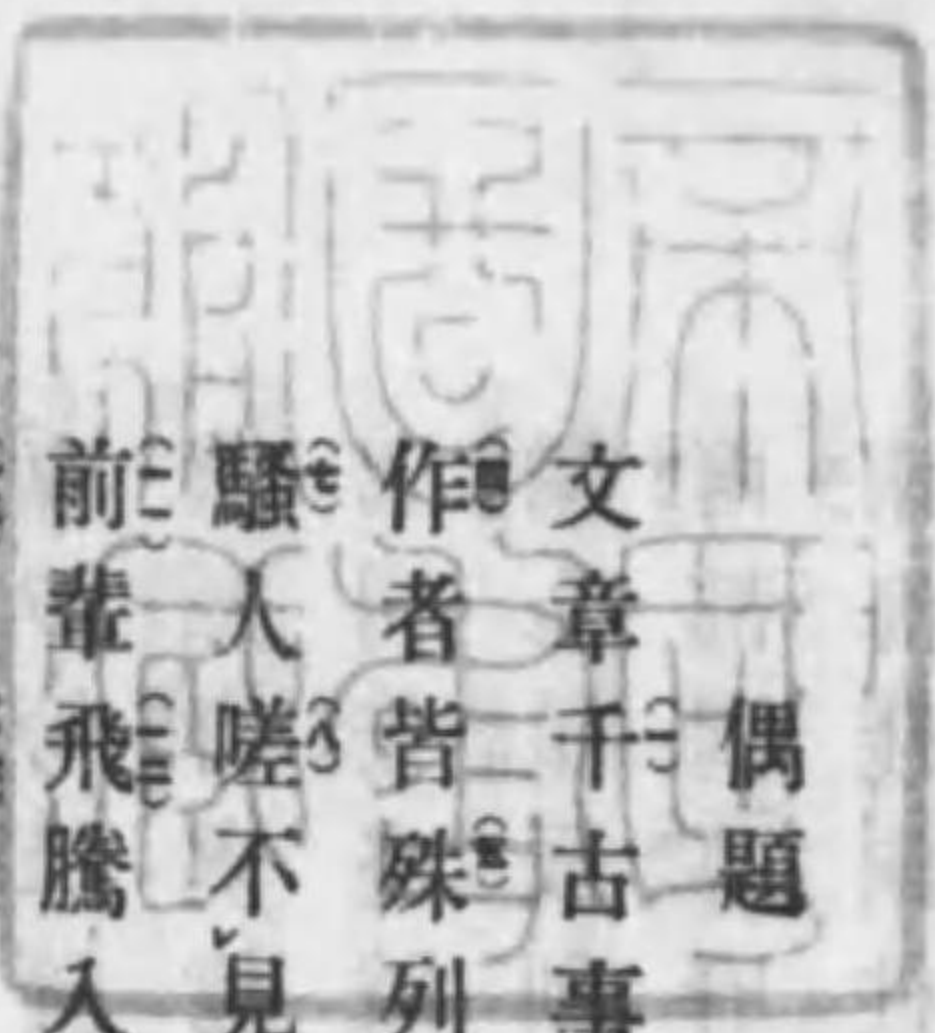
北風……………七三
 幽人……………七三
 江漢……………七三
 地隅……………七三
 舟中夜雪有懷盧十四侍御弟……………七三
 對雪……………七三
 冬晚送長孫漸舍人歸□州……………七三
 暮冬送蘇四郎僕兵曹適桂州……………七三

客從……………七三
 鷺鷥行……………七五
 白鳥行……………七六
 朱鳳行……………七七
 追酬故高蜀州人日見寄并序……………七八
 【附錄】人日寄杜二拾遺(高適)……………七八
 送重表姪王珣評事使南海……………七九
 清明……………八〇
 風雨看舟前落花戲爲新句……………八〇
 奉贈蕭十二使君……………八一
 奉送二十三舅錄事崔偉之攝郴州……………八二
 送魏二十四司直充嶺南掌選崔郎中判官……………八二
 送趙十七明府之縣……………八三
 同豆盧峯貽主客李員外賢子兼知字韻……………八三
 歸雁二首……………八四
 江南逢李龜年……………八六
 小寒食舟中作……………八七

燕子來舟中作……………八九
 贈韋七贊善……………八三〇
 奉酬寇十侍御錫見寄四韻復寄寇……………八三二
 入衡州……………八三三
 逃難……………八三四
 白馬……………八四五
 舟中苦熱遣懷奉呈陽中丞通簡臺省諸公……………八四六
 江閣對雨有懷行營裴二端公……………八五二
 題衡山縣文宣王廟新學堂呈陸宰……………八五四
 聶未陽以僕阻水書致酒肉療饑荒江詩得代懷……………八五九
 迴棹……………八六三
 過洞庭湖……………八六七
 登舟將適漢陽……………八六八
 暮秋將歸秦留別湖南幕府親友……………八七〇
 長沙送李十一衡……………八七一
 風疾舟中伏枕書懷三十六韻奉呈湖南親友……………八七五

杜少陵詩集 卷十八

文學博士 鈴木虎雄 譯解



文章千古事，得失寸心知。
 作者皆殊列，名聲豈浪垂。
 騷人嗟不見，漢道盛於斯。
 前輩飛騰入，餘波綺麗爲。
 後賢兼舊制，歷代各清規。
 法自儒家有，心從弱歲疲。
 永懷江左逸，多病鄴中奇。
 騷驥皆良馬，麒麟帶好兒。

文章千古の事、得失寸心知る。
 作者皆殊列なり、名聲豈に浪りに垂れむや。
 騷人嗟見えす、漢道斯に盛なり。
 前輩飛騰して入る、餘波綺麗と爲る。
 後賢舊制を兼ね、歷代各清規あり。
 法は儒家より有す、心は弱歳より疲る。
 永く懐ふ江左の逸、多く病ましめらる鄴中の奇なるに。
 騷驥皆良馬、麒麟好兒を帶ぶ。

偶題

偶題

車輪徒已斷。堂構惜仍虧。
漫作潛夫論。虛傳幼婦碑。
緣情慰漂蕩。抱疾屢遷移。
經濟慙長策。飛棲假一枝。
塵沙傍蜂蠆。江峽繞蛟螭。
蕭瑟唐虞遠。聯翩楚漢危。
聖朝兼盜賊。異俗更喧卑。
鬱鬱星辰劍。蒼蒼雲雨池。
兩都開幕府。萬寓插軍麾。
南海殘銅柱。東風避月支。
音書恨鳥鵲。號怒怪熊羆。
稼穡分詩興。柴荆學土宜。
故山迷白閣。秋水憶黃陂。

車輪徒らに已に斷す、堂構仍ほ虧けたるを惜む。
漫りに作る潛夫論、虚しく傳ふ幼婦の碑。
緣情漂蕩を慰む、抱疾屢遷移す。
經濟長策を慙づ、飛棲一枝を假る。
塵沙に蜂蠆に傍ふ、江峽蛟螭繞る。
蕭瑟として唐虞遠く、聯翩として楚漢危し。
聖朝盜賊を兼ぬ、異俗更に喧卑なり。
鬱鬱たり星辰劍、蒼蒼たり雲雨の池。
兩都幕府を開く、萬寓軍麾を插む。
南海銅柱殘る、東風月支を避く。
音書鳥鵲を恨む、號怒熊羆を怪しむ。
稼穡詩興を分つ、柴荆土宜を學ぶ。
故山白閣迷ふ、秋水黃陂を憶ふ。

不取要佳句。愁來賦別離。

敢取佳句を要せず、愁來りて別離を賦す。

【字解】【一】千古事 永遠に不朽の事業なるをいふ。【二】得失 佳否をいふ。【三】寸心知 寸心とは方寸の心、自家の心中をいふ。【四】作者 古今の作家。【五】殊列 特別な列位に在ること。【六】浪垂 眞の價値なくしてみだりに後世に傳はる。【七】騷人 騷とは周末に楚の屈原が作りし韻文の一體なり、其の體によりて作るものを騷人といふ、屈原が門人に宋玉・景差・唐勒等あり、みな調ゆる騷人なり。【八】嗟不見 不見とは見るべからざるをいふ。【九】漢道 漢代の文章の道をいふ、漢に至りて五百七言の詩起る。【一〇】盛於斯 斯は其の時をさす。【一一】前輩 後漢の建安、魏の黃初等の時代の文學界の先輩。【一二】飛鷹入 鳥の飛び馬のをどりあがること、奮つて漢道に入りしこと。【一三】餘波 漢魏の文章の流れの餘波。【一四】結題爲 爲結題といふに同じ、これは六朝文學のすがたをいふ。【一五】後賢 六朝以後の賢人。【一六】後賢制 後賢が其の自己より以前の時代の文學の體制を襲はるること、廣く材料を取るをいふ。【一七】歷代 各時代。【一八】各清規 それぞれ清らかなる規律を有す、意匠の新しきところあるをいふ。以上起十句は詩學の源流を敘す。【一九】法自儒家有 法とは文章の法、儒家とは儒道の家、自己の家をさす、作者の祖父杜審言は詩の名家なり、之より詩法を傳へられしにより儒家より有すといふ。【二〇】窮義 二十餘。【二一】江左 江左は江東、江南、即ち六朝の都せし處をいふ、鮑照・謝靈運以下六朝諸家をさす、逸とはすぐれたるをいふ。【二二】多病鄧中奇 病とは鄧中の奇に對して自己を病めりとし、敢らずとするなり、鄧中の奇なるをあきたらずとするにはあらず。不完全句なり。鄧は魏の都にて今の河南省彰德府臨漳縣なり。魏の時鄧中七子あり、孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・劉楨、是なり、又曹植も傑出す、此等は調ゆる鄧中の奇なり。【二三】騷賦皆良馬、騷賦皆好兒 騷賦は千里の名馬、過去の上述諸家をたとへていふ、帶好兒とは父子共に傑出せるものもあるをいふ、魏の曹操と曹丕曹植、阮瑀と阮籍の如きこれなり。【二四】車輪徒已斷 「莊子」天道篇に車輪を造る大工、名は扁といふ者が齊の桓公に答へし語あり、扁は輪を造る手は自己の子にもさとりしむる能はず、子も自己より之を受くる能はず、之によりて行年七十にして「輪に老ゆといへり。作者其の作時に於ける、この扁の如く其の妙悟は子に傳ふる能はざるをいふ。【二五】堂構惜仍虧 「尚書」大畜に、若考作室、既底法、既子乃弗肯堂、別肯構」とみゆ。父、室を作らんとして既に基址を營建するの法を致すに、其の子たるもの其の

六朝諸家のすぐれたことを懐うてをり、鄴中諸家の非凡なさまをみては之に對して自己をあきたらずかながへてをる。諸家は皆駭嘆の良馬であり、また好兒をひきわた麒麟のごとく父子ともそろうてゐる。自分は「莊子」がいふ扁といふ大工のごとく車輪をけづる妙はさつたが他に之をつたへることほできず、父祖自己三世の堂構も依然としてかけて建て増しのできぬことは惜しむべきことである。王符のごとくみだりに隱居して時政を論じ「潜夫論」を作つてをるが、黃絹幼婦と稱せらるる曹娥碑文章の妙はまさに傳をうしなはんとしてをる。」かかるさまで自分は陸機が言ひしごとく「情に縁りて」詩を賦して漂泊の生活を慰め、疾を抱きつつしはば諸處に移轉し、世を濟ふ長策なきをばちながら、「みそさざえ」の様に林中の一枝をかりて棲んでをる。」塵沙の地に於ては蜂壘となりあひ、江峽では蛟螭のたぐひにとりまかれてをる。唐虞の様な聖世はさびしくも遠くへだたりてをる、楚漢の興亡を賭するやうな危い時勢はひきつづいてあらはれる。聖天子の御代であるといふのに盜賊までが存在してをるのであり、そのうへ都會とちがつた蠻俗ときてはそのやかましく卑陋なこと一層である。」柴の氣が星辰を衝く様な劍もいまは鬱鬱とうづもれてをる。時を得ば蛟龍を躍らすべき雲雨の池もいまは蒼蒼とくらくたれこめてをる。このとき東西兩都では幕府が開かれ、天下の軍將いたるところ軍應を挿んでをる。南海をみれば銅柱わづかに残りて中央の權衰へ、月支の盛なる勢には東風も之を避くる状態にある。」自分は故郷からの音書がないために烏鵲を恨み、熊羆がはびこれるため

に怒號しながらそれを怪んでみる。稼穡のわざを試みてはその方へも詩興を分ち、柴荆の門のうちで土地に適した農産物を作るけいこをしてみる。故郷の山を見やるに白鬮峯はどのあたりとも知れず、秋の水につけては皇子陵のさまいかあらんかとおもひだす。今此の篇をつくるにあつて、自分は敢て佳句を求めようなどとはおもはぬが、愁の情のわきくるままに故郷とわかれてゐるころもちをのべてみただけなのである。」

君不見簡蘇侯

君不見、蘇侯に簡す

君不見道邊廢棄池

君見すや道邊の廢棄の池、

君不見前者摧折桐

君見すや前者摧折の桐、

百年死樹中琴瑟

百年の死樹琴瑟に中る、

一斛舊水藏蛟龍

一斛の舊水蛟龍を藏す。」

丈夫蓋棺事始定

丈夫棺を蓋ひて事始めて定まる、

君今幸未成老翁

君今幸に未だ老翁と成らず。

何恨憔悴在山中

何ぞ恨みむ憔悴して山中に在ることを。

君不見簡蘇侯

【字解】

【一】君不見 詩の首句を取る。
 【二】蘇侯 作者の友人の子なり。
 【三】前者 古昔をいふ、即ち下句の「百年」をさす。
 【四】死樹 枯死せる桐の樹、枚乗が七發に云ふ、龍門之桐、百尺而無枝、其根半死而半生、と。
 【五】中琴瑟 琴瑟の用にあたるをいふ。蔡邕が焦桐を發見して琴を造りしことなどをいへるが、庾信が擬連珠に、龍門死

深山窮谷不可處。深山窮谷には處る可からず。
霹靂颯兼狂風。霹靂颯に兼ねて狂風あり。

樹、尙想三成池之曲、ともみゆ。【六】
蓋棺事始定。古時に蓋棺事乃じと
みゆ。人は其の死後に至りて是非始

めて定まる。【七】 何恨一句、この一句は單句なり。

【題義】「君不見」の詩篇を賦して手紙の代りに蘇後によりたるなり。大曆元年、夔州にての作ならん。

【詩意】見たまへ道ばたにすたれてをる池を。見たまへむかし推折された桐を。百年を経た枯木でも之を造り用ふれば琴瑟の用に中ることがある。一斛ばかりしかないふるい水にも蚊龍が藏れひそんでをる。(君はその龍の如く、その桐のごときものだ。)大丈夫の仕事は棺桶の蓋をされてからはじめて是非の論が定まるものだ、君は今幸にまだ老翁となつたわけでない、(仕事をすることはこれからだ)やつれて山中に居るとしてそれを恨む必要はない。君の様な人物は此の地の如き深山窮谷に處るのはよろしくない、ここは霹靂や颯颯があるうへにさらに狂風まで吹いてをるわるところだ。

贈蘇四侯

異縣昔同遊。各云厭轉蓬。

蘇四侯に贈る
異縣昔同遊す、各云ふ轉蓬を厭ふと。

別離已五年。尙在行李中。

戎馬日衰息。乘輿安九重。

有才何棲棲。將老委所窮。

爲郎未爲賤。其奈疾病攻。

子何面黧黑。焉得豁心胸。

巴蜀倦剽劫。下愚成土風。

幽薊已削平。荒徼尙彎弓。

斯人脫身來。豈非吾道東。

乾坤雖寬大。所適裝囊空。

肉食晒菜色。少壯欺老翁。

況乃主客間。古來偏側同。

君今下荆揚。獨帆如飛鴻。

二州豪俠場。人馬皆自雄。

贈蘇四侯



一 請甘饑寒。再請甘養蒙。一には請ふ饑寒に甘んせむことを、再には請ふ養蒙に甘んせむことを。

【字解】 一 異縣。異は彼我居る所の縣を異にするをいふ、其の何處なるやは不明。二 五年。寶應元年より大曆元年までにて五年なり、寶應元年に作者は成都の草堂を離れて梓州附近に流寓せり。蘇頌とは、當時程近き縣に在りてあひしものたらんか。三 行李。李は理なり、行理は使者の職をいふ、語は「左傳」に出づ、已に前にみゆ。四 戎馬日蹙息。永泰元年に郭子儀が回紇と約を定め、吐蕃を逃れ去らしめしことをなす。五 乘輿。天子のおのりもの、天子(代宗)をなす。六 有才。才は才能、此句蘇頌につきていふ、書注作者自負の語とくは悉らくは非ならん。七 樓樓。送なき貌。八 將老。老いんとする、此句及び「爲郎」二句みたり、書注作者自負の語とくは悉らくは非ならん。九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。一〇 子。おまへ、蘇頌を己を謂ふ。一一 委所窮。困窮するまゝに身をゆたれおく。一二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。一三 子。おまへ、蘇頌を己を謂ふ。一四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。一五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。一六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。一七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。一八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。一九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二一 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二三 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。二九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三一 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三三 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。三九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四一 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四三 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。四九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五一 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五三 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。五九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六一 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六三 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。六九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七一 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七三 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。七九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八一 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八三 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。八九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九一 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九二 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九三 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九四 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九五 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九六 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九七 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九八 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。九九 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。一〇〇 爲郎。工部員外郎に任ぜられしこと。

本新主人を求めて荆揚に下らんとするものなればなり。【三】君。蘇頌をなす。【四】荆揚。荆州揚州。【五】獨帆。帆は助詞として用ひ、去聲音ヘンとよむべしと梅賾はいへり。【六】鴻。おほとり。【七】二州。荆揚をいふ。【八】養蒙。周易蒙卦の象辭に曰く、蒙以養正、聖功也。「正蒙」にいふ、能く蒙昧隱黙を以て自ら正道を養へば乃ち至聖の功を成り、と。養蒙は「蒙して養ふ」と訓じ、蒙昧といふことによりて正道を養ふ義なり。亂世の處世の方とみえたり。

【題義】 蘇頌が荆揚の方へ赴かんとするとき之に贈れる詩なり。大曆元年夔州にての作。

【詩意】 むかし君とは別別の縣に居ながら同じく遊んだことがある、そのときおたがひに蓬のころがつてあるく様な漂泊生活はいやになると語りあうたが、さて別れてから五箇年になつた今日まだ行李往來といふ境遇に在るのである。いま戎馬は日日衰へてなくなり、天子も九重の奥におちつきあそばされた。この時君の如き才能あるものがなんでまだせわしくうろつきまはつてゐるか。また自分の如きは老いかかつて身を困窮のまにまにゆだねてをる。自分が郎官となつたことは賤しい身分とはいへぬが、病氣に攻められてをるのでどうにもいたし方がないのである。君を見て心でも慰むるかといふに君はすすばけて黒いかほつきをしてゐる、これではおたがひにどうして胸のうちをおしひろげてはればれとさすことができようぞ。巴蜀の地方では愚の骨頂が土地の風習となつてをる、すなはち追ひはぎ盜賊を爲すことである、自分はそれにはあきてしまつた。北方の幽薊地方は亂が治まつたといふのにこの南方の邊境ではまだ官兵が弓をひいてゐるといふ状態である。君が仕籍を脱けだしてこんな場所へやつてきたことは、古人の謂はゆる「吾が道東す」といふにあたるものではあるまいか。

天地はひろいとはいふが、自分は到るところ囊中がからである。肉食する貴族者は菜色ある貧者をわらひあざけり、少壯血氣のものは老人をばあなどる、これはいつもおなじことだ。まして他人の世話になる身分では主と賓との關係やいかに、主人には本意なくも志を屈せねばならぬこともあつて意氣づまる様な感じがするのはこれはむかしから今まで同じことである。君はこのたび荆揚の方面へ下らうとするので、獨り帆をあやつつて鴻の飛ぶごとくにゆく。かの二州の地は豪俠の人人の居る場所、兵卒も馬も雄強である。君がそこへいつたならば、自分は第一には君が饑寒に甘んじて居てもらひたい、第二にはだまつて正道を養ふの態度に甘んじて居てもらひたいとねがふのである。」

別蘇侯 【原注】赴湖南幕

蘇侯に別る 【原注】湖南の幕に赴く。

故人有遊子。棄擲傍天隅。故人遊子有、棄擲せられて天隅に傍ふ。
他日憐才命。居然屈壯圖。他日才命を憐めり、居然壯圖を屈す。
十年猶場翼。絶倒爲驚呼。十年猶は翼を場る、絶倒爲に驚呼す。
消渴今如此。提攜愧老夫。消渴今此の如し、提攜老夫愧づ。

豈知臺閣舊。先拂風風雛。豈に知らむや臺閣の舊、先づ拂ふ風風の雛。
得實翻蒼竹。棲枝把翠梧。實を得て蒼竹に翻り、枝に棲みて翠梧を把る。
北辰當宇宙。南嶽據江湖。北辰宇宙に當る、南嶽江湖に據る。
國帶煙塵色。兵張虎豹符。國は帶ぶ煙塵の色、兵は張る虎豹の符。
數論封內事。揮發府中趨。數、封内の事を論じ、揮發して府中に趨せむ。
贈爾秦人策。莫鞭轅下駒。爾に贈る秦人の策、鞭つ莫れ轅下の駒。

【字解】(一) 赴湖南幕 湖南の地を管する武官の幕僚として赴く。(二) 故人 舊知の友、後が父をさす。(三) 遊子 たびに居るもの、後をさす。(四) 天隅 天の一隅の意。(五) 他日 往日をいふ。(六) 才命 才能運命、才能をもちつつよき運命にてあはぬをいふ。(七) 居然 そのまま。(八) 壯圖 壯なる謀圖。(九) 十年 大曆元年よりかぞへて十年は至徳二載なり。後はその頃より不遇とみゆ。(一〇) 場翼 場は地の低下すること、翼をたるとは高く飛び得ぬさまをいふ。(一一) 絶倒 からだをたふれさすこと。(一二) 爲 後がために。(一三) 消渴 病名、作者此病にかかるといふ。(一四) 提攜 後と手をたづさへる。(一五) 老夫 作者自らいふ。(一六) 臺閣 臺閣にありしときの舊知、蓋し後が父に作者の舊友にあたりて現に湖南の長官たる人をいふ。(一七) 先とは自己に先ちての意、拂とは毛を拂ふこと、即ち顏延之が請自馬賦の窮拂の意、窮拂とは馬の毛をきりそへ、ほこりをはらひきよむるなり、「先」の字或は「洗」に作る。洗ならばあらひ淨むるなり、いづれにても通ず。(一八) 風風雛 後をたとへていふ。(一九) 得實 實は竹の實をいふ、風風の食物なり。(二〇) 棲枝 枝は翠梧の枝をいふ。(二一) 把 手でもつ。(二二) 翠梧 あなざり、風風は竹實に非ざれば食はず、梧桐に非ざれば棲まず、といはる。(二三) 北辰 北極星、天の中心にあり、君位にたとふ。(二四) 南嶽 衡山

をいふ、五嶽の一、湖南の名山なるゆゑに之をわぐ。【三】 國 湖南の地をいふ。【四】 煙塵 兵馬の塵をいふ。【五】 虎豹符 虎符豹符はみな兵符なり、二分して一を中央、一を地方に置き、兵を徵發せんとするとき中央より使者を出して郡に至り符を合せしむ。【六】 論 従が論するなり。【七】 封内 湖南の地。【八】 揮發 道理を發揮せしむるをいふならん。【九】 府中趨 官吏の威靈りてあるくさまを古樂府に致政公府歩、再内府中趨、といへり。ここは僕が幕府に仕へて趨走するをいふ。【一〇】 爾 僕をさす。【一一】 秦人策 秦人は秦の大夫饒朝、策は馬橋、馬のむち、晉の隨會秦に在り、晉人謀を以て秦を欺きて隨會をよびもどす。會が秦を出でんとするとき晉謀を見破りし秦の大夫饒朝なる者會に策(むち)を贈りて曰く、子、秦に人無しといふことなけれ、吾が謀たまたま用ひられざりしなりと。ここはただ策を借りて用ひしのみ、事からに關係なし。【一二】 鞍下駒 車の長柄をになふ駒、かがまりて伸びぬさまをいふ、語は「漢書」灌夫傳に出づ。

【題義】 蘇侯が湖南へ幕府の賓客として赴くにつき、之と別るるために作れる詩なり。大曆元年夔州にての作。

【詩意】 自分の舊友の子に旅にさまようてをる者がある、そのものは時世にうちすてられて天の一隅にそうてをる。自分はまへかた彼の才命相遇はぬことを氣の毒におもつたが、彼はそのままいまだに壯圖を展してをる。あれから十年にもなるのにまだ翼をたれて高く飛べずに居る。之をみて自分は倒れかけて彼のために驚きさげんだ。自分は彼をどうにかしてやりたいのだが、消渴の病氣にかかつて今、現にあるのさまであるから、彼と手をたづさへながら老人として愧ぢつつあるのである。ところが意外にもとの臺閣での舊知の友がこの鳳凰の雛である彼を我に先つて毛並みを拂うてくれた。(世話をしてくれた)。それで彼は蒼竹に翔つて竹實の食糧を得、翠梧の枝をつかまへて

それに棲むことができ様になつた。」北辰星は宇宙に當りて懸り(帝位の尊を思はしめ)南嶽は江湖の地にがんばつてゐる。君の往く國土は煙塵の色を帯びてをり、虎符豹符が頻りに出されて兵威が張られつつある。君は任地でしばしばその領内の事について議論をなし、役所のなかで趨りながら堂の論旨を發揮することであらう。自分は秦の饒朝が隨會に贈つたやうに君に馬の策を記念に贈る、しかしこの策を以て轡の下にかがまつてゐる駒の様なつまらぬ弱者を鞭つことはなりませぬぞ。」

李潮八分小篆歌 李潮が八分小篆の歌

蒼頡鳥跡既茫昧。 蒼頡が鳥跡既に茫昧、
 字體變化如浮雲。 字體變化浮雲の如し。
 陳倉石鼓又已訛。 陳倉の石鼓又た已に訛る、
 大小二篆生八分。 大小二篆より八分を生ず。
 秦有李斯漢蔡邕。 秦には李斯有り漢には蔡邕、
 中間作者絶不聞。 中間作者絶えて聞かず。
 嶧山之碑野火焚。 嶧山の碑は野火焚く、

李潮八分小篆歌

【字解】 【一】 李潮 作者の明なり。潮は小篆を善くし、李斯の嶧山の碑を削とすと、又潮が八分にて書せるものに唐の慧義寺觀勅像碑・彭元曜墓誌ありといふ。【二】 蒼頡鳥跡 蒼頡は黃帝の時の史にして鳥跡をみて文字を製せし者と傳へらる。【三】 陳倉石鼓 陳倉は地名、陝西省鳳翔府寶雞縣なり。石鼓は鼓形をなせる石なり、石面に大篆を用ひて文字を

棗木傳刻肥失眞

棗木の傳刻肥えて眞を失ふ。

苦縣光和尙骨立

苦縣の光和は尙ほ骨立す、

書貴瘦硬方通神

書は瘦硬なるを貴ぶ方に神に通ず。」

惜哉李蔡不復得

惜い哉李蔡復た得ず、

吾甥李潮下筆親

吾が甥李潮筆を下して親しむ。

尙書韓擇木

尙書韓擇木、

騎曹蔡有鄰

騎曹蔡有鄰。

開元已來數八分

開元已來八分を數ふれば、

潮也奄有二三子成

潮や二子を奄有して三人と成る。」

三人

況潮小篆逼秦相

況んや潮小篆秦相に逼る、

快劍長戟森相向

快劍長戟森として相向ふ。

八分一字直百金

八分一字直百金、

蛟龍盤拏肉屈強

蛟龍盤拏肉屈強。

吳郡張顛誇草書

吳郡の張顛草書を誇る、

草書非古空雄壯

草書は古に非ず空しく雄壯なり。

豈如吾甥不流宕

豈に如かむや吾が甥の流宕せざるに、

丞相中郎丈人行

丞相中郎は丈人行なり。」

巴東逢李潮

巴東李潮に逢ふ、

逾月求我歌

逾月我が歌を求む。

我今衰老才力薄

我今衰老才力薄し、

潮乎潮乎奈汝何

潮や潮や汝を奈何。」

(かすれ字)は神に入り、大・小篆・隸書は妙に入ると稱す。【一】中間、秦より後漢のあひだ。【二】作者、兼書八分の書を作すもの。【三】碑山之碑、上に見ゆ。【四】野火焚、野火のためにやかる。【五】東木傳刻、東木は「なつめ」の木、版木に用ふ、傳刻とは李斯の篆の石面の字を轉轉と版木に傳へうつして刻するなり、碑山碑は後に宋に至りて鄭文寶なる者の模刻出で現に行はる。杜詩によれば唐代已に木刻轉轉して傳はり居りしことを知るべし。【六】肥、筆畫の線がふとくなりゆくこと。【七】苦縣光和、苦縣にある光和年間を立てし老子碑をいふ、蔡邕の八分書なりといふ。或人は事實を考證して、苦縣と光和とは二碑なりとし、苦縣老子碑は桓帝の延熹八年逢詔の作なりとて、靈帝の光和の作と之を區別し、或は光和といふは光和二年に立てられし美毅の西岳碑をいふとなす。然れ

李潮八分小篆歌

刻す、唐の時、鳳翔府天興縣南二十里ばかりに在り、其の數十個あり、周の宣王の田獵の事を紀すといひ傳ふ、唐の韓退之に石鼓歌あり。石鼓の製作年代に就きては學者に異説多し、今其の實物は北京(北平)の孔子廟の廊下に列せらる。【一】訛、字形の異なるをいふ。【二】大小二篆、書體の名、大篆及び小篆なり。周の宣王の大史儗といふ者の製せし文字、之を籀書といふ。秦に至り李斯はそれを改正して篆書を造る、よりにて篆書を小篆といひ、籀書を大篆といふに至れり。今日用ふる印刷の書體は多く篆書の體なり。【三】八分、書體の名、秦の時程邈といふ者篆書を改正して隸書(後世隸書と稱する者)と異なり)を造る、隸書の中より八分を去りて二分を取り、小篆の中より二分を去りて八分を取りて造りし

ものが八分書なりと、此の説は確かならず。一説には其の體みな「八」の字に似て勢に傾波あるによりて名づくこと、此説從ふべきに似たり。八分の書體は現に隸書と稱せらるる者の波磔の角度の甚しからずして圓味を帯ぶるものなり。【七】李斯、秦の始皇の時丞相となる、鄭の碑山の頌徳の碑は李斯の篆書なりといはる。張懷瓘が「書斷」に李斯は小篆は神に入り、大篆は妙に入ると稱す。【八】蔡邕、後漢の靈帝の時の人、熹平四年に洛陽太學の石經を書す。「書斷」には伯喈(邕があざな)は八分、飛白

どしづれも杜詩の意に非ずと知るべし。杜甫は蔡邕の光和碑と信じて述べるなり。【一六】骨立 書體の瘦せたるをいふ。【一七】瘦硬 筆畫やせてつよし。【一八】通神 瘦硬なるものにしてはじめて神靈の域に入る。【一九】李蔡 李斯・蔡邕。【二〇】下筆 觀は親近、李蔡二人の書にちがひなきをいふ。【二一】向書 揮木 揮木は呂蒙の人、隸に工みに登れて八分を作る、風流開朗、世に傳、中興すといふ、肅宗の上元元年四月、右散騎常侍より禮部尚書となる。【二二】騎曹 蔡有郡 有郡は唐の濟陽の人、蔡邕が十八代の孫、官は右衛軍府兵曹參軍に至る、八分書に工みに書法勁險なりといはる。【二三】開元 玄宗の年號。【二四】奄有 大にたもつ。【二五】二子 揮木・有郡の二人。【二六】秦相 秦の丞相李斯をいふ。【二七】快劍長戟 きれあぢよき劍、ながきはこ、書體瘦硬の形容。【二八】直 値。【二九】盤華 盤は「わだかまる」華は「とる」もみあふ。【三〇】屈強 容易に屈せぬすがた、つよきをいふ。【三一】吳郡 張顛 張顛は張旭、吳郡の人、草書をよくす。卷二、飲中八仙歌、その他に屢、已に見ゆ。【三二】沈宿 放埒にやりばなしのこと。【三三】丞相 李斯。【三四】中郎 中郎將蔡邕。【三五】丈人行 丈人は長者の稱、行は行列、列位、或はいふ、輩（なかま）なりと。尊者の輩行にあるをいふ。何奴は漢の天子をさして丈人行なりといへり、漢に對し舅甥の關係に居るをいふ。【三六】巴東 夔州をいふ。【三七】逾月 一個月、しに、ひとつきも以前から。

【題義】 作者の切李潮が八分だの小篆だの書をよくするのでそれによみて與へし歌なり。大暦元年夔州にての作。

【詩意】 大むかしに蒼頡が鳥の足あとを見て文字を造つたといふが、その書體のどんなものでありしやはぼんやりしてわからない。それ以後字體の變化は浮雲の變化する如くなつてきた。陳倉にある石鼓の文字もまた已になまつて来て大篆小篆などができ、二篆から更に八分ができた。篆と八分を能くする者は秦では李斯があり、後漢では蔡邕がある。秦から後漢の間ではどんな作者が有つたか、絶

えて耳にせぬのである。李斯が小篆でかいたといはる嶧山の碑は野火に焚かれてしまひ、秦の版木に段段と刻せられたものがあるが、その筆畫は肥え太つて眞の姿を失うてゐる。苦縣に在る蔡邕が光和年間にかいた老子碑は今尚ほ骨立ちたる姿を存して貴きものである。一體書といふものは瘦硬であることを貴しとするものであつて、瘦硬であつてこそはじめて神靈の域にも通じ入るのである。惜しいことには李斯や蔡邕はふたたび得ることのできぬものである。それに吾が甥の李潮は筆を下して字を書くに常に李・蔡と親しんでそれをまなんだ。吾が唐朝では尙書韓擇木だの騎曹蔡有郡だのといふ人人がある、開元以來の八分書をよくする人をかぞへてみると、李潮は韓・蔡二人を併有してこれで三人の指折りといふことになる。』まして李潮は小篆では秦の丞相（即ち李斯）に通つてをり、書風は快劍長戟が森然として相向ふ趣がある。また蛟龍が相たたかふが如く肉勢屈強であり、潮の八分は一字百金の値がある。吳郡の張顛（旭）は草書を以て誇りとしてをるが、草書などいふものは古體ではなく、いたづらに雄壯な姿をしてをるといふだけのものだ。張の草書はとても李潮が書にかなほぬ、潮が書は決して草書の放埒に流れてゐる様などころがない。潮が書は李丞相・蔡中郎を以て尊長者と仰ぐほどの地位にある。』自分は巴郡の東（夔州）で李潮にであうたところ、潮は一個月以上前から自分に歌を作つてくれといふことである。自分は今は衰老の身で文才氣力薄弱となり、十分に汝の書の長所を發揮してやることができぬ。これは自分の致し方なしと嘆息する所である。』

峡口二首

峡口二首

峡口大江間、西南控百蠻。

峡口大江の間、西南百蠻を控す。

城鼓連粉堞、岸斷更青山。

城鼓きて粉堞連り、岸断えて更に青山。

開關當天險、防隅一水關。

開關より天險に當る、隅を防ぐ一水關。

亂離聞鼓角、秋氣動衰顏。

亂離に鼓角を聞く、秋氣衰顔に動く。

【字解】 〔一〕 峡口、瞿唐峡口なり。〔二〕 百蠻、多くの蠻族。〔三〕 城、かたむく。〔四〕 粉堞、胡粉をぬりしひめがき。〔五〕 開關、天地のひらけしとき。〔六〕 防隅、隅は山隅なり、城隅なり。〔七〕 水關、水上に設けし關門、「宿江邊關」詩（卷十七、六〇四頁）の高齋次「水門」の「水門」と同じものなり。〔八〕 亂離、世みだれて人人はなればなれになること、亂世をいふ。〔九〕 動衰顏、動はたらきかけること、主觀的にいへば感ずといふことなり。

【題義】 瞿唐峡口について感を發す、大曆元年夔州にての作。第一首は形勝に對して世の亂を傷めり。

【詩意】 この峡口は大江の間に位して、西南の方には百蠻をひかへてをる。城は傾斜してしらかべぬりの女牆が連つてをり、岸が断えたかとおもふとその缺けめに更に青い山が見えてゐる。ここは天地開關の始から天險の要害に當つてゐるのであり、城隅を防ぐためには一つの水關を設けて事足りてをる。時あだかも亂世のをりて鼓角の聲がきこえる、これによつていつそ秋の氣がこの老衰の顔面にはたらきかけてくるかの感がするのである。

〔一〕

〔二〕

時清關失險、世亂戟如林。

時清ければ關險を失ふ、世亂るれば戟林の如し。

去矣英雄事、荒哉割據心。

去りの英雄の事、荒なる割據の心。

蘆花留客晚、楓樹坐猿深。

蘆花客を留めて晩れ、楓樹猿を坐せしめて深し。

疲茶煩親故、諸侯數賜金。

疲茶親故を煩はす、諸侯數、金を賜ふ。

【原注】 主人柏中丞、類分、月俸。

【字解】 〔一〕 時清、世の治まれるをいふ。〔二〕 關失險、關門の險あるも之れ無きとおなじ、故に「失ふ」といふ。〔三〕 英雄、後漢の光武帝、蜀漢の昭烈帝、劉備の如く蜀を平げし人をさす。此句は上の「時清」を承けていふ。〔四〕 荒、心の迷亂するを荒といふ。〔五〕 割據心、割據とは蜀の一地にふんばり居るをいふ、後漢の公孫述、晉の李特の如く蜀地に王位を僭せし者をさす。此句は上の「世亂」を承けていふ。〔六〕 蘆花留客晚、留、客を蘆花晚、或は蘆花晚、留、客といふに同じ。客とは蓋し自己をいふ。〔七〕 楓樹坐猿深、深、或は楓樹深、坐、猿、に同じ。〔八〕 疲茶、茶、一に茶に作る、疲るる貌なり。〔九〕 親故、親しきもの、舊知のもの。即ち下句の「諸侯」をいふ。〔一〇〕 諸侯、作者の注に見ゆる柏中丞をさす。柏は夔州の都督なれば古の諸侯にあたるを以てかくいへり。〔一一〕 賜金、金は金錢、作者の注に月俸といへるものは是なり、柏が月俸を割きて作者に金錢を贈るなり。

【題義】 この第二首は往時と比較して今の客況を傷むなり。

【詩意】 時世が治まりて清ければ、關門の險ありとても險の用を爲さず、險の險たる用を失ふけれども、時世が亂るときには險阻の内は忽ち戟が林のごとくみだれ立つ。昔の英雄（光武・昭烈のこと

（き）の事業はもはや過去のものになつてしまひ、迷亂極まる羣雄（公孫述・李特のごとき）割據の心のみがはびこつてをる。今や江邊の蘆花まさに晚れんとしていたづらに旅客たる自分をここにひきとめ、楓樹深くたちこめて奥に猿を坐せしめてをる。疲れはてた身にとりては親交舊知の人を煩はすばかりで、この長官からもたびたび金銀を賜與されてその厄介になつてゐるといふありさまである。

南極

南極

南極青山衆、西江白谷分。

南極青山衆し、西江白谷分る。

古城疎落木、荒戍密寒雲。

古城落木疎に、荒戍寒雲密なり。

歲月蛇常見、風颺虎忽聞。

歲月蛇常見え、風颺虎忽ち聞ゆ。

近身皆鳥道、殊俗自人羣。

近身皆鳥道、殊俗自ら人羣。

睥睨登哀柝、螿弧照夕曛。

睥睨に哀柝登る、螿弧夕曛に照らさる。

亂離多醉尉、愁殺李將軍。

亂離に醉尉多し、愁殺す李將軍。

【字解】〔一〕南極 南方のはてないふ、夔州は京師よりみて極めて南の地なるによりかくいへり。〔二〕西江白谷分 西江は長江なり、西とは作者の居處よりして西なるをいふならん。白谷は白帝城の谷、分とは江と分れてゐるをいふ、支流なる白谷がてこにて江

に入るなり。社體に此句を解して、西江至白谷一分といへるは恐らく申らす、白谷至西江一分と解すべきなり。〔三〕古城 白帝城をいふならん。〔四〕落木 落葉する樹木。〔五〕歲月 一歳一月、四時をとほざるをいふ。〔六〕鳥道 鳥の通ふみち、險阻の傍にあるをいふ。〔七〕殊俗 異なる土俗。〔八〕人羣 禽獸に非ざるをいふ。〔九〕睥睨 城の女牆をいふ。〔十〕登哀柝 哀柝を鳴らす者がのぼる。〔十一〕風颺 旗なり、語は「左傳」に出づ。哀柝は城の戒嚴せるをいふ。〔十二〕醉尉 漢の將軍李廣、醉きて藍田の南山の中に居り射獵す、嘗て夜出でて人に從ひて飲み射獵亭に還る、射獵の尉醉ひて廣を呵し止む。廣が從騎曰く、故の李將軍なりと、尉曰く、今の將軍だもなは夜行するを得ず、何ぞ乃ち「故」ならんと、廣を止めて亭下に宿せしむ、と。「史記」李廣傳に見ゆ。〔十三〕李將軍 李廣なり。事は上にみゆ。末二句は亂世にして騎吏、將軍をも畏れざるをいふ。

【題義】夔州風土の惡しきをのべたり。詩の起首の二字を切りとりて題とす。大曆元年冬夔州にての作。

【詩意】極南のこの地方では青山がおびただしくある。江の西邊では白谷の支流が分れてそそいでゐる。古つばい城のあたりでは葉が落ちて木立の影まばらに、荒れた屯所には冬ぞらの雲がこくむらがつてゐる。ここは年中蛇が出てゐるし、風颺の音につれて虎の聲もにはかきこえてくる。身に近いところはみな鳥の通ふ崖路であり、異様な風俗をみてはこれでも人間の羣かと怪しまるのである。女牆には哀れな拍子木をうつ者どもがのぼり、夕日のくらがりに旗が照らされつつある。亂世にあつては酔ひどれの尉官などが多く居て、これには李將軍（といふべき軍の長官）さへもなやまされるのである。

瞿唐兩崖

瞿唐の兩崖

三峽傳何處。雙崖壯此門。三峽傳ふるは何處ぞ、雙崖此の門壯なり。
 入天猶石色。穿水忽雲根。天に入るも猶ほ石色、水を穿ちて忽ち雲根なり。
 獠獮鬚髯古。蛟龍窟宅尊。獠獮鬚髯古りたり、蛟龍窟宅尊し。
 羲和冬馭近。愁畏日車翻。羲和冬馭近し、愁へて畏る日車の翻らむことを。

【字解】 一 瞿唐兩崖 瞿唐峽の南崖北崖の二つをいふ。瞿唐峽は已に屢見。卷十四「長江」の第一首をみよ。二 三峽 巴に見ゆ。三峽のかぞへ方一定せず、余は瞿唐峽、巫峽、歸州の西陵峽をあげたり。三 傳何處 所傳何處の意、古來三峽といひつたへられてゐる處は果していづくぞといふなり。四 此門 峽口をさす。五 雲根 石をいふ、雲は石より湧き起るとせらるるにより石を雲根と稱す。六 獠獮 サル、オホサル。七 羲和 古傳說にて太陽の乗る車を御する御者の名、日は車に乗り六龍を駕すとかんがへられたり。八 冬馭近 冬馭は冬時の驅御なり。近とは日車が崖と空間的に接近するをいふ。九 愁畏 此の二字の主語は作者なり。仇氏は「杜應」を引きて愁畏の主語を羲和とし、兩崖鬚髯、屏去日光、似乎羲和亦長車翻、而御遊之者といへり、それならば冬馭近といふべきに非ざるか。畏れながら近づくと非理といふべし。故に余は之に従はず。

【題義】 瞿唐峽の崖門の險峻なることをのべたり。大曆元年冬夔州にての作。

【詩意】 三峽三峽と世人は言ひ傳へるがそれは果してどこなのかしらぬが、この雙崖の門のいとも壯なることよ。上の方は天まではいりこんでもまだ石の色であり、下の方は水の奥そこまで穿つても忽ち雲根をみとめるのである。崖には獠獮のたぐひが古ばけたひげつらをさらしてゐる。淵では蛟龍が窟宅尊くひそんでゐる。冬天には日輪の御者羲和が車を翻つてこの崖に近づく。之を見るとき自分はその日輪の乗車がひつくりかへりはせぬかとおそれるのである。

瞿唐懷古

瞿唐の懷古

西南萬壑注。勍敵兩崖開。西南より萬壑注ぐ、勍敵兩崖開く。
 地與山根裂。江從月窟來。地は山根と裂け、江は月窟より來る。
 削成當白帝。空曲隱陽臺。削成せられて白帝に當る、空曲に陽臺隱る。
 疏鑿功雖美。陶鈞力大哉。疏鑿功美なりと雖も、陶鈞力大なる哉。

【字解】 一 勍敵 つよき敵、萬壑の水に對してこの崖が強敵となるをいふ。二 月窟 西極に在りと考へられし地。三 削成 崖の峻しきをいふ。四 白帝 白帝城、此句は第三句を承く。五 空曲 空曠回曲、ひろくしてまがる、此句は第四句を承く。六 陽臺 陽臺臺、卷十五(三四九頁)李季十五秘書文選詩の第一首をみよ。七 疏鑿 禹王が江水をきりひらきしこと、卷十四(二四九頁)禹廟詩をみよ。八 陶鈞 製陶者の陶器をつくるに用ふるろくろをいふ、天然造化の力をたとへていふ。

【題義】 瞿唐峽を見て古昔の事を思ひうかべて作れり。大曆元年の作。

【詩意】 西南の方から萬壑の水流がこちらへそそいでくる、それに對してあだかも強敵であるかの如

くここの兩崖が開かれてゐる。地面は山の根とともに裂け、江は月窟の西極から流れてくる。崖の削り成されたる勢は白帝城の險峻に當り、江水の空曲なるや、陽臺がどこにあるかさへ見せぬ。こんな場所をきりひらいたといはるる禹の功は美しいものではあるが、造化の自然力の大なるには及ぶまい。造化の力はとても大きなものである。

夜宿西閣、曉呈元二十一曹長

夜宿西閣に宿し、曉に元二十一曹長に呈す

城暗更籌急、樓高雨雪微。城暗くして更籌急に、樓高くして雨雪微なり。
稍通綃幕霽、遠帶玉繩稀。稍く通ず綃幕の霽、遠く玉繩の稀なるを帶ぶ。
門鵲晨光起、檣烏宿處飛。門鵲晨光に起く、檣烏宿處に飛ぶ。
寒流江甚細、有意待人歸。寒流江甚だ細なり、人の歸るを待つに意有り。

【字解】(一) 西閣 寓居の西閣、卷十七(六〇六頁)西閣雨望詩以下作者屋、西閣の詩篇あり。(二) 元二十一曹長 卷十五(三八七頁)七月三日禮部詩にみゆるも、其人詳ならず。仇注に作者もと元と同曹なりしゆ、之を曹長といへるなりと云ふも證據なし。曹は役所の部屋なり、同曹は同僚をいふ。(三) 更籌 時刻をはかる水時計の箭。(四) 稍通 稍は次第にの意、通とは霽色がこちらへとほるをいふ。(五) 稍幕 うすきぬのまく、とばりなり。之を天色のたとへと見る説あり、今取らず、實物とみる。(六) 玉繩 北斗

七星の第五を玉衡といひ、玉衡の北の兩星を玉繩星といふ。(七) 門鵲 門のあたりにとぶかささぎ。(八) 檣烏 船の帆柱のあたりにとぶからす。(九) 江甚細 江水細小にして水量増大せざる時は舟行に便なり。(一〇) 有意 意は江流の意、水を擬人視して用ふ。(一一) 人歸 人は自己をいふ、歸は故郷へかへること。

【題義】夜西閣にとまつて、翌曉に元曹長に贈呈した詩、元に向つて歸心の切なるを訴ふ。大暦元年冬、夔州にての作。

【詩意】城は暗くて漏刻の箭の音が急に、樓は高くそびえて雨雪が微になつてきた。しだいしだいに綃の幕に雨霽の色がとほる様になり、遠く玉繩星の稀少なかげさへ帯びる様になつた。門にとぶ鵲は晨の光りに起きいで、帆柱の鳥はかれの宿つた處で飛びたつ。さむぞらの流れをみると江水も細りて見え、人が(自己が)故郷へ歸るのを待つ意があるかの様におもはれる。(この歸郷の念の切なさを察せられよとの意ならん。)

西閣口號、呈元二十一曹長

西閣の口號、元二十一曹長に呈す

山木抱雲稠、寒空繞上頭。山木雲に抱かれて稠し、寒空上頭を繞る。
雪崖纒變石、風幔不依樓。雪崖纒に石を變ず、風幔樓に依らず。
社稷堪流涕、安危在運籌。社稷流涕するに堪へたり、安危運籌に在り。

夜宿西閣曉呈元二十一曹長 西閣口號呈元二十一

看君話王室。感動幾銷憂。看君が王室を話するを、感動して幾たびか憂を銷す。

【字解】 一 看 おほし。二 寒空 冬をいふ。三 銷上頭 善解に云ふ、銷とは雲之をめぐるなりと、今從はず、空が之をめぐるなり。上頭とは山木のうへの方をいふ。四 雙石 石色をして白色にかはらしむるをいふ。五 風殺 風にはばたかざるま

んまく。六 依樓 依とはよりつくをいふ。七 社稷 天下の事をいふ。八 安危 國家の安危。九 運籌 はかりごとをめぐらす。一〇 君 元二十一をさす。

【題義】 西閣にての口すさみ、元二十一に呈せしもの。前篇とほどちかく作りしものならん。

【詩意】 雲に抱きかかへられて山の樹木が多く立つてをり、その上の方を寒空がめぐつてゐる。雪のふつた崖はやつとすこし石の色が白くなつたばかりであるし、風に吹き煽られてゐる幔幕は樓にはよ

りつかず舞ひあがつてゐる。社稷の事をおもへば涕のながれるほどのことばかりだ、この國家の安危はただ謀をめぐらすことの如何にかかつてゐる。このとき自分はただ君が王室のことをかたるのを

きいて、それに感動して幾度か憂を忘れるだけのことである。(また話しにきてはくださらぬかとの底意なるべし。)

閣夜 閣夜 歲暮陰陽催短景 歲暮陰陽短景催す、

天涯霜雪霽寒宵。天涯霜雪寒宵霽る。

【字解】 一 閣夜 西閣の夜をいふ。二 短景 景は影に同じ、日影なり、短影は日のつまるをいふ。

三 五更 夜明けちかくをいふ。四 野哭 原野に慟哭する、生存者が戰死せし關係者をいたみ哭するなり。五 千家 多くの家。六 開戰伐 開は野哭の、ふがきこゆるをいふ、開戰伐とは戰伐の事のある結果としてそれが聞えくるをいふ。

七 夷歌 蠻州の人民、蠻夷多し、その歌ふところのものは即ち夷歌なり。八 臥龍 諸葛亮(孔明)をいふ、

九 人事 人間の生業の事をいふ、上の野哭・夷歌の句を承けていふ。十 漫寂寥 寂寥はさびしきこと。漫とはみだりに、

いたづらに、の意。人事音書の寂寥なるは元來歎息すべきことなり、しかし之を賢愚ともに黃埃に歸することより遠觀して考ふればその寂寥と否ともよろしといふなり。まことにどうでもよきには非ずして憤激の語なり。

【題義】 西閣の夜景を見て亂を傷めるところを敘す。大曆元年冬、夔州西閣にての作。

人事音書漫寂寥。人事音書は漫に寂寥。

臥龍躍馬終黃土。臥龍躍馬も終に黃土、

夷歌幾處起漁樵。夷歌幾處か漁樵より起る。

野哭千家戰伐開。野哭千家戰伐に開ゆ、

三峽星河影動搖。三峽の星河影動搖。

五更鼓角聲悲壯。五更の鼓角聲悲壯、

天涯霜雪霽寒宵。天涯霜雪寒宵霽る。

【題義】 西閣の夜景を見て亂を傷めるところを敘す。大曆元年冬、夔州西閣にての作。

人事音書漫寂寥。人事音書は漫に寂寥。

臥龍躍馬終黃土。臥龍躍馬も終に黃土、

夷歌幾處起漁樵。夷歌幾處か漁樵より起る。

野哭千家戰伐開。野哭千家戰伐に開ゆ、

三峽星河影動搖。三峽の星河影動搖。

五更鼓角聲悲壯。五更の鼓角聲悲壯、

天涯霜雪霽寒宵。天涯霜雪寒宵霽る。

【題義】 西閣の夜景を見て亂を傷めるところを敘す。大曆元年冬、夔州西閣にての作。

人事音書漫寂寥。人事音書は漫に寂寥。

臥龍躍馬終黃土。臥龍躍馬も終に黃土、

夷歌幾處起漁樵。夷歌幾處か漁樵より起る。

【詩意】歳の暮になつて陰陽二氣の運行上、だんだん日がつまつてきて、けふは天のはてなるこゝで霜や雪がおりて寒き宵のそらがはれわたつてゐる。夜明けちかくなると鼓角の聲が悲壯にひびき、三峽の水面には星や天の河の影がうちゆられてゐる。戦伐の絶えぬ結果として無数の家から野哭のこゑがきこゆる。之に對して漁樵の間から起る夷歌とはどれだけの場所から起るのか、どれほどあるまい。かくのごとく此地の生業のことはさびしさの極であり、また自分の待ちうけてをる遠方からの消息もさびしいものであるが、臥龍とよばれた人（孔明）も、躍馬而稱帝といはれた人（公孫述）もしまひには塵埃となつてしまつたのだ、してみれば彼のさびしさの如きはどうでもよい、くよくよするにはあたらぬ。

瀼西寒望

瀼西の寒望

水色含羣動。朝光切太虛。

水色羣動を含む、朝光太虛に切なり。

年侵頻悵望。興遠一蕭疎。

年侵して頻りに悵望す、興遠くして一に蕭疎たり。

猿挂時相學。鷗行炯自如。

猿挂りて時に相學ぶ、鷗行く炯として自如たり。

瞿唐春欲至。定卜瀼西居。

瞿唐春至らむと欲す、定めて卜せむ瀼西の居。

【字解】【一】瀼西。瀼水の西、瀼水の事は卷十五（三六七頁）夔州歌の第五首をみよ。【二】寒望。寒天の眺望。【三】羣動。種種の動くもの、下句の猿鷗等皆是なり。【四】朝光。朝の水光。【五】切太虛。切は近きこと、太虛は虚空なり。【六】年侵。年時侵し来る、歳の暮れかかるをいふ。【七】興遠。興趣の塵俗と遠くはなる。【八】蕭疎。さびしき様子、即ち猿鷗等のさま。【九】猿挂。挂とは樹枝にぶらさがること。【一〇】相學。彼等がお互にまねをする。【一一】鷗行。行とは水上をゆくなり。【一二】炯。ひかる貌。【一三】自如。自由自在。

【題義】寒天に瀼水の西をながめしことをのぶ。大暦元年冬、夔州西閣にての作か。作者西閣の地の險隘なるをいとひて居を移さんと欲し、瀼西方面をながめやりしものなるべし。明年春に至りて作者は先づ遷りて赤甲に居り、三月に至りて瀼西に遷ることとなれり。

【詩意】瀼水の色はさまざまの動物のすがたを包含し、朝のをりの水面の光は虚空にまで接近してをる様に見える。歳の暮れかかるにあたつて自分は現在の住處に不平をもちながらながめると、ここでは塵俗とかけはなれた興趣があつて事物がまつたくさびしく感せられる。即ち猿は樹の枝にぶらさがつて互にまねをしあひ、鷗は水上を自在にあるきながら炯然とひかつてみえる。ここの瞿唐にやがて春が来る、春になつたならば自分は定めし瀼西の住居を卜することになるであらう。

西閣曝日

西閣にて日に曝さる

凜冽倦玄冬。負暄嗜飛閣。

凜冽玄冬に倦む、負暄飛閣を嗜む。

瀼西寒望 西閣曝日

羲和流德澤。顛頊愧倚薄。

羲和德澤を流す、顛頊倚薄を愧づ。

毛髮具自和。肌膚潛沃若。

毛髮具に自ら和す、肌膚潛に沃若たり。

太陽信深仁。衰氣歛有託。

太陽信に深仁なり、衰氣歛ち託する有り。

鼓傾煩注眼。容易收病脚。

鼓傾注眼を煩はすも、容易に病脚を收む。

流離木杪猿。翩躚山巔鶴。

流離たり木杪の猿、翩躚たり山巔の鶴。

朋知苦聚散。哀樂日已作。

朋知聚散に苦しむ、哀樂日に已に作る。

卽事會賦詩。人生忽如昨。

卽事詩を賦するを會す、人生忽ち昨の如し。

古來遭喪亂。賢聖盡蕭索。

古來喪亂に遭へば、賢聖も盡く蕭索たり。

胡爲將暮年。憂世心力弱。

胡爲れぞ暮年を將て、心力の弱きに憂世するや。

【字解】(一) 暉日。暉は太陽の光をうけて背をさらすをいふ。(二) 顛頊。つめたき貌。(三) 羲和。玄冬。玄は冬の色。(四) 負喧。暖氣を背負ふ。(五) 飛脚。西開をいふ、高きに依るを以て飛といふ。(六) 羲和。日輪の御者、日をさしていふ。(七) 德澤。恩徳のうるほひ。(八) 顛頊。古代王者の名、冬の初月に祭らるる神なり、禮記月令に孟冬之月、其帝顛頊、其神玄冥、とみゆ。今、冬を支配する神の義のごとくに用ひたり。(九) 倚薄。より、せまる。(一〇) 具自和。すべておのづとなごやかになる。(一一) 潛。知らぬまに。(一二) 沃若。木の葉のみづみづしくわかやきたる貌。(一三) 歛有託。歛は怨、託は依託、よりかかるといふ。(一四) 鼓傾。身體を前かがみにかたむけること、卷十七、宗武生日詩の鼓傾坐不成の鼓傾と同義なるべし。(一五) 煩注眼。煩は勞するをいふ、身體

重疊の姿勢にあれば前面を正視しやすけれども、前屈の姿勢にあれば前視するに骨が折れるなり。注眼は注目、注視の意。(一六) 收病。脚。收とは投げだせしものを引きこめるをいふ、病脚はやめるをいふ、作者足の悪しかりしこと、卷十五、客堂詩の衰年得弱足の句によりても知るべし。(一七) 流離。おちぶれたさま。仇注に開轉貌といへるは恐らくは然らず。(一八) 翩躚。舞ふ貌、猿は鼓聲にして亦以て自己の況を比す。

【題義】西開で日なたぼっこをして、景事と所感とをのべたり。大暦元年冬、夔州にての作。

【詩意】自分はつめたさのきびしい冬にはあきて、あたたかな日光を背負へる高い西開を嗜む。こころ日光にあたつてゐると羲和は恩澤をつたへてくれるし、顛頊はよりつくことさへ愧ぢてかちかよらぬ。毛髮はひとりですべてなごやかになるし、肌膚も知らぬまにみづみづしくなる、太陽はまことになさけ深いもので、自分の老衰の氣も之あるがために依託する所があるのである。からだを前かがみにしてゐると前方を注視するには骨が折れるが、からだ全體があたたまるにつれて病氣の脚を引込ますことは樂にできる。あすこに木のこすゑにおちぶれた猿がある、また山のいただきには鶴が舞うてゐる、(自分の境遇はあれに似てゐる。)「朋友知己は聚散常ならず、こまつたものだ。哀しさと樂しさとは日日おこりつづける。眼前であうた事からにつけて詩をつくることはこころえてゐるが、過去をおもへば人生幾十年は忽ち昨日の如くつかのまにすぎた。昔から喪亂の世にあへば聖人賢人もみなさびしい生活をおくつたものだ、自分ひとりではない。それになんで自分はこころ老境になつて心力の弱つてゐるをりにやたらに世事を憂ふのであるか。あきらめのわるいことだ。」

不離西閣二首

西閣を離れず 二首

江柳非時發。江花冷色頻。

江柳非時に發す、江花冷色頻りなり。

地偏應有瘴。臘近已含春。

地偏にして應に瘴有るなるべし、臘近くして已に春を含む。

失學從愚子。無家任老身。

失學愚子に従す、無家老身に任す。

不知西閣意。肯別定留人。

知らず西閣の意、肯て別れしめむや定めて人を留まらし。

【字解】【一】非時發 非時は時候はづれ、發は發芽。【二】冷色 のびのびせぬ様子。【三】地偏 蜀地の天南にかたよれること。【四】瘴 惡氣。【五】臘 節日の名、冬至後の辰の日。【六】失學 學問をせぬ。【七】愚子 宗文宗武等ないふ。【八】無家 この家は居宅ないふ。【九】老身 自己ないふ。【一〇】西閣意 西閣を擬人視してその意中をさぐる。【一一】肯別 肯て我をして別れしめんやの意。【一二】定 或はの意。【一三】留人 人とは我をいふ、我をして留まらしめんやの意。

【題義】西閣より離れて居を移さんと欲して未だ離れざることをのべたり。大曆元年冬、夔州にての作。

【詩意】江邊の柳は時候はづれに新芽をだした。江邊の花はのびのびせぬながらもしきりにそれらしい色をだしかけてゐる。ここは南方へかたよつた土地だから一種の瘴氣があるのだらう、臘節が近づいたばかりだのにもはや花柳が春げしきを含んでゐる。この時愚な子供等は學問をせぬがそれもしかたがない、この老人は居るべき家も無いがこれ亦いたしかたもない。さてこの西閣の意中はどうだ、

自分をここから別れさせようといふのか、それとも自分をひきとめておかうといふのか。

【一】

【二】

西閣從人別。人今亦故亭。西閣人の別るるに従す、人今亦た故に亭まる。

江雲飄素練。石壁斷空青。江雲素練飄へる、石壁空青斷ゆ。

滄海先迎日。銀河倒列星。滄海先づ日を迎ふ、銀河倒に星を列す。

平生耽勝事。吁駭始初經。平生勝事に耽る、吁駭せりき始めて初經せしとき。

【字解】【一】故亭 亭は停字の普通なりといへり。案するに普通など用ふべきに非ず、人偏が脱けた誤字ならん、停の字としてみる、停は「とどまる」なり。【二】斷空青 仇氏は「斷えて空處皆青し」とよませたるも、空青は上句の素練と對し、素練が江雲そのものに屬するによりて見るに、空青も亦た石壁そのものに屬するものと見るべきなり。空青は蓋し青空を顯像せしものにて、「空色の青さ」の義ならん。【三】滄海 ひろうみ、開より海が見ゆるはずはなきも、日は海上より出づるにより遠空を主觀的に海といへり。【四】銀河 この銀河は天上のあまのがはらに非ずして、江水の流れを直ちにそれとみなせしものか、銀河即ち星とみれば對法甚だ疎となる。【五】列星 この星は天上の星をいふ。【六】勝事 風景のよきことなど。【七】吁駭始初經 吁駭は過去に於て感歎し驚駭せしをいふ、始初經は始と初と重複の嫌ひあれども初經の義なり、頭初に於てこの勝事を經驗せしことないふ。頭初は驚きしが今はさほどにてはなきも、之をばりあひに強ひて止まり居る、即ち内心はこの勝事を去りたしとの意を含めしものかとおもはる。

【詩意】(前詩に西閣の意はどうかとかがへてみたが)西閣の意は人が別れて去らうとかまひはすまいが、人の方でわざと去らずにとどまつてをるのだ。そのわけは、江上の雲をみれば素練を飄へ

吹葭六琯動飛灰。吹葭の六琯には飛灰動く。
 岸容待臘將舒柳。岸容は臘を待ちて將に柳を舒べむとす。
 山意衝寒欲放梅。山意は寒を衝きて梅を放たしめむと欲す。
 雲物不殊鄉國異。雲物殊ならず郷國異なり。
 教兒且覆掌中杯。兒をして且つ覆はしむ掌中の杯。

とは線の数が増えるをいふ、今まで三本用ひしものなら四本を用ひ得るにいたるをいふ。唐の宮中にては女の工程によりて日の長短をはかる、冬至以後は日漸く長くなりて當日に比べて一線だけの功を増すといはる。【一】吹葭六琯動飛灰。吹葭とは「アシ」の内節のうすかはを焼きし灰を吹きとばすをいふ、六琯は六本の玉製の律管なり、動飛灰とは上述の葭灰を動かして散せしむるなり。「後漢書」律曆志に候氣の法（節氣の至りしや否やうかがふ法）を載す。それによれば、氣を候はんとするには、先づ三重の室をつくり、戸を閉ぢすきまをぬりつづし、室中には赤色の文章無き帛を巻き、木製の案を設け、律ごとに案一つ。案は中央に向つて卑く、外部に向つて高し。この案上に六律六呂の調に相當する玉管を置く。各管の内端を葭管（アシの内部の薄皮）を焼きし灰もて抑へおく。さて當事者層を案じて之を候ふに氣至れば灰動き、氣に動かされたる灰は散す。若し人或は風のために動かされたる灰ならば案の云とみゆ。【二】岸容。江岸のさま。【三】山意。山の、ころ。【四】放梅。放は花をひらかしむるをいふ。【五】雲物。雲の模様。「左傳」僖公五年に、凡分至啓閉、必書雲物とあり。杜預の注にいふ、分とは春分秋分、至とは冬至夏至、啓とは立春立夏、閉とは立秋立冬、雲物とは氣色の災變なり、と。冬至には人君たる者、天文の官をしてかかる職を行はしむるなり。雲物を書するに冬至に限りたるに非ざれども多く冬至のことに「青雲」と稱する慣習あり。【六】覆掌中杯。仇氏二義あり、一は不飲の義、一は盡飲の義なりといへり。而して覆の音讀とせり。余おもふにこれは音フにて、おほふこと、杯を伏せしむるをいふならん、然らば不飲にも盡飲にもあらずして停飲なり。今この義を用ふ。

【題義】冬至の後二日めの景事と所感とをのぶ。大暦元年冬、夔州にての作。

【詩意】一日一日と天時も人事もおしせまつて來て、とうとう冬至の陽氣發生の節となり、春もまたこようとする事になつた。冬至がきたから、日がびて女人の刺繡をする五色の糸すちは細い線のかすを増す様になり、氣を候ふ六本の律管には葭の灰が吹き散らされる様になつた。春がこようとしてゐるから、江岸のさまをみると臘節の近づくのを待つて柳の芽をのばさうとしてゐるし、山のころもちをうかがふと寒威をつきながら梅の花をひらかさうとしてゐるらしい。雲氣の様子をみればちがつたともみえぬがここは故郷とはちがつた土地だ。だから氣乗りもせず、子供に命じてまづまづ飲みかけた掌中の杯を伏せさせてしまふのである。

寄柏學士林居 柏學士が林居に寄す

自胡之反持干戈。胡の反して干戈を持せしより、
 天下學士亦奔波。天下の學士も亦た奔波す。
 嘆彼幽棲載典籍。嘆す彼が幽棲典籍を載せて、

寄柏學士林居

【字解】【一】柏學士。其の人詳ならず、或は都督柏茂林の同族の流寓者ならんか。學士は讀書人の稱。【二】林居。山林の住居。【三】胡。三九

折檻行

折檻行

嗚呼房魏不復見。

嗚呼房魏復た見ず、

秦王學士時難羨。

秦王の學士は時羨み難し。

青衿胄子困泥塗。

青衿の胄子泥塗に困しむ、

白馬將軍若雷電。

白馬の將軍雷電の若し。」

千載少似朱雲人。

千載朱雲の似き人少なり、

至今折檻空嶮岫。

今に至るまで折檻空しく嶮岫たり。

婁公不語宋公語。

婁公語らず宋公語る、

尙憶先皇容直臣。

尙ほ憶ふ先皇の直臣を容れしことを。」

【字解】「一」折檻。宮殿のてす

りを折る。故事あり。前漢の成帝の時、槐里の令朱雲といふ者上書して尙方(天子の御寶藏)の斬馬の劍を賜はりて侯臣一人の頭を斷ち以て其の餘を闕まさんと請ふ。成帝そのものは雖ぞと問ひたまふ。雲曰く、安昌侯雲焉と。高は帝の師にして、時の天子の外戚王氏に媚びし者なり。

帝怒り、御史に命じて雲をして殿上より下らしめんとす。雲、殿檻を攀ぢ、檻折る。その時左將軍辛慶忌が

取りなしにより雲赦さる。後、檻を治むるとき帝はわざとそれを取り易へしめず、つづくりあはせて以て直臣を旌はさしめたまひき。

【二】房。房玄齡・魏徵、唐の太宗の朝の名宰相。【三】秦王學士。秦王は唐の太宗未即位時の稱、學士は秦王府の十八學士。唐の高祖、秦王功高きを以て之を天策上將となす。秦王、府を開きて屬を置き、館を開きて文學の士を延く、杜如晦・房玄齡・虞世南・褚亮・姚志康・李玄道・蔡允恭・薛元敬・顏相時・蘇易・于志寧・蘇世長・薛收・李守素・陸德明・孔穎達・蓋文造・許敬宗を文學館學士となし、三番に分ち日を更へて宿直せしむ。之を十八學士と號す。士大夫其の選に預るを得るものなれば、時人之を登瀛洲と謂ふ。案するにこの十八人は併りて以て魚朝恩の置きし十三人の集賢待制をあてこすりていひしものならん。錢謙益が「鮑」にいふ、永泰元年三月、左僕射裴冕、右僕

射郭英父等文武の臣十三人に命じて集賢殿に於て特制し以て詢問に備はらしむ、蓋し亦太宗の瀛洲學士の意に倣ふなり、然れどもこの時閣登恣橫、次年(即ち大曆元年なり)八月、國子監に釋奠す、魚朝恩六軍の諸將を率ゐて講を聽く、子弟皆朱紫を服して諸生となる、朝恩遂に國子監の事を判す、而して集賢待制の諸臣は口を噤みて一たびも救正せず、故に此の時を作りて之を諷る、と。錢説當れり。

【四】時難羨。時は現時をいふ、學士は本來羨むべきものなり、但現時は秦王の時に非ざれば之を羨望するも得ず。【五】青衿胄子。青衿は青き衿、書生の服はえりを青くす、胄子は長子、卿大夫の子弟、國子監の生徒をさす。【六】困泥塗。どろの中にくるしむ、虞之を白馬將軍といひて稱ると。魚朝恩は時に監門衛大將軍にして神策軍使を兼ね、故に白馬將軍を以て之に比す。【七】若雷電。勢儀の盛なるをたとへていふ。【八】朱雲。上の折檻の字解をみよ。【九】嶮岫。高き貌。【一〇】婁公。婁師德なり、唐の武后の時の宰相、他人若し其の面に唾せば拭はらずして自ら乾くを待てといひし人なり。【一一】宋公。宋璟なり、璟は武后・玄宗の朝に共に宰相となり顔を犯して直諫し、姚崇と併稱して名相といはるる人。【一二】先皇。玄宗。【一三】直臣。正直の臣、語は朱雲傳の旌直臣の句に本づく。

射郭英父等文武の臣十三人に命じて集賢殿に於て特制し以て詢問に備はらしむ、蓋し亦太宗の瀛洲學士の意に倣ふなり、然れどもこの時閣登恣橫、次年(即ち大曆元年なり)八月、國子監に釋奠す、魚朝恩六軍の諸將を率ゐて講を聽く、子弟皆朱紫を服して諸生となる、朝恩遂に國子監の事を判す、而して集賢待制の諸臣は口を噤みて一たびも救正せず、故に此の時を作りて之を諷る、と。錢説當れり。

【題義】魚朝恩等武人の橫行に對して朝廷に直諫の臣なきことを歎じたる詩。大曆元年夔州にての作なるべし。

【詩意】嗚呼今日はむかしの房玄齡・魏徵の如き名臣はまたと見られぬ、秦王の十八學士の如き者も羨むことすらむつかしい。貴族の子弟である學生はおちぶれて泥塗にくるしんでゐるのに、他方では白馬將軍が雷電の様な勢儀をあげてゐる。千年かけて漢の朱雲に似た人はすくない、今はただ雲がつかまつて折つたといふ宮殿のてすりがいだづらに高くあるのみだ。先皇(玄宗)の時代には婁公は

黙つてをられたが(譯者曰く、ここに武后時代の婁師徳を玄宗朝にくりいれて述べしは作者の疎漏なるべし。又洪邁が曰く、婁公既無レ語、何得レ稱三直臣と、是も道理ある評といふべし)宋公(璟)は諫言を吐かれた、自分は今なほそのことを憶うて今日の然らざるをなげかはしくおもふ。

覽柏中丞兼子姪數人除官制詞因述父子兄弟四美載歌絲綸

柏中丞兼子姪數人の除官の制詞を覽、因りて父子兄弟四美を述べ、載ち絲綸を歌ふ

紛然喪亂際。見此忠孝門。紛然たる喪亂の際、見る此の忠孝の門。

蜀中寇亦甚。柏氏功彌存。蜀中寇亦た甚し、柏氏功彌存す。

深誠補王室。戮力自元昆。深誠王室を補ふ、戮力元昆よりす。

三止錦江沸。獨清玉壘昏。三たび止む錦江の沸、獨り清くす玉壘の昏。

高名入竹帛。新渥照乾坤。高名竹帛に入る、新渥乾坤を照らす。

子弟先卒伍。芝蘭疊瓊瑤。子弟卒伍に先だつ、芝蘭瓊瑤に疊る。

同心注師律。灑血在戎軒。同心師律に注ぐ、灑血戎軒に在り。

絲綸實具載。絨冕已殊恩。絲綸實に具載す、絨冕已に殊恩なり。

奉公舉骨肉。誅叛經寒溫。奉公骨肉を舉ぐ、叛を誅するに寒溫を經。

金甲雪猶凍。朱旗塵不翻。金甲雪に猶ほ凍る、朱旗塵に翻らす。

每聞戰場說。歎激懦氣奔。毎に聞く戰場の説、歎ち懦氣を激して奔らしむ。

聖主國多盜。賢臣官則尊。聖主國に盜多し、賢臣官は則ち尊し。

方當節鉞用。必絕稂莠根。方に節鉞の用に當る、必ず稂莠の根を絶たむ。

吾病日迴首。雲臺誰再論。吾病みて日に首を迴らす、雲臺誰か再び論せむ。

作歌挹盛事。推轂期孤鶩。歌を作りて盛事を挹す、推轂孤鶩を期す。

【字解】(一) 柏中丞。御史中丞柏茂林、即ち夔州都督たるもの、中丞の都督たる命は大暦元年八月にあり、其の任に到りしは冬に在るべし。作者柏都督のために謝上表を代作せり、集に之ゆ。舊・新唐書に柏茂林と柏貞節とありて、其の一人なるや二人なるやに就きて王道俊・錢謙益等の議論あり、その決定は史家の考證を待つ所なるも余は同一人なりとおもふ。(二) 子姪數人。此等の人人の誰なるや明ならず。(三) 除官制詞。任官の仰せごとし唐代の任官辭令書は單に「某を某官に任す」といふ如き簡單のものに非ず、立派な文章を以て功績材幹をのべて任する例なり。(四) 父子兄弟。これと柏中丞其人との關係もこの文面のみにては明ならず。詩句によりて想像すれば、柏中丞が父にあたり、又その子が「父子」の「子」にあたり、兄弟は中丞の兄弟には非ずして子たちの兄弟にて、上文の「子姪」の「姪」にあたるものかとおもはる。(五) 四美。四人の美、この關係も不明なるが、父(一人)、子(一人)、兄弟(即ち姪二人)の四人)かとおもはる。純理より推せば父(一人)、子(二人)、姪(一人)といふ組合はせも考へ得るも多分上陳の如きものなるべし。(六) 載歌。載は「乃ち」なり。(七) 絲綸。禮記に王言如絲、其出如綸とみゆ。由りて王言を絲綸といふ、即ち上の制詞のこと。

覽柏中丞兼子姪數人除官制詞因述父子兄弟四美載歌絲綸

【八】忠孝門 門は家門をいふ。【九】蜀中 成都をさす。【一〇】寇 崔旰をいふ。旰、郭英父を殺し亂をなす、故に寇といふ。【一一】深誠 ふかきまごころ。【一二】補王室 王室の足らざるところを補ふ。【一三】戮力 力をあはす。【一四】元昆 昆とは先に生れしものをいふ。元昆は長兄をいふ。これは柏中丞をさす。【一五】三止錦江沸 「三たび」といふ事實につきては異説あるも、詩句のままにみるべし。崔旰の亂のとき柏茂林は印州の牙將として兵を起して旰を討つ。錦江は成都にあり、錦江沸とは成都の崔旰の亂をさす。旰が事已に前に見ゆ。【一六】玉壘昏 玉壘は山の名、成都の西北、茂州保縣にあり、崔旰が領せし地、昏は塵のため日光のくらきこと、玉壘昏とは茂州方面の崔旰の亂をさす。【一七】竹帛 竹簡帛書、史上の記録をいふ。【一八】新淵 淵は「あつし」、新淵とは天子より賜はりし新しき寵恩をいふ。即ち豊州都督に任ぜられしことを指すならん。【一九】子弟 前に述べしごとく茂林の子と姪とをさす、弟は茂林が弟をさすに非ず。【二〇】卒伍 兵卒をいふ。【二一】芝蘭 美なる香草、晉の謝氏の子弟の美材多きことを芝蘭玉樹に比せしこと、「世説」に見ゆ。【二二】壘 たたむ、かさなる、已に在るがうへに更に在るをいふ。【二三】瓊璫 美玉なり。上の芝蘭と同じく子弟の美材にたとふ。【二四】同心 心を一致させて。【二五】注脚律 注とは心をむけること。節律とは軍法なり。「易」の節卦に、節出以律とあり、軍勢を出すときは先づ法則を以て之を整齊するをいふ。【二六】瀝血 戦ひて血をそそぐ。【二七】戎軒 いくさの車。【二八】絲綸 制書、上に見ゆ。【二九】具載 つぶさに記載する。【三〇】披髮 車のまへだれ、かんむり、竝に禮服。【三一】殊恩 特別の御恩。【三二】奉公 公事につくす。【三三】擧骨肉 身よりのもの全體、骨肉は子弟等をさす。【三四】跋 跋は跋者、崔旰の徒をさす。【三五】凝寒 寒温はさむさ、あたたかさ、即ち冬春をいふ。崔旰は永泰元年十月に叛く。茂林兵を起して之を討ち、大曆元年三月に至りて兵を休む、由りて寒温を凝といへり。【三六】金甲 鐵のよろひ。【三七】雪網凍 網とは今は、凍とは金甲がこぼるをいふ。嚴冬を凝たれば今、春になりてもなほ金甲がこぼりてなるといふなり、その寒苦せしをいふ。【三八】朱旗 茂林が軍のあかきばた。【三九】塵不揚 塵の字は副詞、兵塵をいふ、翻は朱旗が翻へるをいふ。兵塵に旗が翻へらぬとは亂のしづまりをいふ。【四〇】戰地説 説とは談話をいふ、茂林のものがたりなるべし。【四一】慚氣 怯弱の意氣。【四二】賢臣 茂林をさす。【四三】節鉞用 節ははたじろしの如きもの。鉞は「まさかり」、刑罰の儀象なり。都督に任ぜらるれば節鉞を用ひ得る職に在るなり。【四四】腰綬 竝に惡氣なり。兵亂をいふ。【四五】還首 長安の方をふりむきみるをいふ。【四六】雲臺 たかき臺。後漢の明帝永平三年に二

十八將を雲臺に圖畫す。【四七】再論 再とは古代に對して今日またの意。【四八】作歌 歌とは此の詩篇をさす。【四九】抱盛事 抱は掛なり、普通にて用ふ。掛とは會釋すること。尊敬の禮をなすの意。盛事とは茂林の偉功によりて任官されしことをいふ。【五〇】推數期孤獨 「推數せられて孤獨せん」とを期すの意。「漢書」馮唐傳に、王者遺一將、跪而推數と。天子が外部へ大將を派遣せんとするときは御自身にひさまづきて車輪の中心部を手にて推しすすめる、將を敬するなり。こゝは天子より更に重き將帥の職に任ぜらるる義に用ひたり。期とは作者が期し望むなり。孤獨とは一人をいいてあがるなり。

【題義】 自分は柏中丞及び其の子姪等數人の任官の詔書の詞を見たので、其の一門四人の美なることをのべ、詔書にいうてある意味を歌につくつた。大曆元年冬、夔州にての作ならん。

【詩意】 天下紛然とみだれて喪亂のある際に柏氏のごとき此の忠孝のあつまつてゐる一門を見るはめづらしいことだ。蜀では特に寇亂がひどいので、柏氏の功はいよいよここに存立するわけである。柏氏は深き誠の心を以て王室の不足のところを補ひ、一門の協力は第一に其の長兄の地位にあるものから始めた。柏氏は三たびまで錦江のさわぎを止め、單獨で玉壘の昏塵を清めた。その高名は竹帛にも入り、最近に天子から賜はつた恩命は天地を照らすばかりにひかりかがやく。柏氏の子弟は芝蘭のうへに瓊璫がつみかさなつたほど多勢あるが、その人人はまつ先きに士卒に先んじてはたらき、一心になつて軍法のうへに注意し、戎車の間に戦血をそそいだ。此等のことを詔書にはくはしく記載してあり、これに對して絳冕をゆるされるといふことは特別の御恩によるものである。柏氏はその一家骨肉の親を擧げて公務につくし、叛徒を誅するために冬春をも經た。雪中のはたらきのなごりか

今だに金甲が凍つてをるし、もはや亂がしづまつたから塵ほこりが立つても朱旗がひるがへることもなくなつた。自分はいつも戦場の話をきくたびに怯弱な意氣が感激させられて急に外へ躍りださうかとおもふくらゐである。』聖天子の御代に國家に盜賊が多いが、柏氏の様な賢臣は尊い官に任せられるのである。いまや柏氏は節鉞を用ひ得る地位に當つたのであるから、きつと兵亂の惡氣を根こそぎ斷絶せしめるであらう。自分は病氣で月日長安の方をふりむいてながめるが、雲臺に功臣を畫くなどのことをだれが今日ふたたび論ずるものがあるか。それでいま柏氏の盛事を尊敬してこの歌を作り、之によつて（柏氏の功が朝廷にもきこえ）柏氏が天子から推戴して外へお遣はしになることになり、彼が他の羣を抜いて高く飛びあがらんことを期待するのである。』

覽鏡呈柏中丞

鏡を覽て柏中丞に呈す

渭水流關内、終南在日邊。

渭水關内に流れ、終南日邊に在り。

膽銷豺虎窟、淚入犬羊天。

膽は銷す豺虎の窟、涙は入る犬羊の天。

起晚堪從事、行遲更學仙。

起くること晚し事に從ふに堪へむや、行くこと遅し更に

鏡中衰謝色、萬一故人憐。

鏡中衰謝の色、萬一故人憐まむ。 「仙を學ばむや。」

【字解】 一、渭水、川の名、關中にあり。二、關内、關中、今の陝西省地方。三、終南、山の名、長安の南にあり。四、日邊、晉の明帝、幼時、日と長安といづれか近き間に答へて、只だ人、長安より来るを聞くも日邊より来るを聞かず、故に日邊しといへり。之より轉化して長安を日邊といふに至れり。五、豺虎、中原の盜賊をさす、一説に此句は蜀中の盜賊をさすと、今從はず。六、犬羊、吐蕃の虜をさす。豺虎・犬羊、並に長安方面に就きていふ。七、起晚、朝起きることおそし。八、堪從事、堪の字反語によむ、從事は官職の事に從ふないふ。九、行遲、あるくことおそし。仙人は空中にも飛び、地上を歩行することもはやし。一〇、學仙、學の字反語によむ。學ぶも證なきゆゑ學ばずといふなり。一一、衰謝、おとろへやつれしこと。一二、故人、舊知の人、柏中丞をさす。

【題義】 鏡をみしにつけ自己の衰へしことを歎息して柏中丞に呈せし詩。大曆元年の作ならん。

【詩意】 關中には渭水が流れてゐる。終南山は日輪の様に遠い長安に在る。その地方は豺虎の様な盜賊の窟となり、犬羊の様なくさい虜（吐蕃）の場所になつてゐるので、自分の膽もこれがために消えんとし、自分の涙はそちらへ向つてそそがれる。自分は朝寢をして起きることがおそいからとても仕事にはたへられぬ。またあるくこともおそいからいまさら仙人を學ぶがらともおもへぬ。鏡をみると老衰の色がわかる。これでも萬一あなたが氣の毒におもつてくださるだらうとそれだけをたよりにしてゐる。

陪柏中丞觀宴將士二首

柏中丞に陪して將士を宴するを觀る 二首

極樂三軍士、誰知百戰場。

樂を極む三軍の士、誰か知らむ百戰場。

覽鏡呈柏中丞 陪柏中丞觀宴將士二首

無私齊綺饌。久坐密金章。

無私綺饌齊しく、久坐金章密なり。

醉客露鸚鵡。佳人指鳳凰。

醉客鸚鵡に露ひ、佳人鳳凰を指にす。

幾時來翠節。特地引紅粧。

幾時か翠節來りて、特地に紅粧を引けるや。

【字解】 〔一〕三軍。上・中・下の三軍、全軍をいふ。〔二〕百戰場。不備の句、百戰場を經しものなりし意。〔三〕無私。主將たる柏中丞の公平にして私心なきこと。〔四〕齊綺饌。齊とは上下階級の區別なきをいふ、綺饌は立派な御馳走。〔五〕久坐。ながくする、宴席にて時間のたつをいふ。〔六〕密金章。密は密接、接近なり、金章は金印、柏の印をいふ。〔七〕鸚鵡。螺杯なり。〔八〕佳人。妓女をいふ。〔九〕指鳳凰。指にすとほ之を彈するをいふ、鳳凰は鳳凰の模様ある琴をいふ。〔一〇〕幾時。何の時か。の意、此の二字は次句までにかかる。〔一一〕翠節。翠羽のついた節筵、中丞の持するもの。〔一二〕特地。ことにし、の意、地の字に義なし。〔一三〕引紅粧。引とはこへみちびき入れしをいふ、紅粧は紅粧の美人、上句の佳人をさす。

【題義】 柏中丞に陪席して、中丞が將士に對し酒もりせしさまを觀てよめる詩。大曆元年の作ならん。

【詩意】 全軍の士が宴に招かれてみな樂をきはめてゐる、彼等が百戰場を往來した豪のものだとは見えぬほどだ。主人は公平無私でだれにも一樣に立派な御馳走を供せられる、坐席が久しくなるとみなが金印を帯びた主人のところへ接近してくる。酔うた賓客は鸚鵡螺の酒杯の恵みにうるほひ、もてなしの美人は鳳凰琴を弾きいだす。いつたい、いつ此處へ翠節が來任せられて、特にかやうに美人を招き入れられたもののかしらん。

〔一〕

〔二〕

繡段裝簷額。金花帖鼓腰。

繡段簷額を裝ひ、金花鼓腰に帖す。

一夫先舞劍。百戲後歌樵。

一夫先づ劍を舞はす、百戲歌樵に後る。

江樹城孤遠。雲臺使寂寥。

江樹城孤遠なり、雲臺使寂寥なり。

漢朝頻選將。應拜霍嫖姚。

漢朝頻りに將を選ぶ、應に拜するなるべし霍嫖姚。

【字解】 〔一〕繡段。ぬひとりをした織物。〔二〕裝簷額。のき先きにかざり付けをする。〔三〕金花。金色紙で花形をつくれるもの。〔四〕帖鼓腰。太鼓の胴の中央部にはりつける。〔五〕一夫。ひとりの武夫。〔六〕百戲。さまざまな遊藝。〔七〕歌樵。樵歌に同じ、豊州の夷人のうたふきこりうた。夷歌幾處起。漁樵の夷歌とおなじ。〔八〕江樹。豊州の江邊の樹木。〔九〕城。豊州の城。〔一〇〕孤遠。孤立にしてみやこより遠くはなれてあること。〔一一〕雲臺。長安の宮苑にあるたかき臺。〔一二〕使。宮廷よりの使者。〔一三〕寂寥。めつたにこぬこと。〔一四〕漢朝。唐の朝廷をいふ。〔一五〕拜。任命すること。〔一六〕霍嫖姚。漢の嫖姚校尉霍去病、武帝時の人。以て柏中丞に比す。

【詩意】 ぬひとりの織物で軒先を飾りつけ、太鼓の胴には金色の造花をはりつける。ひとりの男が先づ劍舞をする。それから夷の樵歌があつて、そのあとにさまざまな遊藝が演せられる。この江邊に樹木のそびゆる蘄州城はみやこからかけはなれて孤立してゐて、雲臺からの使者がめつたにくることもないが、中央の朝廷ではしきりに大將を選抜される際であるから、さだめし霍嫖姚ともいふべき吾が

柏中丞がその選任にあたることであらう。

奉送蜀州柏二別駕將中丞命赴江陵起居衛尚書太夫人因示從弟行軍司馬位

蜀州の柏二別駕が中丞の命を將ひ、江陵に赴きて衛尚書の太夫人を起居するを送り奉る、因りて從弟行軍司馬位に示す

中丞問俗畫熊頻 中丞俗を問ひて畫熊頻りなり、

愛弟傳書綵鷓新 愛弟書を傳へて綵鷓新なり。

遷轉五州防禦使 遷轉す五州の防禦使、

起居八座太夫人 起居す八座の太夫人。

楚宮臘送荆門水 楚宮臘には送る荆門の水、

白帝雲偷碧海春 白帝雲は偷む碧海の春。

與報惠連詩不惜 與に惠連に報せよ「詩惜まされ、

知吾斑鬢總如銀 吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

【字解】〔一〕蜀州 今四川省成都府漢州。

〔二〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。

〔三〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。

〔四〕江陵 湖北省荊州府。

〔五〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。

〔六〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。

〔七〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

て太夫人と稱す、後世はひろくいふ。蓋し柏中丞と衛尚書とは從兄弟あひの關係に在るものなり。

〔一〕蜀州 今四川省成都府漢州。〔二〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。〔三〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。〔四〕江陵 湖北省荊州府。〔五〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。〔六〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。〔七〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

のいとこにて伯玉が配下にて行軍司馬の役をつとめてゐる社位。〔八〕問俗 領内人民の風俗を問ふ、民情を觀察すること。〔九〕畫熊 不備の句、畫熊の車を馳すること頗りなるをいふ。從漢興服志に、三公列侯車飾、畫熊、伏熊、黑馬とみゆ。今借用す。畫熊は車の軾のところに熊の形象を畫するなり。〔一〇〕愛弟 柏二別駕をいふ。〔一一〕傳書 中丞の手紙を先方へつたへる。〔一二〕綵鷓 綵鷓は船をいふ、水神を厭するたため船首に鷓鴣を彩色にて畫し、別駕が乗りゆく船をいふ。〔一三〕遷轉 官位のうつること。〔一四〕五州防禦使 代宗の廣德二年に饒・忠・浩防禦使を置き夔州に治す、もとは饒・忠・歸・萬の五州を領して荆南節度使に隸屬せしものなりと、柏中丞のとき夔州都督より防禦使に遷りしものとみえたり。〔一五〕八座太夫人 八座とは主要なる官省八種をいふ、其の内容は時代により同じからず、隋の時は吏・戶・禮・兵・刑・工の六部の尚書と左・右僕射とを合せて八座となす、唐は之に同じ。衛伯玉は檢校工部尚書なれば八座の一に居る。其の母ゆゑ之を八座太夫人といふ。〔一六〕楚宮 楚王の宮、巫山縣にあり、已に見ゆ。〔一七〕荆門 節日の名、已に見ゆ。〔一八〕荆門 山の名、荊州にあり。〔一九〕白帝 城の名、夔州にあり。〔二〇〕雲偷 偷は盜む、人の知らぬまに潛に含むをいふ。〔二一〕碧海 荆州の廣き江水をさす、其の末流は海に入る。〔二二〕與報 我が爲めに彼に報ぜよ、これは柏別駕にむかひていふ辭なり。〔二三〕惠連 宋の謝惠連。謝靈運が從弟にて文才あり、今借りて作者の從弟社位に比す。〔二四〕詩不惜 我に贈る詩篇を愛惜するなかれ。一説に之を「我、吾が汝に贈る詩を惜むに非ず、老衰の故に別に一詩を寄する能はず」ととく、王維植・顧震、此の解を取れり。今從はず。〔二五〕知吾 知れとは社位にむかひていふなり。

〔二六〕斑鬢 斑は白、鬢は髪、老衰の故に斑髪を總て銀の如くなるをいふ。〔二七〕總如銀 總て銀の如くなるをいふ。〔二八〕吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

〔二九〕社位 社位にむかひていふなり。

〔三〇〕從弟 從弟にむかひていふなり。

〔三一〕行軍司馬位 行軍司馬位にむかひていふなり。

〔三二〕蜀州 今四川省成都府漢州。

〔三三〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。

〔三四〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。

〔三五〕江陵 湖北省荊州府。

〔三六〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。

〔三七〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。

〔三八〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

て太夫人と稱す、後世はひろくいふ。蓋し柏中丞と衛尚書とは從兄弟あひの關係に在るものなり。

のいとこにて伯玉が配下にて行軍司馬の役をつとめてゐる社位。〔三九〕問俗 領内人民の風俗を問ふ、民情を觀察すること。〔四〇〕畫熊 不備の句、畫熊の車を馳すること頗りなるをいふ。從漢興服志に、三公列侯車飾、畫熊、伏熊、黑馬とみゆ。今借用す。畫熊は車の軾のところに熊の形象を畫するなり。〔四一〕愛弟 柏二別駕をいふ。〔四二〕傳書 中丞の手紙を先方へつたへる。〔四三〕綵鷓 綵鷓は船をいふ、水神を厭するたため船首に鷓鴣を彩色にて畫し、別駕が乗りゆく船をいふ。〔四四〕遷轉 官位のうつること。〔四五〕五州防禦使 代宗の廣德二年に饒・忠・浩防禦使を置き夔州に治す、もとは饒・忠・歸・萬の五州を領して荆南節度使に隸屬せしものなりと、柏中丞のとき夔州都督より防禦使に遷りしものとみえたり。〔四六〕八座太夫人 八座とは主要なる官省八種をいふ、其の内容は時代により同じからず、隋の時は吏・戶・禮・兵・刑・工の六部の尚書と左・右僕射とを合せて八座となす、唐は之に同じ。衛伯玉は檢校工部尚書なれば八座の一に居る。其の母ゆゑ之を八座太夫人といふ。〔四七〕楚宮 楚王の宮、巫山縣にあり、已に見ゆ。〔四八〕荆門 節日の名、已に見ゆ。〔四九〕荆門 山の名、荊州にあり。〔五〇〕白帝 城の名、夔州にあり。〔五一〕雲偷 偷は盜む、人の知らぬまに潛に含むをいふ。〔五二〕碧海 荆州の廣き江水をさす、其の末流は海に入る。〔五三〕與報 我が爲めに彼に報ぜよ、これは柏別駕にむかひていふ辭なり。〔五四〕惠連 宋の謝惠連。謝靈運が從弟にて文才あり、今借りて作者の從弟社位に比す。〔五五〕詩不惜 我に贈る詩篇を愛惜するなかれ。一説に之を「我、吾が汝に贈る詩を惜むに非ず、老衰の故に別に一詩を寄する能はず」ととく、王維植・顧震、此の解を取れり。今從はず。〔五六〕知吾 知れとは社位にむかひていふなり。

〔五七〕斑鬢 斑は白、鬢は髪、老衰の故に斑髪を總て銀の如くなるをいふ。〔五八〕總如銀 總て銀の如くなるをいふ。〔五九〕吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

〔六〇〕社位 社位にむかひていふなり。

〔六一〕從弟 從弟にむかひていふなり。

〔六二〕行軍司馬位 行軍司馬位にむかひていふなり。

〔六三〕蜀州 今四川省成都府漢州。

〔六四〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。

〔六五〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。

〔六六〕江陵 湖北省荊州府。

〔六七〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。

〔六八〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。

〔六九〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

て太夫人と稱す、後世はひろくいふ。蓋し柏中丞と衛尚書とは從兄弟あひの關係に在るものなり。

のいとこにて伯玉が配下にて行軍司馬の役をつとめてゐる社位。〔七〇〕問俗 領内人民の風俗を問ふ、民情を觀察すること。〔七一〕畫熊 不備の句、畫熊の車を馳すること頗りなるをいふ。從漢興服志に、三公列侯車飾、畫熊、伏熊、黑馬とみゆ。今借用す。畫熊は車の軾のところに熊の形象を畫するなり。〔七二〕愛弟 柏二別駕をいふ。〔七三〕傳書 中丞の手紙を先方へつたへる。〔七四〕綵鷓 綵鷓は船をいふ、水神を厭するたため船首に鷓鴣を彩色にて畫し、別駕が乗りゆく船をいふ。〔七五〕遷轉 官位のうつること。〔七六〕五州防禦使 代宗の廣德二年に饒・忠・浩防禦使を置き夔州に治す、もとは饒・忠・歸・萬の五州を領して荆南節度使に隸屬せしものなりと、柏中丞のとき夔州都督より防禦使に遷りしものとみえたり。〔七七〕八座太夫人 八座とは主要なる官省八種をいふ、其の内容は時代により同じからず、隋の時は吏・戶・禮・兵・刑・工の六部の尚書と左・右僕射とを合せて八座となす、唐は之に同じ。衛伯玉は檢校工部尚書なれば八座の一に居る。其の母ゆゑ之を八座太夫人といふ。〔七八〕楚宮 楚王の宮、巫山縣にあり、已に見ゆ。〔七九〕荆門 節日の名、已に見ゆ。〔八〇〕荆門 山の名、荊州にあり。〔八一〕白帝 城の名、夔州にあり。〔八二〕雲偷 偷は盜む、人の知らぬまに潛に含むをいふ。〔八三〕碧海 荆州の廣き江水をさす、其の末流は海に入る。〔八四〕與報 我が爲めに彼に報ぜよ、これは柏別駕にむかひていふ辭なり。〔八五〕惠連 宋の謝惠連。謝靈運が從弟にて文才あり、今借りて作者の從弟社位に比す。〔八六〕詩不惜 我に贈る詩篇を愛惜するなかれ。一説に之を「我、吾が汝に贈る詩を惜むに非ず、老衰の故に別に一詩を寄する能はず」ととく、王維植・顧震、此の解を取れり。今從はず。〔八七〕知吾 知れとは社位にむかひていふなり。

〔八八〕斑鬢 斑は白、鬢は髪、老衰の故に斑髪を總て銀の如くなるをいふ。〔八九〕總如銀 總て銀の如くなるをいふ。〔九〇〕吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

〔九一〕社位 社位にむかひていふなり。

〔九二〕從弟 從弟にむかひていふなり。

〔九三〕行軍司馬位 行軍司馬位にむかひていふなり。

〔九四〕蜀州 今四川省成都府漢州。

〔九五〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。

〔九六〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。

〔九七〕江陵 湖北省荊州府。

〔九八〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。

〔九九〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。

〔一〇〇〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

て太夫人と稱す、後世はひろくいふ。蓋し柏中丞と衛尚書とは從兄弟あひの關係に在るものなり。

のいとこにて伯玉が配下にて行軍司馬の役をつとめてゐる社位。〔一〇一〕問俗 領内人民の風俗を問ふ、民情を觀察すること。〔一〇二〕畫熊 不備の句、畫熊の車を馳すること頗りなるをいふ。從漢興服志に、三公列侯車飾、畫熊、伏熊、黑馬とみゆ。今借用す。畫熊は車の軾のところに熊の形象を畫するなり。〔一〇三〕愛弟 柏二別駕をいふ。〔一〇四〕傳書 中丞の手紙を先方へつたへる。〔一〇五〕綵鷓 綵鷓は船をいふ、水神を厭するたため船首に鷓鴣を彩色にて畫し、別駕が乗りゆく船をいふ。〔一〇六〕遷轉 官位のうつること。〔一〇七〕五州防禦使 代宗の廣德二年に饒・忠・浩防禦使を置き夔州に治す、もとは饒・忠・歸・萬の五州を領して荆南節度使に隸屬せしものなりと、柏中丞のとき夔州都督より防禦使に遷りしものとみえたり。〔一〇八〕八座太夫人 八座とは主要なる官省八種をいふ、其の内容は時代により同じからず、隋の時は吏・戶・禮・兵・刑・工の六部の尚書と左・右僕射とを合せて八座となす、唐は之に同じ。衛伯玉は檢校工部尚書なれば八座の一に居る。其の母ゆゑ之を八座太夫人といふ。〔一〇九〕楚宮 楚王の宮、巫山縣にあり、已に見ゆ。〔一一〇〕荆門 節日の名、已に見ゆ。〔一一一〕荆門 山の名、荊州にあり。〔一一二〕白帝 城の名、夔州にあり。〔一一三〕雲偷 偷は盜む、人の知らぬまに潛に含むをいふ。〔一一四〕碧海 荆州の廣き江水をさす、其の末流は海に入る。〔一一五〕與報 我が爲めに彼に報ぜよ、これは柏別駕にむかひていふ辭なり。〔一一六〕惠連 宋の謝惠連。謝靈運が從弟にて文才あり、今借りて作者の從弟社位に比す。〔一一七〕詩不惜 我に贈る詩篇を愛惜するなかれ。一説に之を「我、吾が汝に贈る詩を惜むに非ず、老衰の故に別に一詩を寄する能はず」ととく、王維植・顧震、此の解を取れり。今從はず。〔一一八〕知吾 知れとは社位にむかひていふなり。

〔一一九〕斑鬢 斑は白、鬢は髪、老衰の故に斑髪を總て銀の如くなるをいふ。〔一二〇〕總如銀 總て銀の如くなるをいふ。〔一二一〕吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

〔一二二〕社位 社位にむかひていふなり。

〔一二三〕從弟 從弟にむかひていふなり。

〔一二四〕行軍司馬位 行軍司馬位にむかひていふなり。

〔一二五〕蜀州 今四川省成都府漢州。

〔一二六〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。

〔一二七〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。

〔一二八〕江陵 湖北省荊州府。

〔一二九〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。

〔一三〇〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。

〔一三一〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

て太夫人と稱す、後世はひろくいふ。蓋し柏中丞と衛尚書とは從兄弟あひの關係に在るものなり。

のいとこにて伯玉が配下にて行軍司馬の役をつとめてゐる社位。〔一三二〕問俗 領内人民の風俗を問ふ、民情を觀察すること。〔一三三〕畫熊 不備の句、畫熊の車を馳すること頗りなるをいふ。從漢興服志に、三公列侯車飾、畫熊、伏熊、黑馬とみゆ。今借用す。畫熊は車の軾のところに熊の形象を畫するなり。〔一三四〕愛弟 柏二別駕をいふ。〔一三五〕傳書 中丞の手紙を先方へつたへる。〔一三六〕綵鷓 綵鷓は船をいふ、水神を厭するたため船首に鷓鴣を彩色にて畫し、別駕が乗りゆく船をいふ。〔一三七〕遷轉 官位のうつること。〔一三八〕五州防禦使 代宗の廣德二年に饒・忠・浩防禦使を置き夔州に治す、もとは饒・忠・歸・萬の五州を領して荆南節度使に隸屬せしものなりと、柏中丞のとき夔州都督より防禦使に遷りしものとみえたり。〔一三九〕八座太夫人 八座とは主要なる官省八種をいふ、其の内容は時代により同じからず、隋の時は吏・戶・禮・兵・刑・工の六部の尚書と左・右僕射とを合せて八座となす、唐は之に同じ。衛伯玉は檢校工部尚書なれば八座の一に居る。其の母ゆゑ之を八座太夫人といふ。〔一四〇〕楚宮 楚王の宮、巫山縣にあり、已に見ゆ。〔一四一〕荆門 節日の名、已に見ゆ。〔一四二〕荆門 山の名、荊州にあり。〔一四三〕白帝 城の名、夔州にあり。〔一四四〕雲偷 偷は盜む、人の知らぬまに潛に含むをいふ。〔一四五〕碧海 荆州の廣き江水をさす、其の末流は海に入る。〔一四六〕與報 我が爲めに彼に報ぜよ、これは柏別駕にむかひていふ辭なり。〔一四七〕惠連 宋の謝惠連。謝靈運が從弟にて文才あり、今借りて作者の從弟社位に比す。〔一四八〕詩不惜 我に贈る詩篇を愛惜するなかれ。一説に之を「我、吾が汝に贈る詩を惜むに非ず、老衰の故に別に一詩を寄する能はず」ととく、王維植・顧震、此の解を取れり。今從はず。〔一四九〕知吾 知れとは社位にむかひていふなり。

〔一五〇〕斑鬢 斑は白、鬢は髪、老衰の故に斑髪を總て銀の如くなるをいふ。〔一五一〕總如銀 總て銀の如くなるをいふ。〔一五二〕吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

〔一五三〕社位 社位にむかひていふなり。

〔一五四〕從弟 從弟にむかひていふなり。

〔一五五〕行軍司馬位 行軍司馬位にむかひていふなり。

〔一五六〕蜀州 今四川省成都府漢州。

〔一五七〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。

〔一五八〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。

〔一五九〕江陵 湖北省荊州府。

〔一六〇〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。

〔一六一〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。

〔一六二〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

て太夫人と稱す、後世はひろくいふ。蓋し柏中丞と衛尚書とは從兄弟あひの關係に在るものなり。

のいとこにて伯玉が配下にて行軍司馬の役をつとめてゐる社位。〔一六三〕問俗 領内人民の風俗を問ふ、民情を觀察すること。〔一六四〕畫熊 不備の句、畫熊の車を馳すること頗りなるをいふ。從漢興服志に、三公列侯車飾、畫熊、伏熊、黑馬とみゆ。今借用す。畫熊は車の軾のところに熊の形象を畫するなり。〔一六五〕愛弟 柏二別駕をいふ。〔一六六〕傳書 中丞の手紙を先方へつたへる。〔一六七〕綵鷓 綵鷓は船をいふ、水神を厭するたため船首に鷓鴣を彩色にて畫し、別駕が乗りゆく船をいふ。〔一六八〕遷轉 官位のうつること。〔一六九〕五州防禦使 代宗の廣德二年に饒・忠・浩防禦使を置き夔州に治す、もとは饒・忠・歸・萬の五州を領して荆南節度使に隸屬せしものなりと、柏中丞のとき夔州都督より防禦使に遷りしものとみえたり。〔一七〇〕八座太夫人 八座とは主要なる官省八種をいふ、其の内容は時代により同じからず、隋の時は吏・戶・禮・兵・刑・工の六部の尚書と左・右僕射とを合せて八座となす、唐は之に同じ。衛伯玉は檢校工部尚書なれば八座の一に居る。其の母ゆゑ之を八座太夫人といふ。〔一七一〕楚宮 楚王の宮、巫山縣にあり、已に見ゆ。〔一七二〕荆門 節日の名、已に見ゆ。〔一七三〕荆門 山の名、荊州にあり。〔一七四〕白帝 城の名、夔州にあり。〔一七五〕雲偷 偷は盜む、人の知らぬまに潛に含むをいふ。〔一七六〕碧海 荆州の廣き江水をさす、其の末流は海に入る。〔一七七〕與報 我が爲めに彼に報ぜよ、これは柏別駕にむかひていふ辭なり。〔一七八〕惠連 宋の謝惠連。謝靈運が從弟にて文才あり、今借りて作者の從弟社位に比す。〔一七九〕詩不惜 我に贈る詩篇を愛惜するなかれ。一説に之を「我、吾が汝に贈る詩を惜むに非ず、老衰の故に別に一詩を寄する能はず」ととく、王維植・顧震、此の解を取れり。今從はず。〔一八〇〕知吾 知れとは社位にむかひていふなり。

〔一八一〕斑鬢 斑は白、鬢は髪、老衰の故に斑髪を總て銀の如くなるをいふ。〔一八二〕總如銀 總て銀の如くなるをいふ。〔一八三〕吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

〔一八四〕社位 社位にむかひていふなり。

〔一八五〕從弟 從弟にむかひていふなり。

〔一八六〕行軍司馬位 行軍司馬位にむかひていふなり。

〔一八七〕蜀州 今四川省成都府漢州。

〔一八八〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。

〔一八九〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。

〔一九〇〕江陵 湖北省荊州府。

〔一九一〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。

〔一九二〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。

〔一九三〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

て太夫人と稱す、後世はひろくいふ。蓋し柏中丞と衛尚書とは從兄弟あひの關係に在るものなり。

のいとこにて伯玉が配下にて行軍司馬の役をつとめてゐる社位。〔一九四〕問俗 領内人民の風俗を問ふ、民情を觀察すること。〔一九五〕畫熊 不備の句、畫熊の車を馳すること頗りなるをいふ。從漢興服志に、三公列侯車飾、畫熊、伏熊、黑馬とみゆ。今借用す。畫熊は車の軾のところに熊の形象を畫するなり。〔一九六〕愛弟 柏二別駕をいふ。〔一九七〕傳書 中丞の手紙を先方へつたへる。〔一九八〕綵鷓 綵鷓は船をいふ、水神を厭するたため船首に鷓鴣を彩色にて畫し、別駕が乗りゆく船をいふ。〔一九九〕遷轉 官位のうつること。〔二〇〇〕五州防禦使 代宗の廣德二年に饒・忠・浩防禦使を置き夔州に治す、もとは饒・忠・歸・萬の五州を領して荆南節度使に隸屬せしものなりと、柏中丞のとき夔州都督より防禦使に遷りしものとみえたり。〔二〇一〕八座太夫人 八座とは主要なる官省八種をいふ、其の内容は時代により同じからず、隋の時は吏・戶・禮・兵・刑・工の六部の尚書と左・右僕射とを合せて八座となす、唐は之に同じ。衛伯玉は檢校工部尚書なれば八座の一に居る。其の母ゆゑ之を八座太夫人といふ。〔二〇二〕楚宮 楚王の宮、巫山縣にあり、已に見ゆ。〔二〇三〕荆門 節日の名、已に見ゆ。〔二〇四〕荆門 山の名、荊州にあり。〔二〇五〕白帝 城の名、夔州にあり。〔二〇六〕雲偷 偷は盜む、人の知らぬまに潛に含むをいふ。〔二〇七〕碧海 荆州の廣き江水をさす、其の末流は海に入る。〔二〇八〕與報 我が爲めに彼に報ぜよ、これは柏別駕にむかひていふ辭なり。〔二〇九〕惠連 宋の謝惠連。謝靈運が從弟にて文才あり、今借りて作者の從弟社位に比す。〔二一〇〕詩不惜 我に贈る詩篇を愛惜するなかれ。一説に之を「我、吾が汝に贈る詩を惜むに非ず、老衰の故に別に一詩を寄する能はず」ととく、王維植・顧震、此の解を取れり。今從はず。〔二一一〕知吾 知れとは社位にむかひていふなり。

〔二一二〕斑鬢 斑は白、鬢は髪、老衰の故に斑髪を總て銀の如くなるをいふ。〔二一三〕總如銀 總て銀の如くなるをいふ。〔二一四〕吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

〔二一五〕社位 社位にむかひていふなり。

〔二一六〕從弟 從弟にむかひていふなり。

〔二一七〕行軍司馬位 行軍司馬位にむかひていふなり。

〔二一八〕蜀州 今四川省成都府漢州。

〔二一九〕柏二別駕 柏中丞の弟、別駕は州の屬官なり。

〔二二〇〕將中丞命 將命とは命令をもちてゆること、中丞は柏中丞。

〔二二一〕江陵 湖北省荊州府。

〔二二二〕起居 御機嫌伺ひをすること、其人の起居の安否如何を問ふなり。

〔二二三〕衛尚書 衛伯玉に檢校工部尚書を加ふ。

〔二二四〕太夫人 衛伯玉の母をいふ、漢の法にては列侯の母にしてはじめて

て太夫人と稱す、後世はひろくいふ。蓋し柏中丞と衛尚書とは從兄弟あひの關係に在るものなり。

のいとこにて伯玉が配下にて行軍司馬の役をつとめてゐる社位。〔二二五〕問俗 領内人民の風俗を問ふ、民情を觀察すること。〔二二六〕畫熊 不備の句、畫熊の車を馳すること頗りなるをいふ。從漢興服志に、三公列侯車飾、畫熊、伏熊、黑馬とみゆ。今借用す。畫熊は車の軾のところに熊の形象を畫するなり。〔二二七〕愛弟 柏二別駕をいふ。〔二二八〕傳書 中丞の手紙を先方へつたへる。〔二二九〕綵鷓 綵鷓は船をいふ、水神を厭するたため船首に鷓鴣を彩色にて畫し、別駕が乗りゆく船をいふ。〔二三〇〕遷轉 官位のうつること。〔二三一〕五州防禦使 代宗の廣德二年に饒・忠・浩防禦使を置き夔州に治す、もとは饒・忠・歸・萬の五州を領して荆南節度使に隸屬せしものなりと、柏中丞のとき夔州都督より防禦使に遷りしものとみえたり。〔二三二〕八座太夫人 八座とは主要なる官省八種をいふ、其の内容は時代により同じからず、隋の時は吏・戶・禮・兵・刑・工の六部の尚書と左・右僕射とを合せて八座となす、唐は之に同じ。衛伯玉は檢校工部尚書なれば八座の一に居る。其の母ゆゑ之を八座太夫人といふ。〔二三三〕楚宮 楚王の宮、巫山縣にあり、已に見ゆ。〔二三四〕荆門 節日の名、已に見ゆ。〔二三五〕荆門 山の名、荊州にあり。〔二三六〕白帝 城の名、夔州にあり。〔二三七〕雲偷 偷は盜む、人の知らぬまに潛に含むをいふ。〔二三八〕碧海 荆州の廣き江水をさす、其の末流は海に入る。〔二三九〕與報 我が爲めに彼に報ぜよ、これは柏別駕にむかひていふ辭なり。〔二四〇〕惠連 宋の謝惠連。謝靈運が從弟にて文才あり、今借りて作者の從弟社位に比す。〔二四一〕詩不惜 我に贈る詩篇を愛惜するなかれ。一説に之を「我、吾が汝に贈る詩を惜むに非ず、老衰の故に別に一詩を寄する能はず」ととく、王維植・顧震、此の解を取れり。今從はず。〔二四二〕知吾 知れとは社位にむかひていふなり。

〔二四三〕斑鬢 斑は白、鬢は髪、老衰の故に斑髪を總て銀の如くなるをいふ。〔二四四〕總如銀 總て銀の如くなるをいふ。〔二四五〕吾が斑鬢總て銀の如くなるを知れよ」と。

〔二四六〕社位 社位にむかひていふなり。

〔二四七〕從弟 從弟にむかひていふなり。

たび愛弟である柏二別駕が中丞の手紙を傳へるため新に鶴首の船をだされるのである。中丞は五州防禦使に遷官せられ、八座の太夫人である衛尚書の母堂の安否をたづねさせられる。臘節にあたって楚宮のある此地の上流からは荆門へ向つて水流を送りやる、白帝城のある此地の雲は早くも人の知らぬまに碧海の春げしきを含んでをる。別駕よ、謝惠連に比すべき吾が従弟の杜位に「こちらへよこす詩を惜むな」と報じていただきたい。また「自分の半白の鬢が今はすつかり銀のごとく白くなつたことを承知せよ」と報じていただきたい。

送鮮于萬州遷巴州

鮮于萬州が巴州に遷るるを送る

京兆先時傑、琳瑯照一門。

京兆時傑に先だつ、琳瑯一門を照らす。

朝廷偏注意、接近與名藩。

朝廷偏に意を注ぐ、接近名藩を與ふ。

祖帳排舟數、寒江觸石喧。

祖帳舟を排すること數なり、寒江石に觸れて喧し。

看君妙爲政、他日有殊恩。

看る君が政を爲すに妙なるを、他日殊恩有らむ。

【字解】「一」鮮于萬州。萬州の刺史鮮于吳。顏真卿が鮮于仲通の碑に曰く、仲通が子六人、皆令聞あり、叔を萬州刺史吳と曰ふ、其父の風あり、頗る史道に精し、萬州に牧となり、政績尤も異なり、詔ありて秘書監に遷され、ついで又改めて巴州に牧たり、と。即ち其人なり。萬州は夔州府の屬州なり。「二」遷巴州。上の顏碑に見ゆ。巴州は四川省保寧府巴州。萬州より西北遼州まで二百七十里、

遼州より又西北二百二十里にして巴州に至る。「三」京兆。蓋し鮮于仲通をさす。仲通京兆尹たり、其の弟李叔明も亦京兆尹たり。作者「來贈鮮于京兆」二十韻の詩(卷二の一四四頁)あり、仲通を指したればこも同様ならん。「四」時傑。同時の俊傑。「五」琳瑯。美玉、賢子弟をさす。「唐書」に曰く、李叔明、本姓は鮮于氏、兄仲通とともに京兆に尹となり御史大夫の秩を兼り、並に節制たり、又子昇とともに御史大夫を兼り、蜀人推して盛門となす、と。盧東美が鮮于氏冠冕頌序に曰く、仲通、天寶の末に京兆尹となる、弟叔明、乾元中に亦之を爲す、吳(即ち上述仲通の子)が兄並は工部侍郎となり、吳が子映は屯田郎兼侍御史となる、三世冠冕、海内の衆族たり、と。之によりて如何に鮮于氏に官員を出せしやを見るべし。「六」注意。意をそそぐ。「七」接近。近地をいふ。「八」名藩。地方の國は中央の守りとなる、故に之を藩といふ。「九」祖帳。送別の筵席のまぐ。「一〇」排舟數。しばしば舟を排列する、轉任頼りなればなり。

【題義】萬州の刺史鮮于吳といふ者が萬州から巴州へ遷されたのを送つた詩。此詩の作時は明かならず、仇氏之を大曆元年の後、二年の前に置けり。今之に従ふ。

【詩意】あなたの御先代鮮于京兆は當時の俊傑に先だちてすぐれた人であつたがそれから琳瑯の如き賢子弟が出て一門を照らしてゐる。(あなたもその一人だ。)あなたには朝廷もとくに注意して接近した場所に於て巴州といふ名藩を授與せられた。あなたは別筵を設けてしばしば舟をならべ、寒江の水は石にふれてやかましく音たててをる。あなたは政治をするのに妙であることをみると、將來特別の恩寵をうけてさらに榮轉せられることがおもひやられる。

奉送十七舅下邵桂

十七舅が邵桂に下るを送り奉る

絶域三冬暮、浮生一病身。

絶域三冬暮る、浮生一病身。

感深辭舅氏、別後見何人。

感は深し舅氏を辭するに、別後何人を見む。

縹緲蒼梧帝、推遷孟母鄰。

縹緲たり蒼梧の帝、推遷す孟母の鄰。

昏昏阻雲水、側望苦傷神。

昏昏雲水を阻つ、側望して苦だ神を傷しむ。

【字解】

【二】十七舅 十七は排行、舅は母方の叔父をいふ、作者の母は崔氏、この舅も崔某なり。【三】下邵桂 邵桂の地方へくだりゆく、くだるとは南下するをいふ、邵は邵州、今湖南省寶慶府邵陽縣、桂は桂州、今湖南桂陽府。【四】絶域 かけはなれた地域、

【題義】

母方のをち崔某が邵州桂州の方へと南下せんとするを送つた詩。大曆元年冬の作か。

【詩意】

このかけはなれた土地で冬が暮れかかる。このあてもなき人生に於て一つの病める身をもつた自分である。舅氏にわかれるとおもへば感が深い。わかれたあとで自分は何人と面會して心中を語らうか。あなたの往かるところは蒼梧山に葬られた舜帝の在るところでここからはよほど遠い。孟母の鄰居とおもうてゐた御一家がだんだん遠方へおしうつつてゆかれる。あちらはこことは昏昏と

くらつぱく雲や水をへだてるばかりだ。だから自分は身體をそばだててあちらをながめやつていとも

ころをいためるのである。

荆南兵馬使太常卿趙公大食刀歌

荆南兵馬使太常卿趙公が大食刀の歌

太常樓船聲嗷嘈

太常の樓船聲嗷嘈たり、

問兵刮寇趨下牢

兵を問ひ寇を刮りて下牢に趨く。

牧出令奔飛百艘

牧出で令奔りて百艘飛ぶ、

猛蛟突獸紛騰逃

猛蛟突獸紛として騰逃す。」

白帝寒城駐錦袍

白帝の寒城に錦袍を駐む、

玄冬示我胡國刀

玄冬我に示す胡國の刀。

壯士短衣頭虎毛

壯士短衣頭虎毛、

憑軒拔鞘天爲高

軒に憑り鞘を抜けば天爲に高し。

翻風轉日木怒號

風を翻し日を轉じて木怒號す、

【字解】 【二】荆南兵馬使太常卿趙公 唐制にては天下兵馬大元帥の下に前軍・中軍・後軍兵馬使あり、趙公は荆南の兵馬使なり。太常卿は太常寺の卿にて其の兼官なり。趙公は其の名明かならず。仇氏曰く、夔州は荆南節度に隸す、趙太常は寇を刮りて此に至りしは永泰元年崔旰の反せし時にあるべし。公(作者)が夔州に至りしは大曆元年の秋にあれば趙に夔州にて遇へるは必ず其年の冬に在らん。この時崔旰は平らぎしも、杜鴻漸は尙ほ蜀中にあり、荆南の兵も亦

冰翼雪澹傷哀孫 冰翼び雪澹きて哀孫傷む。

鏑鏢碧鬩鷓鴣膏 鏑鏢す碧鬩の鷓鴣膏、

鬼物撒振坑壕 鬼物撒振坑壕を辭す。

蒼水使者捫赤條 蒼水の使者赤條を捫る、

龍伯國人罷釣鼈 龍伯國の人の鼈を罷む。」

荊公迴首顏色勞 荊公首を迴らして顏色勞す、

趙公玉立高歌起 趙公玉立高歌して起つ、

環環結佩相終始 環を環め結佩して相終始す。

萬歲持之護天子 萬歲之を持して天子を護らむ、

得君亂絲與君理 君が亂絲を得て君が與に理めむ。

蜀江如線針如針水 蜀江線の如く針の如き水、

たまた歸らざりしなるべし、と。

【二】大食刀 大食は國の名、もと波

斯の西に在り、兵刀勁利にして其の

俗戰闘に勇なり。【三】太常 太常

卿趙公をいふ。【四】樓船 にかい

の附いた大船。【五】嗷嗷 かまび

すしき貌。【六】問兵 味方の兵の

様子を見まふ。【七】刮寇 刮は前

るなり、刮寇とは賊の勢を削りそぐ

こと。【八】趙下軍 趙はおもむ

く、下軍は關中名、湖北省宜昌府

の西二十八里にあり、これは下軍を

領て、更に上流にむかひしことをい

ふ。【九】牧田令奔 牧は州の長官

たる刺史をいひ、令は縣令をいふ。

出・奔とは趙公を田迎へるため奔り

出づるをいふ。【一〇】百戰 戦・令

等のいたす多くの戦。【一一】猛獸

突獸 たけきみづち、突出するけだ

もの、猛獸をさす。【一二】紛騰逃

荆岑彈丸心未已 荆岑彈丸心未だ已まず。

賊臣惡子休于紀 賊臣惡子を休すを休めよ、

魑魅魍魎徒爲耳 魑魅魍魎徒爲のみ。

妖腰亂領敢欣喜 妖腰亂領敢て欣喜せむや。

用之不高亦不庫 之を用ふる高からず亦た庫からず、

不似長劍須天倚 似す長劍天倚を須つに。」

吁嗟光祿英雄弭 吁嗟光祿英雄弭まむ、

大食寶刀聊可比 大食の寶刀聊か比す可し。

丹青宛轉麒麟裏 丹青宛轉麒麟の裏、

光芒六合無泥滓 六合に光芒ありて泥滓無からむ。」

紛はみだるる貌、騰逃はをどりあがりてのがれる。【一三】白帝寒城 冬の白帝城。【一四】錦袍 趙公の着けたる錦のわたれ。【一五】玄冬 玄はくろし、冬の色なり。【一六】胡國刀 胡國はえびすのくに、趙の大食國をいふ。【一七】壯士 刀を舞はす男。【一八】頭虎毛 首に虎の皮をかぶるゆゑに頭に虎の毛が生えた様に見える。【一九】邊軒のきばによる。【二〇】技鞘 刀をさ

やからぬきはなつ。【二一】天爲高 仇氏曰く、刀光上に閃くをいふ、と。天がうへの方に高く横はる如く感ぜらるるをいふ。【二二】翻風轉日 刀をふりまはすにより太刀風起りて

風をひるがへし太陽をも轉じうごかすことくみゆる。【二三】冰翼雪澹 四字の意詳ならず。蔡夢弼曰く、刀色の白きないふ、翼とは

張る貌なりと。趙彦材曰く、刀の盤薄寒冷の狀なりと。仇氏曰く、翼とは飛ぶ意なり、澹とは動く意なりと。仇氏は「冰翼び雪澹くし

とよますなり。今暫く仇注に従ふ。【二四】傷哀孫 哀れな孫をだす孫も刀威をおそれて心を傷める。【二五】鏑鏢 刺りつけ、磨く。

刺りつけるとは磨くことの度のつよさをいふならんか。【二六】碧鬩 鬩は鬩の長き瓶、碧は其の色、膏を盛る器。【二七】鷓鴣膏 鷓

判南兵馬使太常卿趙公大食刀歌

五九

之がために天もいつそう高く横はるかとおもはれる。太刀風の勢は風をひるがへし白日を轉動せしめて樹木も怒り號ぶ。刀光の冷さは氷がとび雪がうごくかと怪まれて哀鳴する猿の心さへ慄ましめる。碧色の長頸の瓶につめてある鸚鵡の膏で刻みこまんばかりに磨きをかけたこの刀は、切先も刃もきらきらとあきらかたで澄みきつた秋の水をも無視するばかり、坑や壕にすむ魔物も逸早く逃げだしてしまふ。「蒼水使者」ともいふべき外來の渡航者がこの刀の赤紐を取つて之をもちきたすときには古傳説にある龍伯の國の巨人でも懼れて、鼈を釣ることをやめてしまふ。」さて荆南の芮公はこちらをふりむいて騷亂について心配な顔付をなし、軍國の憂を分擔して世を救はんために賢人豪傑を用ひられる。その一人として趙公は潔白なすがたで高歌して起ちあがり、この刀の刀環をとりて身に佩び終始はなさず、永久この刀を持つて天子をお護りし、絲のもつれにあへば直にそれをたちきつて其の亂れをなほさうと心がけ、蜀の江水の如きは針や線の様な細小なもの、荆山の峯も彈丸の様なもので、なんでもないものであり、どちらもたやすく治め得ると信ずる心がやますに居られる。だから世上の賊臣たり悪子たるものも紀律を犯すことをやめよ。魑魅魍魎のともがらもなにもはたらきがでるわけのものではない。亂賊の領、妖怪の腰、決して安心してよろこんで居られるはずはない。趙公は高からずひくからず適當にこの刀を使用せられる。この刀は昔話にある様な天外に倚らなければならぬといふ様な馬鹿げた長劍とは似てもつかぬものである。」ああ光祿(趙公)よ、あなたに由つて世上の

英雄たちの騷亂は止むであらう。あなたの才にこそこの大食の寶刀は比すべきものである。いづれあなたの姿は麒麟閣のうちに丹青を以て宛轉にゑがかれ、その武勳はこの刀のごとく宇宙にかがやきわたつて、どこにも濁亂の氣が無い様にさせられることであらう。」

王兵馬使二角鷹 王兵馬使が二角鷹

悲臺蕭瑟石龍嵒 悲臺蕭瑟石龍嵒たり、
 哀壑杈枒浩呼洶 哀壑杈枒浩呼洶たり。
 中有萬里之長江 中に萬里の長江有り、
 迴風滔陷日孤光動 迴風滔陷日孤光動く。
 角鷹倒翻壯士臂 角鷹倒に翻る壯士の臂、
 將軍玉帳軒翠氣 將軍の玉帳に翠氣軒る。
 二鷹猛腦條徐墜 二鷹猛腦條徐に墜つ、
 目如愁胡視天地 目は愁胡の天地を視るが如し、
 杉雞竹兔不自惜 杉雞竹兔自ら惜まず、

王兵馬使二角鷹

【字解】 王兵馬使 兵馬使

王某。前篇に趙太常、荆南の芮公の命を承けて夔州に来れることを敘したり。此篇に荆南芮公得將軍の句あればこの王某も亦疑ふらくは同時に亂を討たんがため來りしものとおもはる。黃鶴が注に補伯玉が傳を引き、伯王大屠の初、母の喪にあひ、朝廷王昂を以て其の任に代ふ、伯玉將吏を諷して詔を受けず、遂に起復再任す、王は昂に非ざるを得んや、といへるが、王某が果して王昂なりや否は不明なり。 角鷹 頂に毛

溪虎野羊俱辟易。

鞬上鋒稜十二翻。

將軍勇銳與之敵。

將軍樹勳起安西。

崑崙虞泉入馬蹄。

白羽曾肉三狡狴。

敢決豈不與之齊。

荆南芮公得將軍。

亦如角鷹下朔雲。

惡鳥飛飛啄金屋。

安得爾輩開其羣。

驅出六合梟鸞分。

六合より驅出して梟鸞分るることを。

角ある「たか」。【三】 龍臺 悲風の吹く高臺、曹植が詩に高臺多悲風とみゆ。【四】 驚恐 風のさびしく吹くさま。【五】 龍臺 高大なる貌。【六】 哀慳 かなしく感ぜらるるたに。【七】 檉柳 樹木の齊しからざる貌。【八】 浩呼 大呼なり、軍衆が鷹の氣勢を添へるためにさけぶこみないふ。仇注に、樹夾、泉崖として水の音とみたるも、余は従はず。【九】 洶 水の湧きたつさま、呼聲をたとへていへり。【一〇】 暹風 めぐりて吹く風。【一一】 陷日 原文に酒日とあれど酒を陷に作れる本あり、陷に従ふ、陷日とは峽間におちこんだ太陽をいふ。酒字に従ふ者は曰く、酒とは酒天の酒なりと。然らば天まで及びる日光の満となりて下の孤光の語と矛盾すべし。故に従はず。【一二】 孤光 一片の光といふが如し。江の水面の日光をいふ。【一三】 側翻 壯士臂 棄がれてある場所から身體を顛倒し翻

へして壯士の臂のうへにとまる。この臂から空へとぶなり。【一四】 將軍 王某をさす。【一五】 王帳 王帳、りつばなまく。【一六】 鞬 鞬はたかくあがること、鞬氣は山翠・空翠などの義ならん。此の語は下の語に縁をなす。仇氏は之を鷹の毛色とみたり、今従はず。【一七】 鞬 鞬、たけき頭つき。【一八】 鋒稜 鋒は鷹の足をつなげる「さなだひも」、このひもがそろりとおちるとは、鷹が飛び得る状態に置かれしなり。【一九】 愁胡 愁ひ顔の胡人、鷹の目を愁胡にたとへたるは晉の孫楚が鷹賦に見ゆ。黃生が注には後漢の王延壽が魯靈光殿賦の胡人遙集於上楹、狀若愁愁於危處を引きて更に其の原とせり。【二〇】 朔雲 鷹の飛びたさんとする様子。【二一】 朔雲 頭に長さ黄毛あり、冠と頰とは青く、常に杉樹の下に居るものなりと。【二二】 竹兔 野兔の如くにして小さく竹の葉を食するものなりと。【二三】 不自惜 自己の身を惜まぬ、たべられるものと覺悟してなるをいふ。【二四】 溪虎野羊 溪に居る虎、野にゐる羊。【二五】 辟易 顔師古曰く、「開張して其の處を易ふるなり」と。驚怖してあとしざりすること。【二六】 鞬上 鞬は臂捍(弓小手)なり。壯士の臂を保護するもの。この二字鷹の末に臂より離れざるさまなり。【二七】 鋒稜 鞬の尖端のするどさをたとへいふ。【二八】 十二翻 翻は翼の内面の「たちばね」、其の翼特に勁きもの、左右各六枚あり。【二九】 與之敵 之は鷹をさす、敵は四敵、ひとしきこと。【三〇】 樹勳 いさをしを立てる。【三一】 安西 安西都護府の地方、安西は新疆省庫車(卷二の八一頁參看)。【三二】 崑崙 山の名、西にあり。【三三】 虞泉 即ち虞淵、日の入る所とせられしところ、「淮南子」に見ゆ。【三四】 入馬蹄 將軍の馬蹄の下に入りたり。將軍が其の地方を蹴散らしてあるさしこと。【三五】 白羽 箭ないふ。【三六】 曾肉 箭を射し結果それに肉が附着せしをいふ。【三七】 狡狴 からじし。【三八】 敢決 勇果果決。【三九】 與之齊 鷹とひとし。【四〇】 荆南芮公 即ち衛伯玉、前篇「大食刀歌」をみよ。【四一】 下朔雲 朔雲は北方の雲。【四二】 惡鳥 時の惡人等を比す。【四三】 啄金屋 金屋は黄金を飾りし家屋、啄とはその屋上にて物をついばむなり。【四四】 安得 希望の辭、次句までにかかる。【四五】 爾輩 角鷹の徒衆、即ち將軍の如き輩をいふ。【四六】 開其羣 其とは惡鳥をさす。【四七】 六合 上下四方。【四八】 梟鸞分 梟は「ふくろふ」、母を食ふといふ惡鳥なり。鸞は鳳の類、善鳥なり。分は分別する。

【題義】 兵馬使王某が二つの角鷹を觀て威を殺したる詩。大曆元年の作ならん。

【詩意】高い臺に悲しげな風がさびしく吹いて石が高くつもつてゐる。樹木が不揃ひに生えた哀れげな壑に軍勢の大きな掛け聲が波のわきたるごとくに起る。そこには萬里の長江が横はり、風が吹きめぐり、太陽がおちこんでさびしげな日の光が波面にうごいてゐる。角鷹が身をさかさまにひるがへして繁がれた場所から壯士の臂へと止まる。將軍の玉帳には山の翠氣があがる。二匹の鷹はたけだけしい頭つきをする。その脚もとにはさなだ紐がそろりと墜ちる、鷹の目つきは心配しつつある胡が天地を見つめてゐるのとよく似てゐる。この鷹をみては杉雞や竹兔は撃たれるものと覺悟をきめてゐるし、溪の虎、野の羊もみなしりごみをする。弓小手のうへのするどい十二枚の翮(な)んとそのいさましいことよ、王將軍の勇銳さは之と匹敵するものである。將軍は安西から起つて武勳を立て、崑崙や虞泉は馬蹄で蹴ちらしたところであり、かつては白羽箭を以て三匹の狡狴を射抜いて之に肉づけたほどだから、その勇決果敢なことはこの鷹とひとしくはない。荆南の芮公が將軍を得られたのは、ちやうど角鷹が北方の雲からおりて来た様なものである。いま悪い鳥どもがしきりに飛んで黄金屋上に餌あさりをしてゐるが、どうか汝角鷹の如きものどもを得て悪い鳥どもの羣をおしひらき、彼等を天地の外に驅逐して、梟と鸞とを區別させたきものである。」

見王監兵馬使說近山有白黑二鷹羅者久取竟未能得王以爲

毛骨有異他鷹恐臘後春生鶩飛避暖勁翻思秋之甚眇不可見

請余賦詩二首

王監兵馬使が説くを見る、近山に白黒の二鷹有り、羅者久しく取らむとするに、竟に未だ得る能はずと、王以爲へらく毛骨他鷹に異なる有り、恐らくは臘後春生せば、鶩飛して暖を避け、勁翻秋を思ふの甚しき、眇として見る可からざらむと、余に請ひ詩を賦せしむ 二首

雪飛玉立盡清秋。雪飛玉立清秋盡く、

不惜奇毛恣遠遊。奇毛を惜まず恣に遠遊す。

在野只教心力破。野に在り只だ心力をして破れしむ、

于人何事網羅求。人に于て何ぞ事とせむ網羅に求めらるるを。

一生自獵知無敵。一生自ら獵す敵無きを知る、

百中爭能恥下鞫。百中能を争ふ下鞫を恥づ。

鵬礙九天須卻避。鵬九天を礙ぐ須らく卻避すべし、

兔藏三窟莫深憂。兔三窟に藏す深く憂ふること莫かれ。

【字解】(一) 見王監兵馬使說

唐制に監の字を附したる官名甚だ多し。此に王監といふは、何の監なるや詳ならず。嘗て某監なりしものならん。此の人前の角鷹の詩の王某と同人なるべし。見説は其の人といふなきにの意。(二) 羅者 鳥をあみにて捕ふるもの。(三) 久取 ながいあひだ取らんとするに。(四) 眇 是るかなる貌。(五) 雪飛玉立 雪の如く飛び玉の如く立つ。雪・玉

は鷹の毛羽の純白なるをたとふ、飛は動をいひ、立は静をいふ。【六】 肅清秋 氣清き秋の終るときをいふ。【七】 奇毛 尋常に非ざる毛。【八】 在野二句 余は舊解を取らず、鄙見によりてのふ。在野とは此の鷹が原野に在るをいふ。【九】 心力破 心力は鷹の心力なり、破はつかれてこぼされるをいふ。鷹の性は天に向つて飛ばんとするものなるに野におかれるれば其の心破壊せらる。【一〇】 子人 他人に於て。【一一】 何事 それを目的とすることなし。【一二】 網羅求 他人から羅取せらるることを求める。換言すれば他人から採用せらるるを願ふなり。【一三】 自強 他人の力によらず自力にて強をなす、庾信が詩句に野鷹能自強とあり。【一四】 百中争能取 下驥 取 下驥 而争 百中之能 之に同じ。百中は「戰國策」の楚の婁由基が柳葉を去ること百歩にして之を射るに百發百中とあるに本づく。百のもの百まであたるをいふ。争能とは技能の優劣を争ふなり。下驥とは壯士の弓小手より下りて獲物を捕つたをいふ。【一五】 鷹 鷹 九天 鷹は大鳥、「莊子」にみゆ。鷹とは鷹の翼はあまりに大なるを以て天をしまたぐるなり。九天は九重九層の天とする立體的考へ方と、中央及び八方の天とする平面的の考へ方と二種あり、作者は前者の意にて用ひしならん。【一六】 卻遊 しりぞきさく。【一七】 兔 兔 三窟 狡兔三窟ありて僅に其の死を免るることを得と「戰國策」に見ゆ。【一八】 莫深憂 鷹はこんな兔の如き小さきものには眼もくれぬ故に心配に及ばぬといふなり。

【題義】 某監であつて現に兵馬使である王某君のいふことをきくと、近所の山に白鷹と黒鷹とが居て、羅をかけて鳥を捕る者が長いあひだそれを取らうとしてゐるがいまだにとれぬといふ。王君の考へては、その鷹は毛も骨も他の鷹とちがつたところがある様だ、もし鷹節がすぎ春になつたら、鷹は飛びあがつて暖氣を避け、そのつよい 翮をもつてひどく秋の涼しさを慕ふ結果としてはるか遠方へ去つてしまふて見ることができぬであらう、と。それで自分にしたのんでその鷹の詩をつくらせた。この第一首は白鷹についてのべ、暗に自己を之に比したり。大暦元年の作ならん。

【詩意】 ここに一匹の白鷹がある。それは静止してをれば玉のごとく立ち、動くときは雪のごとく飛ぶが、すすしい秋がなくなればその非凡な毛羽を惜むことなく勝手に遠方へ遊びにでかけてしまふ。彼(たか)は本来山にあり天に飛ぶ性をもつたものであるから原野に居れば心力を破壊するのみであり、他人關係に於ては他人から網羅で取つて用ひてもらひたいとつとめる様なことはいらぬのである。彼は生涯自力で強をなすもので、その點では何ももの敵するものがないことを自ら知つてをり、鷹使ひの弓小手から舞ひ下つて他鷹と百中の能を争ふことは恥辱だとおもうてゐる。この鷹にであうては九天をさまたぐるほどの大きな翼をもつた鷹もわきへよけねばなるまいが、三つの窟を用意しておいてそこに藏れる様なちつばけな兔などはこの鷹の眼中に無いからひどく心配するには及ばぬ。

【二一】

【二二】

黑鷹不省人間有。 黑鷹省みず人間の有なるを、
 度海疑從北極來。 海を度りて疑ふらくは北極より來る。
 正翮搏風超紫塞。 正翮風に搏ちて紫塞を超え、
 玄冬幾夜宿陽臺。 玄冬幾夜か陽臺に宿する。
 虞羅自覺虛施巧。 虞羅自ら覺ゆ虚しく巧を施すを、

見王監兵馬使說清余賦詩二首

【字解】 【二一】 不省 省は察なり。 どう考へてもさやうにはみえぬをいふ。 【二二】 人間有 有は所有なり。 人間に有るもの義。 【三】 正翮 たちばねをまつすぐのばす。 【四】 搏風 搏はうちつけること。 【五】 超紫塞 秦、長城を築くに土色皆紫

春雁同歸必見猜 春雁同じく歸らば必ず猜せられむ。

萬里寒空祗一日 萬里寒空祗だ一日、

金眸玉爪不凡材 金眸玉爪不凡の材。

なり、よりて之を紫塞といふと。紫塞は雁門を指すといふ説あり、雁門と限るにおよばず。趙とは之をこえて南に來りしをいふ。【六】 幾夜、い

ざらんといふに在るなり。【七】 關塞、即ち楚の時、巫山神女の往來せしところ、巫山縣の西北にある陽雲臺。作者借りて夔州の地をいふ。【八】 虞羅、虞は虞人、山澤を掌る役人、虞羅は虞人のあみ。【九】 自覺、虞人みづから知る。【一〇】 虛施巧、巧を施すとはうまくあみの仕掛けするをいふ、虛とは驚がそれにかからぬをいふ。【二】 春雁同歸、春は雁が南より北へかへる。同歸とは驚が雁とおなじく北へかへるをいふ。【三】 必見猜、驚が雁からそれられる。【四】 萬里寒空、南より寒外までの遠きそら。【五】 金眸、金びかりする目。【六】 玉爪、玉の様な白く堅きつめ。【七】 不凡材、非凡の材。

【題義】 この第二首は黑鷹についてのべ、亦た自己を比し、且つ北歸の情を寓したり。

【詩意】 黑鷹などいふものは人間に有る所のものとおもへぬが、有るとすればそれは疑ふらくは北極から海を渡つて來たものであらう。彼(たか)はまつすぐに翮を張つて風のうちつけて長城をこえてきて、冬のあひだいくばん南方の陽臺の地(夔州)に宿つたか。この鷹を羅師が捕へようとしてもかれは巧を施すことのむだなことをさとするであらう。(あみなどにかかるものではない)。また春の雁とつれだつて北へ歸るならば雁のため自己を害しでもするかと猜疑心を以てむかへられるであらう。この鷹にとつては萬里の寒空を飛ぶことはたつた一日の仕事である。じつに金眸玉爪をそなへた非凡の材ある鳥である。

玉腕驪 【原注】 江陵節度衛公馬也。

玉腕驪 【原注】 江陵の節度衛公が馬なり。

聞說荆南馬 尙書玉腕驪 聞說荆南の馬、尙書の玉腕驪。

驂驪飄赤汗 踟躕顧長楸 驂驪赤汗を飄す、踟躕長楸を顧る。

胡虜三年入 乾坤一戰收 胡虜三年入る、乾坤一戰に收む。

舉鞭如有問 欲伴習池遊 鞭を舉げて如し問ふ有らば、習池の遊に伴はむと欲す。

【字解】 【一】 玉腕驪、腕の白い栗毛馬。【二】 江陵節度衛公、江陵は即ち荊州江陵縣、江陵節度は荊南節度使をいふ、衛公は衛伯玉。伯玉は廣德元年に節度となる。【三】 尙書、伯玉は檢校工部尙書なり。【四】 驂驪、吳郡賦に驂驪の語あり、李善が注に相隨驪、逐來多駝といへり。驂驪は驂驪と同義。仇氏は飛騰迅疾之貌なりといへり。【五】 踟躕、踟はせぐくまる。躕は足を果ゆる。【六】 長楸、せのたかき「かやし」の木、そのなみ木をいふ。曹植が詩にいふ、走馬長楸間と。【七】 胡虜三年入、胡虜とは史思明・史朝義・吐蕃をいふ。三年とは乾元二年・上元二年・廣德元年の三年、入は侵入。若唐書に曰く、乾元二年衛伯玉、史思明を摩訶大に之を羅子坂に破る、功を以て神策軍節度に遷さる。上元二年大に史朝義を永寧に破り、河東郡公に封封せらる。廣德元年冬、吐蕃京師に寇す、乘輿陝に幸す、伯玉幹略あるを以て江陵に節度たらしめ、陽城郡王に封す。【八】 舉鞭如有問、伯玉この驪にのり、鞭をあげて作者の近狀を問ふをいふ。晉の山簡と其の愛將葛洪との故事を用ふ。襄陽記に曰く、峴山の南、習都が大魚池あり、山簡つれに此の池に臨みて

飲み大醉して歸る。常に曰く、此、我が高陽池なりと。城中の小兒之を歌ひて曰く、山公去、何處、來至高陽池、日夕倒載歸、醉町無所、知、時時能騎馬、倒著、白接羅(帽子の名)、舉鞭問葛強、何如并州兒、と。【七】 飲伴 作者が伴はんと欲するなり。【二〇】 習池遊 上に見ゆ。作者の「寄嚴都公詩」第二首(卷十三の五四頁)の習池未覺風流盡の句解を見よ。社説に「飲問は馬を問ふなり、飲伴は馬に代りて對ふるなりといへるは穿ちすぎたる説なり。從ひがたし。

【題義】 荆南節度使で江陵に駐在してゐる衛公伯玉の馬である玉腕驪を詠じた詩。大暦元年の作ならん。

【詩意】 聞くところによると荆南の名馬に衛尙書の玉腕驪といふものがあると。その馬はかつて驂驪と馳逐して赤き汗をひるがへしてはたらいだが、いまはせぐまき足をかさねていたづらに長楸の間をふりむいてそこを走つてみたいとおもつてゐるげである。この馬たるやかかつて胡虜が三回も侵入したときただ一戦で天地を我が手に收めたものである。尙書が若しこの馬に騎つて鞭をあげ、葛強とうたと問ふならば、葛強たるもの(自分)はもちろん習池の遊びのおともをしたいとかんがへてゐるものである。

醉爲馬墜、諸公攜酒相看

醉うて馬より墜つるを爲す、諸公酒を攜へて相看る

甫也 諸侯老賓客。甫也は諸侯の老賓客、

【字解】 【一】 馬墜 馬よりおつ

罷酒酣歌拓金戟。酒を罷めて酣歌金戟を拓る。
騎馬忽憶少年時。馬に騎りて忽ち憶ふ少年の時、
散蹄迸落瞿唐石。蹄を散じて迸落す瞿唐の石。
白帝城門水雲外。白帝城門水雲の外、
低身直下八千尺。身を低くすれば直下八千尺。
粉堞電轉紫游韁。粉堞電のごとく轉す紫游韁、
東得平岡出天壁。東平岡の天壁を出づるを得たり。
江邨野堂爭入眼。江邨野堂争ひて眼に入る、
垂鞭鞞控凌紫陌。鞭を垂れ鞞を控えて紫陌を凌ぐ。
向來皓首驚萬人。向來皓首萬人を驚かす、
自倚紅顏能騎射。自ら倚る紅顏能く騎射せしに。
安知決臆追風足。安んぞ知らむ臆を決せる追風の足、
朱汗驂驪猶噴玉。朱汗驂驪猶ほ玉を噴くに、

醉爲馬墜諸公攜酒相看

【一】 諸公 諸文なり。【二】 甫也 甫は作者の名。【三】 諸侯 柏都督をいふ。【四】 驪酒 已に飲了るをいふ。【五】 拓金戟 拓は托なり、持なり、手にとること。金戟は金にてかざりしはこ。【六】 散蹄 馬をのりまはすこと。【七】 瞿唐石 瞿唐峽の巖路を馳するにより、その石を落すなり。【八】 水雲 江上の雲をいふ。【九】 低身 馬によりそひて望見するさま。【一〇】 直下八千尺 眼下一直線に八千尺の深さあり。【一一】 粉堞 白壁のりの城の女牆。【一二】 電轉 速かなるをいふ。【一三】 紫游韁 紫絲にてつくりしたげな。游とはひきしめざるをいふ。【一四】 平岡出天壁 天壁とは崖の直立せるさまをいふ。その壁から外へ出ると平らな岡があるなり。【一五】 争入眼 馬にて走るゆ

不虞一蹶終損傷。虞らざりき一蹶し終に損傷せむとは。
 人生快意多所辱。人生意を快にすれば辱めらるる所多し。
 職當憂戚伏衾枕。職として當に憂戚衾枕に伏すべし。
 況乃遲暮加煩促。況んや乃ち遲暮煩促を加ふるをや。
 朋知來問腆我顏。朋知來り問ふとき我が顏を腆くし、
 杖藜強起依僮僕。藜を杖き強ひて起きて僮僕に依る。
 語盡還成開口笑。語盡きて還た成す口を開きて笑ふを、
 提攜別掃清谿曲。提攜別に掃ふ清谿の曲。
 酒肉如山又一時。酒肉山の如き又た一時、
 初筵哀絲動豪竹。初筵哀絲豪竹を動かす。
 共指西日不相貸。共に指す西日の相貸さざるを、
 喧呼且覆杯中滌。喧呼且つ覆ふ杯中の滌。
 何必走馬來爲問。何必走馬來して來つて爲に問はむ、

五外物の姿が吾が視野に入り来る。
 【七】 鞵。馬の口鞵を垂れる。是亦手鞵をひきしめぬ様子。【八】 波。紫陌はうつくしき街路をいふ。波とは威張つて通りぬけるをいふ。【九】 向來。これまで。【一〇】 皓首。しらがあたま、老體をいふ。【一一】 自倚。倚は倚頼、自己をたよりのみにする。自負心あるをいふ。【一二】 紅顏。少年時代をいふ。【一三】 安知。意外にも、この二字は下の「終損傷」にまでかかる。【一四】 決。其の義未だ詳かならず。趙彦材は決意。決意於胸臆といひ、王注は決意。意也とあるは決意。決心などの義とみたるが如し。今暫く之に従ふ。【一五】 追風足。追風は秦の始皇の七名馬の一。風を追ひかくる如くはやく走る馬なり。【一六】 聽。飛塵の騎、前篇の句解をみよ。【一七】

君不見嵇康養生

君見すや嵇康養生するも殺戮せらるる

被殺戮

を。

【一】 快意。あまり興に乗ると。【二】 職。主としての意。【三】 遲暮。晩年をいふ。【四】 鞵。厚なり。【五】 依僮僕。しもべによりすがること。【六】 朋知。朋友知己。【七】 來問。見舞ひにきてくれる。【八】 開口笑。大口をあけて笑ふ。語は「莊子」にみゆ。【九】 提攜。別知等と手をたづさへる。【一〇】 別掃。特別に掃除をする。【一一】 清谿曲。曲は隈。【一二】 又一時。またひとしきり。【一三】 初筵。宴席の初時より。【一四】 哀絲。かなしげな絲の音。【一五】 動豪竹。動は音をうごかすをいふ。豪竹は大管、大きな笛。【一六】 共指。みながともに入り目を指す。【一七】 西日。西に没する太陽。【一八】 不相貸。日の光りをこちらのために貸し與へて長びかせてくれぬ。【一九】 且覆杯中滌。仇氏は前の「小至」の詩の且覆掌中杯の句に注して、覆杯には不飲と盡飲との二義ありといひ、この馬鞍の詩の覆杯は盡飲の義なりとせり。余は此の詩の覆杯も亦杯を伏せしむること、即ち停飲の義なりと考ふ。滌は、こすこと、こしたものを即ち酒をいふ。【二〇】 走馬。朋知についていふ。【二一】 來爲問。爲は「我がために」の意。【二二】 嵇康。魏末に嵇康「養生論」を著はせしが鍾會に讒せられ東市に刑殺せらるる。

【題義】 酔ひて馬から墜ちたところ、朋友諸君が酒をたづさへて見舞ひにきてくれた、それでこの詩を作つた。此の詩年代考へがたし。又詩中の別掃清谿曲の語によりて察すれば西關時代の作に非ずして漢西移居の後の作なるやも知れず。疑を存す。

【詩意】 自分は地方長官の老いたる客分であるが、酒を飲み了つてから酔ひ氣嫌で歌をうたひながら鞍を手にして、馬にうちまたがるや急に少年時代のことをおもひだし、へなに、やつてみせるぞといふ

意氣込みで) あちこちと馬を走らせて瞿唐峽の崖石をばらばら落とさせた。水雲の外に高くそびゆる白帝城の城門のあたりまでいつて、そこで身を低めて俯視すると真下は一直線に八千尺の深さもあつた。それでもかまはず紫の手綱をあやつつて白塗りの女牆に沿うて電の如く轉走すると、やつと平な岡地があつて高い崖壁の間からぬけだすことができた。それから江そひの村や田野の家がきそつて自分の眼にはひつてき、遂に鞭を垂れ馬の口勒をたらしめて美しい街路を得意で飛ばした。自分しらがあたまになつてもこれまで多くの人人を驚かしたもので、自分はまだ紅顔の少年時代に騎馬射弓ができたことをあてにしてゐたのだ。ところが意外にも意を決して驅けてゐた追風馬の足は、汗だくなつて口から珠の泡をふいてゐながら、ついうつかり物にけつまづいて、そのため自分は怪我をするることになつてしまつた。人生といふものは興に乗りすぎると恥辱をうけることが多いものである。こんな始末だから自分は主としてしんばいしつとも寢床に臥てゐるべきだ。晩年に心のうるささが加はつてゐる際にはなほさらのことだ。そこへ朋友等が見舞ひに来てくれた。見舞はれてみれば臥てもをられず、面の皮を厚くして藜の杖をつき僮僕力によりすがつて無理に起きあがる。ひとしきり話がすむと例によつて大口をあけて笑ひ、特別に掃ききよめた清い溪川のほとりへ手をたづさへて出る。宴席の初からあはれた緑の音をひき鳴らさせ大きな笛を吹きいださせ、酒も肉も山の如く積みあげてしばらくさかもりをする。そのうちに太陽は容赦なく西に没するので、みんながあれよとばかり

それを指して、やかましく聲をたてながらも酒のはひつた杯を伏せる。さて自分が馬からおちたのでみんなが馬を走らせて見舞ひにきてくれたが、よく考へてみるとそれほどにしてもらはなくてもよかつたのだ。なせかといふに、かの嵇康は養生論をかいて長生きするつもりであつたらうが殺されてしまつたではないか。壽夭は天命である。馬からおちたから死ぬとはかぎらぬのである。」

覆舟二首

覆舟二首

巫峽盤渦曉 黔陽貢物秋

巫峽盤渦の曉、黔陽貢物の秋。

丹砂同隕石 翠羽共沈舟

丹砂隕石に同じ、翠羽沈舟と共にす。

鞞使空斜影 龍宮闕積流

鞞使斜影空しく、龍宮積流に闕つ。

篙工幸不溺 俄頃逐輕鷗

篙工幸に溺れず、俄頃輕鷗を逐ふ。

【字解】(一) 覆舟、ひっくりかへつた舟。(二) 盤渦、水のうづまき。(三) 黔陽、重慶府彭水縣。(四) 貢物、宮廷へのみつぎもの。下の丹砂・翠羽等をいふ。(五) 丹砂、礦物の名、久しく之を服すれば神明に通じ不老輕身なりと。(六) 隕石、空から地上におつる石、こゝは水底に向つておつるなり。(七) 翠羽、翡翠・翠鳥などいふ鳥の羽。(八) 鞞使、旅程にある使者、貢物の世話をし京師へのぼる役人なり。朱鶴齡は蓋し方士の輩ならんといへり。(九) 斜影、舟がかへりしとき横にかたむいた使者の身體の影。(十) 篙工、舟夫。篙、舟をつかふ船夫。(十一) 俄頃、にはかに、しばらくのまじ。

【題義】舟の顛覆せしを見て作れる詩。年代不明。

【詩意】それは巫峡で江流がうづを巻いてゐる。曉のこと。黔陽からみやこの方へ貢物をもつてゆく秋のことだ。(舟がひつくりかへつた)。舟に載せてあつた丹砂は隕石が地上におちる様におち、翠鳥の羽は沈んだ舟ともろともに沈んでしまつた。旅程の中途に在る貢物率領の役人は横むきになつたかとおもふとそのすがたは消えてしまひ、龍宮は積流の奥に閉ぢられた。船頭だけは幸に溺れずにすんで、彼にはかに水上に浮いて鷗を逐ひたてて泳ぎだした。

〔一〕

〔二〕

竹宮時望拜。桂館或求仙。

竹宮時に望拜す、桂館或は仙を求む。

姪女凌波日。神光照夜年。

姪女凌波の日、神光照夜の年。

徒聞斬蛟劍。無復鬪犀船。

徒に聞く斬蛟の劍、復た鬪犀の船無し。

使者隨秋色。迢迢獨上天。

使者秋色に隨ひ、迢迢獨り天に上る。

【字解】〔一〕竹宮、竹林ある宮ならん。漢の武帝神光を望拜せし宮にして祠壇より三里離れしところに在りしといへり。漢書神光志に曰く、正月上辛、事な甘泉の園丘に用ふ。昏より祠りて明に至る。夜常に神光あり、祠壇に集まる、天子(武帝)竹宮よりして望拜す。百官祠に侍る者數百人、皆肅然として心動く、と。〔二〕望拜、上にみゆ。〔三〕桂館、桂樹をうみし館ならん。漢の武帝が神仙をまつために設けしもの。漢書郊祀志に曰く、公孫卿曰く、仙人は樓閣を好む、と。是に於て上(武帝)長安に飛廉、桂館を作り、

甘泉に益壽、延壽の館を作らしめ、船をして節を持し具を設けて神人を候せしむ、と。〔四〕姪女、丹砂の中にある汞(水銀)を稱す、鍊金家の術語なり。〔五〕凌波日、凌波の二字は洛神賦より借り来る、こはた沈没せしことに用ふ。日は時の意。〔六〕神光照夜、神光照夜は上の武帝神を祠る條にみゆ。年とは時の意。〔七〕斬蛟劍、呂氏春秋にいふ、荆人伏飛、寶劍を得たり。江を渡るとき中流にして兩蛟舟を繞り舟ほとんど渡せんとす、伏飛劍を抜き蛟を斬る、乃ち濟ることを得たり、と。〔八〕鬪犀船、晉の温嶠、牛渚磯に宿す、水深くして測る可からず、世に云ふ、其の下に怪物多しと、船邊に犀の角を懸やして之を照らす、須臾にして水族火に覆はれ奇形異狀なるを見る、と。〔九〕使者、前篇に見えたる蜀使とおなじもの。〔一〇〕迢迢、はるかなる貌。〔一一〕獨上天、獨とは天子にかまはず一人にての意。

【題義】この第二首は時の天子の仙を求むることをそしれり。

【詩意】今、天子は漢の武帝の様に竹宮に於て時として神を望み拜せられ、また桂館に於て或は仙をお求めになる。あちらで神光が夜を照らすの時は、即ちこちらで姪女の水銀が水底へ沈んだ時である。劍で水中の蛟を斬つたといふも昔はなしに聞くばかりであり、犀の角をもやして水怪を照らした船も今は無い。だからせつかく貢物を率領する使者も秋げしきとともにただひとり天へのぼりゆいてしまつた。

送李功曹之荆州充鄭侍御判官重贈

李功曹が荆州に之きて鄭侍御が判官に充てらるるを送る、重ねて贈る

會聞宋玉宅。每欲到荆州。曾て聞く宋玉が宅、毎に荆州に到らむと欲す。

送李功曹之荆州充鄭侍御判官重贈

此地生涯晚。遙悲水國秋。

此の地生涯晩る、遙に悲む水國の秋。

孤城一柱觀。落日九江流。

孤城一柱觀、落日九江の流。

使者雖光彩。青楓遠自愁。

使者光彩ありと雖も、青楓遠くして自ら愁ふ。

【字解】 〔一〕 李功曹 功曹は官名。 〔二〕 鄭侍御 侍御は侍御史、官名なり。 鄭審をいふか。 〔三〕 判官 侍御史の屬官なり。

〔四〕 重韻 之によれば別に先きに贈れる詩篇ありて亡佚せしとみゆ。 〔五〕 宋玉宅 卷十七「詠懷古跡」詩の題解、及び同詩第二首

「江山故宅」の句解をみよ。 此れ江陵城北三里にある宅をさす。 〔六〕 此地 夔州をさす。 〔七〕 水國 荆州をさす。 〔八〕 孤城 荆州

の城をさす。 〔九〕 九江 「尚書」の禹貢篇の注によれば江は荆州の界に於て分れて九道となるといひ、應劭の漢書地理志の注には江は潯陽より分れ

て九道となるといへり。 九道江水の名は記載によりて同一ならず。 潯陽は荆州府とはなほ遠く下流にあるも江のつづきなるによりてか

く敘せり。 〔一〇〕 使者 李功曹をさす。 〔一一〕 青楓 江邊生ずる所の樹なり。

【題義】 功曹李某が侍御史鄭君の判官に充てらるるために荆州へゆくのを送る詩。 これは二度めに贈

つたのである。 黃鶴は大曆元年の作とす。

【詩意】 自分は荆州には宋玉の宅があると聞いてゐるので、いつも荆州へゆきたいとおもつてをる。

ここ（夔州）では自分の生涯も終末に近づきかけた。 あなたのゆかる水國（荆州）の秋をおもつて

はるかに悲しくおもふ。 あなたのゆくさきには荆州の孤城をびえて一柱觀の如き名所があり、九江の

流れに夕日が落ちかかる。 官を帯びて任地に赴かる御使者の身分は光彩あるものだと考へるが、

自分の私情からいふと青楓の樹遠くしのばれて内心愁へざるを得ぬのである。

送王十六判官

王十六判官を送る

客下荆南盡。君今復入舟。

客荆南に下り盡す、君今復た舟に入る。

買薪猶白帝。鳴櫓已沙頭。

薪を買ふ猶ほ白帝、櫓を鳴らす已に沙頭。

衡霍生春早。瀟湘共海浮。

衡霍生春早く、瀟湘海と共に浮ぶ。

荒林庾信宅。爲仗主人留。

荒林庾信が宅、爲に主人に仗りて留まれよ。

【字解】 〔一〕 客 夔州に寓居せし人人をさす、一般にいふ。 〔二〕 荆南 荆州。 〔三〕 君 王十六をさす。 〔四〕 鳴櫓 櫓は櫓に

同じ、船傍に在る「かぢ」。 〔五〕 沙頭 沙頭市、今の荆州府江陵縣の沙市。 〔六〕 衡霍 一山にして衡・霍の二名あるもの。 本來の霍

山は江北壽州に在り。 後代の霍山或は衡山は湖南省衡州府衡陽縣にある山をさす。 此の詩は後の意義の衡山をさしていへり。 〔七〕 生

春 春生の意。 〔八〕 瀟湘 二水の名、洞庭湖の南にあり。 〔九〕 庾信宅 即ち前詩の宋玉宅に同じきもの。 卷十七「詠懷古跡」詩の

題解（六四三頁）をみよ。 〔一〇〕 爲 我がためにの意。 〔一一〕 仗 よる、たよる。 〔一二〕 主人 趙注補注みな江陵の地主、即ち荆州

の長官をさすとなす、仇氏以て王をさすといふは是に非ず。

【題義】 王十六が判官となりて荆州にゆくを送れる詩。 黃鶴は大曆元年の作なるべしといへり。

【詩意】 夔州に寓居してゐたほどの人人はみな荆州の方へ下江しつゝした、そこへ君もまたこのたび

舟にのりこんだ。(江流は迅速だから)君の舟はまだ白帝城で薪を買ひこんだかとおもふうちに、はやすでに沙市の邊りて櫓音たててゐることだらう。君のゆく手の衝雲の山には春の生ずることが早く、瀟湘の水のひろさは海とともに浮ぶの看があるであらう。荒れた林ののこつてゐる庾信の舊宅。そこには君は君の事へる主人の庇護をうけながらわたしの爲に留まつてゐてもらひたい。(追つて自分もそちらへゆくつもりであるから、の意。)

別崔暎因寄薛據孟雲卿【原注】内弟暎赴湖南幕職

崔暎に別る、因りて薛據・孟雲卿に寄す【原注】内弟暎、湖南の幕職に赴く。

志士惜妄動。知深難固辭。志士妄動を惜むも、知深ければ固辭し難し。
如何久磨礪。但取不磷緇。如何ぞ久しく磨礪せむ、但だ磷緇せざるに取る。
夙夜聽憂主。飛騰急濟時。夙夜憂主を聴く、飛騰濟時を急にせよ。
荆州遇薛孟。爲報欲論詩。荆州薛孟に遇はば、爲に報せよ詩を論せむと欲すと。

【字解】【一】別崔暎 崔暎は作者の自注に見ゆるごとく作者の妻崔氏の弟にしてこのたび湖南の節度使の幕僚として赴任せんとするものなり。【二】薛據・孟雲卿 作者の友なり。已に屢見ゆ。【三】知深 知とは先方が我が眞價を知つてくれること。【四】固辭 出でて仕へることをかたぐことわる。【五】磨礪 才學をみがく。退處してゐるをいふ。【六】但取 取とは取るべき所、貴ぶべき所

となすの意。【七】不磷緇 磷はすりへること、緇はくろすむこと、磨而不磷、涅而不緇と「論語」にみゆ。不磷不緇は自己を屈せず、自己を汚さざるをいふ。【八】憂主 暎が天子について憂ふる議論。【九】飛騰 世に出でて活動するをいふ。【一〇】急濟 時 時世の艱難を救ふことに急進せよ。

【題義】妻の弟崔暎が、湖南へ幕僚としてゆくのに別れた詩。ついでにそれを友人の薛據と孟雲卿とに寄せる。大曆元年夔州にての作。

【詩意】志士たるものは妄りに行動することを惜しみ避けるものではあるが、先方が深くこちらを知つてくれればそれをあくまでいなむことはむづかしい。おまへも知己にであうたうへはどうしていつまでもひきこんで自己の才學をみがいてばかりゐられよう、ひきこむばかりが能ではない、出でて仕へるにしたところが自己がすりへらされたりくろすませられたりさへしなければよいので、そこが貴ぶべきところなのだ。おまへが日夜君國を憂ふる議論はこれまでよくきいた。これからでかけて活動して時世をすくふことを急務としなければならぬ。とほりかかりに荆州で薛據や孟雲卿にであうたならば、わしのために彼等に「わしは諸君と詩を論じようとおもつてゐるぞ」としらせておいてくれ。

寄杜位【原注】頃者與位同在故殿尙書幕

杜位に寄す【原注】頃者、位と同じく故の殿尙書が幕に在りき。

別崔暎因寄薛據孟雲卿 寄杜位

寒日經簷短。窮猿失木悲。寒日簷を經ること短く、窮猿木を失ひて悲しむ。

峽中爲客久。江上憶君時。峽中客と爲ること久し、江上君を憶ふ時。

天地身何在。往風塵病敢辭。天地身何くにか往かむ、風塵病も敢て辭せむや。

封書兩行淚。霑灑衰新詩。封書兩行の淚、霑灑して新詩を衰む。

【字解】(一) 杜位 作者の從弟なり。已に屢見ゆ。現に荆州の衛伯玉が下行軍司馬として在るもの。原注の意は蓋し成都時代のことをのべしものにして、作者は杜位とともに嚴武が幕下に在りしといへるなり。(二) 衰 かつむ。陶淵明が詩句に衰、鬢髮其衰とあり。こゝは淚が詩をつつむをいふ。

【題義】荆州で行軍司馬をつとめてをる從弟杜位に寄せた詩。大曆元年冬の作。

【詩意】簷をわたる冬の日短く、木からはなれた猿が途方にくれて悲しんでゐる。自分は峽中でなが客寓の身となつてをるが、あだかも江上遠く君のことをおもひだす。このひろい天地の間に於てこの吾が身はいつたどこに往つたらよいのか、ゆくべき處もない。天下兵馬の塵のみなきつてゐることをおもへば自己一身の病などは辭する所ではない。いまこのころもちをのべて君にやる手紙を封すると左右の眼から淚がながれて、この作りたての詩までがその涙にそそがれうるはされてつまれる。

立春

立春

春日春盤細生菜。

春日春盤生菜細なり、

忽憶兩京全盛時。

忽ち憶ふ兩京全盛の時。

盤出高門行白玉。

盤高門より出でて白玉行り、

榮傳織手送青絲。

榮織手より傳はりて青絲を送る。

巫峽寒江那對眼。

巫峽の寒江那を眼に對せむや、

杜陵遠客不勝悲。

杜陵の遠客悲みに勝へず。

此身未知歸定處。

此の身未知らず定處に歸するを、

呼兒覓紙一題詩。

兒を呼び紙を覓めて一たび詩を題す。

こと、織手とは美人のほそき手。【一】 送青絲 送とは他へ轉送すること、青絲は韭菜の切り續のほそきなたとへていふ。【二】 那對 那對、眼に對するに堪へざるをいふ。【三】 杜陵遠客 作者自らいふ。【四】 定處 定まれる場所、兩京の舊住地をいふ。

【題義】立春の日菜盤をみて感ずる所をのぶ。大曆二年立春、夔州にての作。

【詩意】立春の日春盤にこまかくきざんだ韭菜が盛られてある。之を見るときにはかに兩京の全盛であ

【字解】(一) 立春 節日の名。

(二) 春盤 立春の日に春餅と生菜とを盛る、これを春盤といふ、盤は大なる平皿。(三) 細生菜 細はこまかにきざんであること。生菜は韭(ニラ)をいふ。(四) 兩京 長安、洛陽。(五) 高門 富貴の家の門、立春に菜盤を造りて贈りものとす。

(六) 行白玉 行は運行、諸處へはぶこと。白玉は白玉にてつくりし盤。(七) 榮傳織手 榮は生菜、傳とはその手を廻て他へつたへらるること、その手を廻て他へつたへらるること、眼に對するに堪へざるをいふ。【八】 那對 那對、眼に對するに堪へざるをいふ。

つたときのことがおもひいでられる。あの頃は富貴の家の門からこの菜をもつた白玉の盤がもちだされて諸方にはこぼれ、美人の纖手をわたつて青絲の様な細い菜が轉送せられる。ところが今この巫峽の寒江ではどうしてこの菜盤をまともにながめられよう、杜陵へ旅客たる自分は悲しくてたまらぬ。この身は故郷のきまつた場所へかへれるかどうかかわからぬ。それで子供を呼んで紙を求め感じをのべてこの詩をかきつけるのである。

江梅

江梅

梅藥臘前破。梅花年後多。

梅藥臘前に破る、梅花年後に多し。

絶知春意好。最奈客愁何。

絶だ知る春意の好きを、最も客愁を奈何せん。

雪樹元同色。江風亦自波。

雪樹と元色を同じくす、江風に亦た自ら波だつ。

故園不可見。巫岫鬱嵯峨。

故園見る可からず、巫岫鬱として嵯峨たり。

【字解】【一】年後、新年の以後。【二】雪樹、雪のふりおける樹。【三】同色、梅の花のさける樹と色を同じくす、いづれも白し。【四】亦自波、水上の波はもとより風のために波だつたが、落花もまた江上の風に波だつといふなり。【五】故園、兩京の住地。【六】巫岫、巫山。【七】嵯峨、高き貌。

【題義】江のほとりの梅花をみてよめる詩。大曆二年の春の作。

【詩意】梅の花薬は臘節の前にはころびたが、花の咲いたことは新年になつてからが多い。春がもつ好意はよくわかつてゐるが、この旅の愁のせつなさをどうしたらよいだらうか。花のさいた樹を見ると雪の降つた樹と同じく眞白であるが、落花は亦た江風につれて水上の波のごとく波だつてゐる。このとき故郷は見ようとしても見えず、巫山の姿だけがこんもりと高くそびえてゐる。

庭草

庭草

楚草經寒碧。庭春入眼濃。

楚草寒を經て碧なり、庭春眼に入りて濃かなり。

舊低收葉舉。新掩卷牙芽重。

舊低收葉舉り、新掩卷牙芽重なる。

步履宜輕過。開筵得屢供。

步履宜しく輕く過ぐべし、開筵屢供するを得。

看花隨節序。不敢強爲容。

看花は節序に隨ふ、敢て強ひて容づくることを爲さず。

【字解】【一】楚草、楚地の草、夔州は古の楚の地なるを以てかくいへり。【二】庭春、庭前の春げしき。【三】舊低、草の元氣うせてもと低垂せしもの。【四】收葉舉、葉が收縮し直立して上方にあがる、即ち活氣づきさま。【五】新掩、新に掩蔽せらるる、新巻葉が二重にも三重にもなれば、その内部なる者は外部なる者によりておほはる。【六】卷牙重、巻きたる葉芽がかさなりあふ。これまた内部よりつぎつぎと忍みだすなふ。【七】步履、くつにてあゆむ。【八】輕過、そつとかるくとほりすぎる、草芽を傷はぬためなり。【九】開筵、酒宴のむしろをひらく。【一〇】屢供、新草の碧色を賓客に供するなり。【一一】看花、看は看の誤字なるべし。舊説

みな看字のままにて解くにより尾二句意味徹底せず。余は蕭の誤字としてみて説をなす、尾二句は草になりて立言せしものなり。【二】
【詩意】 季節の順序にまかす、節がくればひとりてに花がさく。【三】 強爲容 容とは容づくりすること、強ひて容を爲すとは、む
りに容飾を爲すなふ。

【題義】 庭上の草を見て感をのぶ。大曆二年春の作。

【詩意】 楚地の草は寒を経て碧であり、庭前の春げしきがこまやかに眼に映る。いまはもと垂れさが
つてゐた葉も収縮し直立して上の方へとあがり、巻いた芽が幾重にもかさなつて生えて来て内部のも
のは外部のものに蔽はれる様になつてゐる。この草のうへを履であゆむときには氣をつけて軽くとは
るがよろしい、さうすれば酒筵をひらくときにも美しい若くさの色をしばしばお客のお目にそなへる
ことができる。この草は季節の順序によつてひとりてに花を着けるのであつて、決してしぶんから無
理に立派に見られようなどと容づくりはせぬのである。

愁 【原注】 強爲爲吳體。

愁 【原注】 強ひて楚地に吳體を爲す。

江草日日喚愁生 江草日日愁を喚びて生ず、

巫峽泠泠非世情 巫峽泠泠世情に非ず。

【字解】 【一】 吳體 吳體の何た
るや明説なきも此篇に就きて見るに

第二句は失黏(平仄の規則はつれ)、

盤渦鸞浴底心性 盤渦鸞浴す底の心性ぞ、

獨樹花發自分明 獨樹花發いて自ら分明。

十年戎馬暗南國 十年戎馬南國に暗し、

異域賓客老孤城 異域の賓客孤城に老ゆ。

渭水秦山得見否 渭水秦山見るを得むや否や、

人今罷病虎縱橫 人は今罷病し虎は縱橫。

第四句の第四・第六字、第六句の第

四・第六字、第七句の第五字は共に失

黏、而して前半四句と後半四句と仄

起式と平起式とを半ばづつ交互に用

ひたり。黃生が注に云ふ、凡集中拗

律、(平仄をわらわらした律體詩)皆

屬此體、例發於此、曰、此體者、

明、其非正律也、と、胡應麟曰

く、老杜吳體、但句格拗耳、と。

諸家律詩の拗體を以て吳體となすに似たり。【二】 喚愁生 生とは江草が生ずるなり、江草生ずるにつれて我が愁を喚起す、よりにて喚
愁生といふ。【三】 泠泠 水聲なり。【四】 非世情 人情に近からざるをいふ。【五】 底 俗語、「何」なり。【六】 獨樹 一本の立ち
木。【七】 自分明 獨り自然に分明なるのみ。我と謂せざるをいふ。【八】 南國 南土をいふ。仇氏洛陽を指すといふは從ひがたし。
【九】 異域賓客 自己をさす。【一〇】 孤城 豐州の城をさす。【一一】 渭水秦山 長安の山水。【一二】 人 人民。【一三】 罷病 罷は
喪におなじ。つかれること。【一四】 虎 奇獸、漢の官吏をいふ。時に長安にては第五琦といふ者の十分の一稅法を用ひたり、虎とは
それをさす。

【題義】 愁のこころをよめり。戯れに吳體を用ひてつくつた。大曆二年春の作なるべし。

【詩意】 江上の草は一日一日と生えて我が愁をよびおこす。巫峽の水は泠泠と鳴つてゐるがすこしも
自分を慰めてくれようとはせず不人情の様におもはれる。江の渦で白鸞が氣樂さうに水を浴びてゐ

るがいつたいどんなつもりなのか、一本木に高くはつきりと花が咲いてゐるが自分とは無關心のさまだ。凡そ十年ばかり兵馬の塵が南方各地に暗くおこつて、異境の賓客たる自分はこんなさびしい城で老いつつある。渭水だの秦山だのも果して二度と見られるかどうか、人民は疲弊しきつて猛虎の様な暴吏がはびこつてゐるのである。

【餘論】吳體につき諸家の評論あり、杜甫の吳體は品格を維持し居るも他諸作家の吳體は然らずと爲せり。其の二三を録すべし。宋の蔡寬夫が詩話に云ふ、子美は盤渦鶯浴底心性、獨樹花發自分明、を以て吳體と爲し、家家養三鳥鬼、頓頓食三黃魚、を以て俳諧體と爲し、江上人家桃李枝を以て新句と爲す。戲を爲すが若しと雖も然も其の格力に害あらざるなり、と。明の胡應麟曰く、老杜の吳體は但だ句格拗するのみ。其の語、側身天地更懷古、回首風塵甘三息機、落花游絲白日靜、鳴鳩乳燕青春深、の如きは實に皆冠冕雄麗なり。宋人の拗體を作すもの、永叔(歐陽脩)が滄江萬古流不盡、白鳥雙飛意自閒、文潛(張耒)が白頭青鬢有存沒、落日斷霞無古今、の若きは尙ほ之に近きを覺ゆ。魯直(黃庭堅)が黃流不流解流三明月、碧樹爲我生三涼秋、蜂房各自開三戶牖、蟻穴或夢封三侯王、は自ら以へらく平生の得意と。遍く老杜が拗體を讀むに、未だ嘗て此等の語あらず、獨り盤渦鶯浴底心性、獨樹花發自分明、は稍類す、然も亦た杜の僻なる者なり。而るに黃は以て無始の心印と爲せり。天下幾人學杜甫、誰得三其皮與三其骨、とは其れ魯直の謂ひなるかな、と。清の黃生が曰く、皮陸(唐の皮日休、陸龜蒙)集中にも亦た吳體の詩あるも、乃ち當時俚俗、此の體を爲せしのみ、詩流之に效ふを屑しとせず、と。

陸龜蒙、集中にも亦た吳體の詩あるも、乃ち當時俚俗、此の體を爲せしのみ、詩流之に效ふを屑しとせず、と。

王十五前閣會

王十五が前閣の會

楚岸收新雨、春臺引細風。楚岸新雨收まり、春臺細風を引く。

情人來石上、鮮鱸出江中。情人石上に來る、鮮鱸江中より出づ。

鄰舍煩書札、肩輿強老翁。鄰舍書札を煩はし、肩輿老翁を強ふ。

病身虛俊味、何幸飫兒童。病身俊味を虚しくす、何の幸か兒童を飫かしむ。

【字解】(一) 王十五 其人未だ詳ならず。(二) 前閣 閣前に同じ、閣の南面をいふ。(三) 楚岸 楚地の江岸、夔州の江岸をいふ。(四) 春臺 春の高臺。(五) 情人 男女間の語、ここは會中の諸人をさす、親しみていへり。(六) 石上 即ち高臺石多き場所をさす。(七) 鮮鱸 あたらしきなます、鱸の生造など。(八) 鄰舍 となりのいへ、王十五が家をさす。(九) 煩書札 わざわざ手紙をよこしてくれる。札とは薄き木のふた、昔は紙の代りに用ふ、ここは語を借りたるまで。(一〇) 肩輿 かたにてかつぐ、し、作者を迎へによこすなり。(一一) 老翁 自己をいふ。(一二) 虚俊味 虚とは見るばかりにてたべられぬをいふ。俊味はすぐれたあちはひの食物。(一三) 飫 あく、王十五がみやげにお膳をもたせてかへすにより家の兒童もそれにあくことを得るなり。「杜陵」に「書札中に并せて其の子を招きしを見る」といへるは恐らくは當らず。

【題義】 王某が閣の南面したところで宴會にあうたことをよめり。大曆二年春の作ならんか。

【詩意】楚地の江岸で雨もあがり、春の高臺にそよそよと風が吹いてくる。なかのいい人人は石の多いところへ集つてくる、新鮮な鱸は江のなかから出される。おとなりから手紙でわざわざお招きになり、駕籠でこのおやちを無理に引ばりだしてくださった。が病める身とせつかくのよい味の御馳走をたべられぬ、それにおみやげにして家の子供らまであかせてくださるとはなんといいふ幸たらうか、まことにかたじけなくおもふ。

崔評事弟許相迎不到應慮老夫見泥雨怯出必愆佳期走筆戲簡

崔評事弟相迎ふるを許す、到らず、應に老夫泥雨を見て出づるを怯れ、必ず佳期を愆るを慮るなるべし。筆を走らせて戯れに簡す

江閣邀賓許馬迎、江閣賓を邀ふるに馬迎を許す、
午時起坐自天明、午時起坐す天明よりす。
浮雲不負青春色、浮雲にも負かず青春の色、
細雨何孤白帝城、細雨にも何ぞ孤かむ白帝城に。

【字解】【一】崔評事弟、卷十五に崔十三評事公輔と崔評事十六弟と崔評事と稱するもの二人あり。これ後者ならん、作者の母方の従弟なり。【二】相迎、こちらを迎へにくること。【三】老夫、自己をさす。【四】

身過花間露濕好、身花間を過ぐ露濕するも好し、
醉於馬上往來輕、醉ひては馬上に於て往來輕し。
虛疑皓首衝泥怯、虚しく疑ふ皓首衝泥を怯るるかど、
實少銀鞍傍險行、實に少く銀鞍傍に傍ひて行くを。

意佳期、約東の時期をまちがへてゆかぬ。【一】江閣、江邊の閣、西閣をさす。【二】邀賓、賓をむかへる、賓は先方の賓客にて自己をさす。【三】馬迎、馬して迎へる。【四】午時、正午。【五】不負、自己が之に負かざるべきをいふ。【六】白帝城、邵寶が注に白帝城は崔評事の居る所といへり。【七】虛疑、疑とは崔が疑ふなり、虚とは事實にもあらぬことを疑ふ故にかくいふなり。【八】衝泥怯、泥みちをなかしてでかけることをおそれる。【九】銀鞍、先方が迎へによこしてくる馬をいふ。【一〇】傍險、羅唐賦は石崖多き故に險といふ。

【題義】從弟崔評事が自分の爲め乘馬を迎へによこしてくれりと許諾しておいたのにその馬がこなかつた。それはこのおやちが泥や雨をみては出かけることを臆劫にしてきつと約束の期限をはずすとかながへたのであらう。それで筆を走らせてこの詩をかきつけて戯れに手紙がはりにやつた。大曆二年春の作なるべし。

【詩意】わしの江閣からお客をむかへるためには馬で迎へてくれるといふ承諾を得てゐたのだ。それで夜明けから起きたり坐つたりして正午ごろになつてしまつた。いくら雲が浮びでたところで自分は春げしきに負くものではないし、細かい雨がふつても自分はどうして白帝城にそむくことができるも

のか。花の木の間をとほつてゆくのだから身がぬれるのはかへつていいし、酔ひ氣嫌になれば馬上で往來することも身軽でよろしい。君はこの白髪の老人が泥をついて出かけるのをおそれてゐるのだなどと事實でもないことを疑うてゐるかもしらぬが、そんなわけではない、まことに險路にそうて行くのに銀鞍の馬がないからゆかれぬのに外ならぬ。

遣悶、戲呈路十九曹長

悶を遣る、戲に路十九曹長に呈す

江浦雷聲喧昨夜

江浦の雷聲昨夜に喧し、

春城雨色動微寒

春城の雨色微寒を動かす。

黃鸝竝坐交愁濕

黃鸝竝び坐して交、濕ふことを愁へ、

白鷺羣飛太劇乾

白鷺羣飛して太だ乾すに劇し。

晚節漸於詩律細

晚節漸く詩律に於て細なり、

誰家數去酒盃寬

誰が家にか數、去つて酒盃寬ならむ。

唯君最愛清狂客

唯だ君最も愛す清狂の客、

百遍相過意未闌

百遍相過ざるも意未だ闌ならず。

【字解】(一) 路十九曹長 仇注に云ふ、路は拾遺となる、院、西省(中書省)に在り、故に曹長といふ、

と。前に夜宿西閣曉呈元二十一曹長の注にも公昔曾て元と同曹、故に曹長といふ、といへり。しかし西省ならば路は右拾遺なり、作者は左拾遺なり、それにて同曹といひうるや、疑ふべし。(二) 酒盃寬 寬は杯量の多大なるをいふ。(三) 清狂客 清廉進取の人物、自己をさす。(四) 闌 極盡するをいふ。

【題義】悶を遣るために作つた詩。戲に路曹長にたてまつつた。大曆二年春の作なるべし。

【詩意】昨夜は江浦でなる雷の聲がやかましかつた。さうしてけふは春の城の雨の様子がうすざむをもよほしてゐる。樹の上では黃鸝がならんで坐つてもごも濕つたことを心配してゐる様だし、水では白鷺がむらがり飛んで濡れ羽を干すにいそがしさうである。自分は晩年になつてしだいに詩の規則に精細になつてきた、だれの家にかたびたびでかけて大きな酒盃を振舞はれようか。君だけは自分如き清狂の客を最も愛してくれられる、だから百遍おたづねしてもまだおもしろみが盡きたとはおもしろい。

晝夢

晝夢

二月饒睡昏昏然

二月睡饒く昏昏然たり、

不獨夜短晝分眠

獨り夜の短きのみならず晝分にも眠る。

桃花氣暖眼自醉

桃花氣暖かにして眼自ら酔ふ、

春渚日落夢相牽

春渚日落ちて夢相牽く。

故鄉門巷荆棘底

故郷の門巷荆棘の底、

遣悶戲呈路十九曹長 晝夢

【字解】(一) 饒睡 饒は多なり。(二) 晝分 正午をいふ。(三) 春 豐州江邊のなきさ。(四) 夢相牽 牽、ゆめがひかるる、いづこにひかるるかといはば即ち下句の故郷・中原へとひかるるなり。(五) 安得 希望の辭、下句にまでかかる。(六)

中原君臣豺虎邊

中原の君臣豺虎の邊

安得務農息戰鬪

安んぞ得む農を務めしめて戰鬪を息め、

普天無吏橫索錢

普天吏の横さまに錢を索る無きを

●横索錢 邪道を以て税金を索り取るなり。

【題義】 ひるねせしときの感をのぶ。大曆二年春の作。

【詩意】 二月には睡ることが多くてただうとうとくらし、短夜ばかりでなく真晝中でさへも眠る。

桃の花などが咲いて大氣は温暖にひとりでに眼が酔ふ様になり、春江のなぎさに日が落ちかかるまで夢がよそへひきつけられる。その夢はどこにあそぶか、故郷の門巷はとみれば荆棘の底にうづめられてゐるし、中原地方の君臣は豺虎の様なものほとりにさまようてをられる。どうにかして農業を務めさせて戰鬪をやめてしまひ、天下ちう役人が無理に人民から錢を取りたてることのない様にしたいたいものである。

暮春

暮春

臥病擁塞在峽中

病に臥して擁塞せられて峽中に在り、

瀟湘洞庭虛映空

瀟湘洞庭虚しく空に映す。

【字解】 〔一〕 一叢 朱注に、鶯と子と叢葉して飛ぶといへるは一叢を一葉とみたるなり。今従はず。

楚天不斷四時雨

楚天断えず四時の雨、

巫峡常吹萬里風

巫峡常に吹く萬里の風。

沙上草閣柳新闌

沙上の草閣柳新に闌く、

城邊野池蓮欲紅

城邊の野池蓮紅ならむと欲す。

暮春鴛鴦立洲渚

暮春鴛鴦洲渚に立つ、

挾子翻飛還一叢

子を挟みて翻飛す還た一叢。

【題義】 春の暮についてよめる詩。大曆二年春の作か。

【詩意】 自分は病に臥して山岳に擁塞せられて峽中に居るので、瀟湘や洞庭はむなしく空に映じてみゆるのみである。ここの楚地の天では四時の雨が断えたことはなく、巫峡ではいつも萬里の遠くからの風が吹いてゐる。このころは沙上の草閣も柳が新に闌くしげりかけたし、城邊の野池では蓮が紅に咲かうとしてゐる。春のくれにあたつて鴛鴦だの鶯だのが洲や渚に立つてゐるが、それがまた子をひきつれてひとつの叢へとひるがへり飛ぶのが見える。

即事

即事

暮春三月巫峽長

暮春三月巫峽長し、

晶晶行雲浮日光

晶晶たる行雲日光を浮ぶ。

雷聲忽送千峯雨

雷聲忽ち送る千峯の雨、

花氣渾如百和香

花氣渾て百和の香の如し。

黃鶯過水翻迴去

黃鶯水を過ぎて翻りて廻り去る、

燕子銜泥濕不妨

燕子泥を銜みて濕ふも妨げず。

飛閣卷簾圖畫裏

飛閣簾を巻く圖畫の裏、

虛無只少對瀟湘

虛無只だ少く瀟湘に對するを。

【題義】をりにふれよめる詩、大曆二年春のくれの作。

【詩意】春のくれの三月に巫峽が長く横はつてゐる。そこへきらきらと行く雲が日光を浮べてとほりすぎる。急に雷が鳴り出して千峯の雨が送りこされる、花の氣はまるで百和の香かなどの様である。黃鶯は水をとほりかけてまたもどつてゆくし、燕子は泥をくはへて濕うてもさしつかへなしといふ風

【字解】(一) 晶晶 白く明なる

貌。(二) 百和香 いろいろの材料

をまぜあはせた香。(三) 翻迴 雨

を恐るるが故に。(四) 飛閣 高き

閣、即ち西閣。(五) 圖畫 外景の

美しきを圖畫とみなしていふ。(六)

虛無 空しくひろき貌、雨中冥濛た

るさまをいふ。(七) 對瀟湘 作者

峽を下りて荆湖の方へゆく意あり、

故に時時瀟湘洞庭のことないふな

り。

である。自分は飛閣で圖畫の様な美しい景色のなかで簾を巻きあげてながめてをるが、このとき残念におもはれるのはこの虚無縹緲たるなかに瀟湘の景色にうちむかふことを缺いてゐるといふことである。

懷瀟上遊

瀟上の遊を懷ふ

悵望東陵道平生瀟上遊

悵望す東陵の道、平生瀟上に遊ぶ。

春濃停野騎夜敵宿雲樓

春濃かにして野騎を停め、夜敵かにして雲樓に宿しき。

離別人誰在經過老自休

離別人誰かある、經過老いて自ら休す。

眼前今古意江漢一歸舟

眼前今古の意、江漢一歸舟。

【字解】(一) 瀟上 長安城東三十里に瀟水あり、橋を瀟橋といふ。瀟上はそのほとりなり。唐の時人の東行するものを送るには瀟橋に於てす。(二) 東陵道 長安城の東門外は東陵の地なり、秦末に東陵侯邵平といふものそこに墜れて瓜を種う、東陵を経て瀟橋に至るなり。(三) 眼前今古意 末尾二句語簡に過ぎて解しがたし。意を以て之を推す、眼前忽ち今古の事について感慨の意を起すないふ。今意とは自己に關する感慨、古意とは恐らくは東陵侯の隱退生活、李廣が霸陵(漢の文帝の陵、瀟水の東に在り)の亭に宿して醉尉に呵止せられしことなどについての感慨ならん。(四) 江漢一歸舟 江漢は水の名、豐州をさす、一歸舟とは一の歸舟を具ふるのみにて而も未だ長安に歸るを得ざるをいふならんか。

【題義】 かつて瀟上にあそびし時のことをおもひて感をのぶ。大曆二年の作か。

【詩意】 自分はうらめしく東陵の道をながめる。自分はふだんよく瀟上に遊びをしたものである。すなはち春色濃かなるころにそこに野遊の騎馬をとどめ、夜あきらかなるとき雲のただよふ樓に宿したものである。あのころそこで別れた人たち、そのうち今は何人が存在してゐるか、また自分は年老いてしまつたからふたたびそこを經過することは休止してしまふことになつた。江漢の地方に一の歸舟を具へてゐるのみで故郷へかへれぬ自分としては眼前に今古にわたりての感慨の意を起さざるを得ぬ。

入宅三首

宅に入る 三首

奔峭背赤甲。斷崖當白鹽。

奔峭赤甲を背にし、斷崖白鹽に當る。

客居愧遷次。春色漸多添。

客居遷次を愧づ、春色漸く多く添ふ。

花亞欲移竹。鳥窺新捲簾。

花亞ぎて竹を移さむと欲す、鳥窺ふにより新に簾を捲く。

衰年不敢恨。勝概欲相兼。

衰年敢て恨まず、勝概相兼むと欲す。

【字解】 (一) 入宅 大曆二年の春、西閣より赤甲に居を遷す。これ赤甲の宅に入りしなり。(二) 奔峭 邵賈が注に、山峻高峻、

如「奔峭」然、とときたるが奔を山の形勢とみしものにて一説といふべし。余は卷九「木皮嶺」詩の千巖自崩奔の句に於ては、奔字につきはほ類似の解をなせり。而して謝靈運が「入彭蠡湖口」詩の折岸崩奔、七里瀨詩の徒旅苦奔峭の句に於て李善は崩奔の奔は崩とおなじく、又奔峭の奔は落なりと注せり。之によれば奔峭とは土石の崩落するけはしき山の義なり。(三) 背赤甲 赤甲は山の名。卷十五「豐州歌」第四(三六六頁)に赤甲白鹽俱稱天とみえたり。「清一統志」に云ふ「赤甲山は奉節縣の東十五里にあり、「水經注」にいふ「江水、南して赤甲城西に遷す、山甚だ高大、樹木を生ぜず、其の石悉く赤し、土人云ふ、人の脚を担するが如し、故に之を赤甲山と謂ふ」と。「元和郡縣志」にはいふ「山は城北三里にあり、漢の時嘗て邑人を取りて赤甲軍となす、蓋し甲の色なり」と。命名の由来について人の脚から取りしとすると、赤色の犀革の甲から取りしとするとの説あるを知る。奔峭背赤甲とは背赤甲之奔峭と同義。(四) 斷崖當白鹽 當白鹽之斷崖と同義。白鹽も山の名、已に見ゆ。「清一統志」に云ふ、奉節縣の東十七里にあり、江を隔つ、と。又說移が「方輿勝覽」を引きていふ、城東十七里にあり、巖壁五十餘里、其の色炳爛、狀、白鹽の若し、と。(五) 遷次 次は會するなり、次を遷すとは居を移すをいふ。(六) 花亞 花が竹につぐ、言ひ換ふれば竹が花を壓するをいふ。(七) 勝概 景色のよきさま。

【題義】 西閣の住所から赤甲山のそばへ居を移してその宅に入りしことをのべた詩。大曆二年春の作。この第一首は新居の大意を敘し満足の意をもらせり。

【詩意】 こんどの宅は背には赤甲山といふ土石の崩落する峻山(或は「奔騰する様な形勢の峻山」)があり、前には白鹽山の斷崖に直面してゐる。客寓のやどりを遷すことははづかしくおもふが、春げしきはだんだん加はつてくる。花の枝がのびて竹におひつき相になつたから竹を移してしまはうかとおもふ、鳥がそとからのぞきこむので、あらたに簾をまきあげて勝手に内部をのぞかせてやる。こんな始末だから自分は老衰の年にはなつたがそれをしひて恨みはせぬ、せいせい慾ばつてよい景色でも取

り込まうとおもふのである。

〔一〕

〔二〕

亂後居難定。春歸客未還。

亂後居定まり難し、春歸れども客未だ還らず。

水生魚復浦。雲暖麝香山。

水は生ず魚復浦、雲は暖かなり麝香山。

半頂梳頭白。過眉拄杖斑。

半頂頭の白きを梳り、過眉杖の斑なるに拄へらる。

相看多使者。一一問函關。

相看る使者多し、一一函關を問ふ。

【字解】 〔一〕春歸。春の去らんとするをいふ。〔二〕客。自己をさす。〔三〕魚復浦。奉節縣東南二里にあり。〔四〕麝香山。奉節縣東四十里にあり。〔五〕半頂。頭のいただき半分に髪が残るなり。〔六〕過眉。杖の高さが眼よりすこし上方に出るなり。〔七〕拄杖斑。拄は支へる、杖斑は斑杖、斑紋のある竹のつゝ。〔八〕使者。京師と往來する官吏などをいふ。〔九〕函關。函谷關。之を問ふとはその治風の狀についてとふをいふ。

【題義】 この第二首は宅をうつしたにつれて故郷の居を懐ふことをのぶ。

【詩意】 兵亂がおこつて以後は自分の居處はきまりにくくなり、春はそのゆくべき所へ歸つてゆくが旅客たる自分は還らずにゐる。魚復浦には水かさがふえてきた。麝香山には雲が暖かさうにうかんでゐる。かかるをりてつべんに半分ばかりになつた白髪あたまをくしけづり、眉のあたりから上へつきでる斑竹の杖にささへられてゐる。すゐふんと往來する使者にであふが、自分はその人ごとに一一函

谷關のあたりの様子はどうだとときいてみる。

〔三〕

〔四〕

宋玉歸州宅。雲通白帝城。

宋玉が歸州の宅、雲は通す白帝城。

吾人淹老病。旅食豈才名。

吾人老病淹し、旅食豈に才名あらむや。

峽口風常急。江流氣不平。

峽口風常に急なり、江流氣平かならず。

只應與兒子。飄轉任浮生。

只だ應に兒子と、飄轉浮生に任すなるべし。

【字解】 〔一〕宋玉歸州宅。宋玉が宅は荊州(江陵縣)と歸州と二種あること已に述べたり。こゝは歸州のそれをいふ、歸州は今湖北省宜昌府に屬す。〔二〕淹一統志に宅は歸州の東二里にありといひ、一明一統志には歸州善治の東五里にありといへり。〔三〕淹。久留をいふ。〔四〕才名。宋玉と應ず。〔五〕浮生。莊子の生也若浮に出づ、浮は動搖不定をいふ。

【題義】 この第三首は旅居を歎せるなり。

【詩意】 この白帝城と歸州の宋玉が宅とは雲氣が相通じてをる。我が輩はここに老病の身をとどめること久しいが、こんな旅でくらすのではどうして宋玉の様な才名を有することができようぞ。峽口にはいつも風が急に吹き、江流にも不平の氣があるかの様にみえる。自分はこのさきとでも子供等と轉轉して浮草の生涯に身をゆだねてゆくことなのであらう。

赤甲

赤甲

卜居赤甲遷居新。

居を赤甲に卜して遷居新なり。

兩見巫山楚水春。

兩たび見る巫山楚水の春。

炙背可以獻天子。

炙背以て天子に獻す可し。

美芹由來知野人。

美芹由來野人知る。

荆州鄭薛寄詩近。

荆州の鄭薛詩を寄する近く。

蜀客郗岑非我鄰。

蜀客郗岑我が鄰に非ず。

笑接郎中評事飲。

笑ひて郎中評事に接して飲み。

病從深酌道吾眞。

病みて深酌より吾が眞を道ふ。

【字解】(一) 赤甲 前の「入宅」詩をみよ。(二) 兩見 作者大曆元年春、夔州に來り、今二年また春にあふ、故に兩といふ。(三) 炙背 美芹 背あぶり(日なたぼこ)と芹をうましとする事との二つ。唐庚が絶交書に、野人有快炙背而美芹子者、欲獻之至尊、雖有區區之意、亦已疎矣とみゆ。作者は絶交書を用ひしものなるが、絶交書の典故は更に「列子」に本づく。「列子」に曰く、宋國有田父、東

作自曝於日、不知有細糠狼藉、謂其妻曰、負日之暄、人莫知之、以獻吾君、將有重賞、里之富室告之曰、昔人有美炙背、甘菜、芹、萍子者、對鄉豪稱之、鄉豪取嘗之、置於口、憐於腹、衆而語之、子此類也。と。(四) 荆州鄭薛 鄭は江陵の少尹鄭審、薛は石首縣の縣令薛據。(五) 蜀客郗岑 郗は梓州の刺史郗昂、岑は嘉州の刺史岑參。(六) 笑接 接は近づくなり。(七) 郎中 顧宸注に吳郎司法(卷二十に見ゆ)なるべしといへり。(八) 評事 崔評事十六弟なるべし。(九) 深酌 たつぷりと杯に酒をつぐこと。(一〇) 道吾眞 本心を吐く。

【題義】赤甲山のそばに居を卜せしにつけて諸友を懷ふことをのべたり。前の「入宅」詩と同時に作なるべし。

【詩意】赤甲山のそばへ住居を卜して引き越したばかりだ。これで自分は巫山楚水の春に二度あふ。日なたの背なかあぶりの快さは天子にたてまつつてもよいほどであり、芹のうまさもとより野人たる自分がよく知つてをる。荆州に居る鄭審や薛據は近いので詩をよこしてくれるが、蜀地の客である郗昂・岑參は鄰りあひではなくかけはなれてゐる。だがにこにこに郎中・評事などの諸君と席をちかづけて酒を飲み、病氣ながらつい過ぐすところから自分の本心を吐きだすのである。

卜居

卜居

歸羨遼東鶴、吟同楚執珪。

歸は羨む遼東の鶴、吟は同じ楚の執珪。

未成遊碧海、著處覓丹梯。

未だ碧海に遊ぶことを成さず、著處に丹梯を覓む。

雲嶂寬江北、春耕破瀼西。

雲嶂江北に寬なり、春耕瀼西を破らむ。

桃紅客若至、定似昔人迷。

桃紅なるとき客若し至らば、定めて似む昔人の迷ひしに。

【字解】(一) 遼東鶴 丁令威が故事。「續搜神記」に云ふ、遼東の華表の柱に鶴あり、其の上に棲む、曰く、有鳥焉、烏丁令威、去

家千里令始歸、城郭如故人民非、何不學仙家棄世、と。【二】楚執珪 執珪は楚の爵、宰相に同じ、楚の莊陽が故事。「史記」にいふ、莊陽はもと楚の細陽の人なり、楚の執珪となり、病むとき猶ほ楚の聲す（郷音をいだすなり）と。王傑が登樓賦に莊陽顯、而越吟といへる是なり。【三】遊碧海 作者夙に南海にあそぶの志あり。【四】著處 到る處の意。【五】寬丹梯 謝朓が「敬亭山」詩に即此設、丹梯、李善注して曰く、丹梯は山を謂ふと。蓋し丹崖をよぶること梯をよぶるがごとくなるによりていふ。丹梯を寬むとは山居を求むるをいふならん。【六】雲嶽 嶽は屏風のごとき山、雲とは常に雲氣あるなり。【七】寬江北 寬とは廣く平かなるをいふ、江北とは長江の北方をいふ、瀟西の地なす。【八】破 土壤を破るなり。【九】瀟西 大瀟水の西の地。卷十五「夔州歌」第五首の瀟東瀟西の句解（二六七頁）をみよ。【一〇】昔人送 武陵桃源の故事を用ふ。

【題義】赤甲山より更に瀟西に住居をトせんとして作れる詩。大曆二年春の作。

【詩意】むかし丁令威が鶴に化して遼東へかへつたといふが、自分も鶴にでもなつてかへればよいとそれを羨む。越の莊陽が楚の執珪の位にまでなつても故郷を忘れかねて病中に越の吟をしたといふが自分の今はそんなものである。かねがね遊びたいとおもうてゐる碧海にはまだ遊ぶことはできず、かへつて到る處に山居をもとめてゐるありさまである。こんど住まはうかとおもふところはこの地方では長江の北で、雲のうかふ峻山もいくらかゆとりがあつて平であるから、春の耕作でもはじめて瀟水の西で地面に鋤鋤でもいれようとおもふ。桃の花がまつかに咲くころお客でもたづねて來たなら、定めし昔武陵の漁父が桃源で路をふみまよつた様なめにあふだらう。

暮春題瀟西新賃草屋五首 暮春瀟西の新に賃せる草屋に題す 五首

久嗟三峽客、再與暮春期。 久しく嗟す三峽の客、再び暮春と期す。

百舌欲無語、繁花能幾時。 百舌語無からむと欲す。 繁花能く幾時ぞ。

谷虛雲氣薄、波亂日華遲。 谷虚しくして雲氣薄く、波亂れて日華遅し。

戰伐何由定、哀傷不在茲。 戰伐何に由りてか定まらむ、哀傷は茲に在らず。

【字解】【一】新賃 あらたに借りいれる。【二】草屋 かやぶきの家。【三】百舌 「モズ」の鳥。【四】哀傷不在茲 茲とは春の過ぎゆくさま、即ち「百舌」以下の四句の事をなす。仇氏は「茲」を戰伐をなすとし、不在茲を豈不在茲乎の義とせり。今從はず。

【題義】春のくれに瀟西であらたに借りいれた草屋に題した詩。大曆二年暮春の作。

【詩意】三峽の客である自分はいつものことながらまたなげく、ここ（夔州）へ來てから二度春の暮れにであふことになつた。百舌鳥も鳴かなくなつてゐるし、繁く咲いてゐた花ももうどれだけの時間もてるものか。谷はがらんどどうで雲氣薄くたち、波がみだれて水上の日のかがやきがいつまでもつづく。どうしたら戰伐が平定せられることであらうか、これこそ自分の哀傷のやどるところであつて、自分の哀傷はただ春が暮れゆくなんぞの點に在るのではない。

【一】

【二】

此邦千樹橋、不見比封君。

此の邦千樹の橋、見ず封君に比せらるるを。

養拙干戈際、全生麋鹿羣。

拙を養ふ干戈の際、生を全くす麋鹿の羣。

畏人江北草、旅食漢西雲。

人を畏る江北の草に、旅食す漢西の雲に。

萬里巴渝曲、三年實飽聞。

萬里巴渝の曲、三年實に聞くに飽く。

【字解】(一) 此邦 夔州の地をさす。(二) 千樹橋 封君 千本の柑橋、土地に封ぜられた主人。史記貨殖傳に云ふ、封者は租税に衣す。千戸の君は歲に半(二十萬(錢)、蜀漢江陵千樹の橋、其の人皆千戸侯と等し、と。みかんの木が千本あれば千戸の土地に封ぜられた君と其の富がひとしいといふのである。(三) 巴渝曲 夔州は漢の巴東郡なり、重慶府は隋の渝州なり。曲は歌曲、巴渝曲とは蜀の東部の土俗の歌をさす。(四) 三年 永泰元年と大曆元二年。

【詩意】この土地で千本のみかんの木を植えても大名にくらべられるといふ様なことはない。(自分も多少は植えたがとて金持ちの資格はない)ただ兵亂の際にもちまへの世渡り下手なところを養ひ、麋鹿のむれにまじつて生命を全うするだけのことである。人をはばかりては江北の草によりそひ、旅のめしをくひながら漢西の雲を伴としてゐる。(こんな生活はみじめなものだ)萬里のかたゐなかの巴渝の歌も三年聞いてはじつにさきあきる。

綵雲陰復白、錦樹曉來青。
綵雲陰りて復た白し、錦樹曉來青し。

〔三〕

〔三〕

身世雙蓬鬢、乾坤一草亭。

身世雙蓬鬢、乾坤一草亭。

哀歌時自惜、醉舞爲誰醒。

哀歌時に自ら惜む、醉舞誰が爲にか醒めむ。

細雨荷鋤立、江猿吟翠屏。

細雨鋤を荷ひて立てば、江猿翠屏に吟す。

【字解】(一) 綵雲 朝の五色の雲。(二) 錦樹曉來青 錦樹とは雲彩相映じて樹色錦をなすなるべし。趙注に云ふ前日花發きて錦の如くなりしに今密葉こまやかなるにより青きなりと、浦注に云ふ、謂はゆる綠暗く紅粉なるなりと。是は春色が夏景にかはるとみるなり。余は現在の錦樹なりと考ふるを以て之に従はず。(三) 身世雙蓬鬢 不備の句なり。一身一世に於てただ雙蓬鬢をあますの意。雙蓬鬢とは蓬のごとくもつれた左右のびんの毛。(四) 草亭 即ち題の草屋。(五) 自惜 獨自之を愛す。(六) 爲誰醒 何人のためにも醒むる必要なきなり。(七) 翠屏 青山をいふ。

【詩意】五色の雲が浮いてゐたが、くもりになつてまた白くなつてしまつた。彩雲の色にうつろつて錦の様に見えてゐた樹も曉からかけてもとの青色にかはつてしまつた。自分はこの世に於て今はただ左右のもつれた鬢の毛をあますばかり、天地のあひだにただ一つのこの草亭があるばかりだ。ひとり哀れな歌をうたうてわれみづから之を愛惜し、だれのためと醒めてくらす必要もないから酔うて舞をまうたりする。こさめがふつてきたので鋤を荷うてそとに立つと、翠の屏風の様な山壁で江の猿がなきさけんでゐる。

〔四〕

〔四〕

壯年學書劍。他日委泥沙。

壯年書劍を學ぶ、他日泥沙に委せらる。

事主非無祿。浮生即有涯。

主に事へて祿無きに非ず、浮生即ち涯有り。

高齋依藥餌。絕域改春華。

高齋藥餌に依りて、絶域春華改まる。

喪亂丹心破。王臣未一家。

喪亂丹心破る、王臣未だ一家ならず。

【字解】「一」書劍。文字をかくこと、劍を撃つこと。「二」他日。後日の意。「三」委泥沙。其の身を泥沙に委棄せられしをいふ。

【四】事主。君につかふ。「五」非無祿。嘗て左拾遺となり俸祿を受く。「六」浮生即有涯。莊子に吾生也有涯とみゆ。此の生にか

ぎりあり早くも老衰となりしをいふ。「七」高齋。仇氏は、この草屋即ち高齋なりとす。浦氏は草屋を高齋とは云ふを得ず、高齋とは殿

武が幕をさすなるべく、此の一句にて上の四句を結びしものなりとせり。愚案するに殿武が幕を高齋と稱するは草屋を高齋と稱するよ

りも不自然なるべし。高齋は西閣を指すなり、今の質屋よりすこしく以前にさかのぼりてのべしのみ。「八」絶域。豐州の地をさす。

【九】春華。はるげしき。「一〇」丹心。赤誠の心。「一一」王臣。地方の武人等をさす。「一二」未一家。天下一統さるるに至らざるを

いふ。

【詩意】自分は壯年の時に書や劍を學んだが、後日になるとそれは役に立たず、わが身は世に用ひられずして泥沙にすてらるるに至つた。嘗て天子にお事へまをして俸祿を頂戴したことが無いわけではないが、人の生活には際限があつていつのまにか老衰になつた。それで高齋（西閣）で藥餌にたよつてゐるたまたまに、この絶域で春景色が二度も改まつた。喪亂のために自分の丹いまごころは破壊されてしまふ。王臣どもが臣節をつくさず兵を弄して天下がまだ一家の様にならぬから。

〔五〕

〔五〕

欲陳濟世策。已老尙書郎。

濟世の策を陳べむと欲するも、已に老いたり尙書郎。

不息豺狼鬪。空慙鴛鴦行。

息まず豺狼の鬪ひ、空しく慙づ鴛鴦の行。

時危人事急。風逆羽毛傷。

時危くして人事急なり、風逆にして羽毛傷はる。

落日悲江漢。中宵淚滿牀。

落日江漢に悲しむ、中宵淚牀に滿つ。

【字解】「一」尙書郎。工部員外郎。自己をさす。卷十三「憶昔」詩第一首、老儒不用尙書郎の句解をみよ。「二」豺狼。盜賊をいふ。

【三】鴛鴦行。行は行列、文官の班列をいふ。「四」人事急。人民の生計急迫なり。「五」羽毛傷。羽毛は鴛鴦の體語なり、自己につ

いていふ。「六」江漢。豐州の地をさす。

【詩意】自分は世を濟ぶ策を君の御前で陳べたくおもふのであるが、もはやこの尙書の郎官たる自分は老いてしまつた。いまだに豺狼どものたたかひがやまぬので、鴛鴦の行列にある自分にはちいさな

かりである。時世は安らかならず人民の生計は急をつげる。風にさかさまに吹きまくられて自分の羽

や毛はそこなはれる。それで夕日の落つころ江漢の地で悲しい思ひをし、よなかになつては涙が寝

臺にいつばいにあふれる。

寄從孫崇簡

從孫崇簡に寄す

嗟峨白帝城東西

嗟峨たる白帝城の東西

南有龍湫北虎溪

南には龍湫有り北には虎溪

吾孫騎曹不記馬

吾が孫騎曹馬を記せず

業學戶鄉多養雞

業戶郷を學びて多く雞を養ふ

龐公隱時盡室去

龐公隱るる時室を盡して去る

武陵春樹他人迷

武陵の春樹他人迷ふ

與汝林居未相失

汝と林居未だ相失せず

近身藥裏酒常攜

近身の藥裏に酒常に攜ふ

牧豎樵童亦無賴

牧豎樵童亦た無頼なり

莫令斬斷青雲梯

斬斷せしむること莫れ青雲の梯

【字解】

【一】從孫 姪の子なるべし。

【二】崇簡 卷十九に「吾宗時あり、その題下の作者の自注に衛倉曹崇簡とあり、本篇と同一人なり。

【三】東西 何故にここに東西といふか、案するに、作者の瀟西の居は白帝城の西にあり、崇簡の居は或は城の東にあるによりて、かくいひしに非ざるか。

【四】龍湫 龍のすむ淵。

【五】虎溪 虎のすむ谷。

【六】騎曹不記馬 晉の王獻之、字は子猷が故事、世説に云ふ、王子猷、桓沖が騎曹參軍となる、桓沖問ひて

曰く、卿は何の曹に署せられたるや、子猷曰く、何の曹なるやを知らず、時に馬を牽きて來るものあるを見れば馬曹なるに似たり、と。神又問ふ、管する所は幾馬ぞ、と。子猷曰く、知らず、馬、何に由りて數を知らん、と。崇簡は倉曹なれども子猷騎曹の故事を借りてその人物を比したり。【七】業學戶郷 戶郷の祝雞翁の業を學ぶないふ。戶郷祝雞翁が雞を養ひしことは、卷一「奉寄河南韋尹丈人」詩の戶郷翁土室、語話祝雞翁、の句解(六三頁)、卷十五「催宗文樹檉掃」詩の未似戶郷翁、拘留蓋汗陌、の句解(三八〇頁)をみよ。

【八】龐公 後漢の末、襄陽の人、妻子を攜へ鹿門山に入りて樂を採る。【九】虛室 一家をこぞつて、妻子をひきくるめての意。【一〇】武陵春樹他人迷 桃源の故事、春樹は桃花樹ないふ、他人とは來訪者ないふ。此の句は前の「ト居」詩の桃紅客若至、定似昔人迷、と用意相似たり。龐公の句も此の武陵の句も作者自己についていへり。【一一】與汝 汝は崇簡をさす。【一二】林居 山林に住居する。【一三】相失 たがひに離れ見うしなふ。【一四】近身藥裏酒常攜 此の句自他の關係解き難し。近身藥裏は自己に屬し、酒常攜は崇簡に屬すかとおもはる。近身藥裏とは藥裏近身にて自己が藥袋をそばに置かないふ。酒常攜とはその病身の自己のところへ崇簡がいつも酒をたづさへてくるないふ。【一五】牧豎 牛羊をかふやつ。【一六】樵童 しばかり、こども。【一七】無頼 たよりなし、あてにならぬ。【一八】斬斷青雲梯 此の語諸家明解を與へず、脚見なふ。青雲梯は山の高處にのぼるに用ふる雲まてとどく梯なり。卷八「石龜」詩に、伐竹者辭子、悲歌上雲梯、などみえたり。今臆測するに崇簡白帝城東の高處に住し、作者の住居とそこを往來するには雲梯が必要なるならん。雲梯もし斬斷せらるれば彼我の往來は此になえん。故に斬斷せしむるなれといふ。常に往來して確達になるなかれとの寓意なるべく考ふ。

【題義】 姪の子で倉曹の官をつとめてゐる杜崇簡といふものに寄せた詩。大曆二年の作なるべし。

【詩意】 たかくそびえた白帝城の東と西と。(自分は西、おまへは東に居る。)城の南には龍のすむ淵があり北には虎のすむ溪がある。おまへは騎曹王子猷が馬のかずをおぼえてゐなかつた様な人物で、戶郷の祝雞翁の業をまんで多く雞を飼養してゐる。むかし龐徳公は山に隠れるとき一家妻子こぞつて去つてしまつたといふが自分の今はそんなものであり、他人が自分の處へたづねてこようとしても武陵の桃花に漁父が路に迷うたごとく彼等は迷うであらう。かやうにしてわしは汝と山林の住居をし

て相離れずをり、わしは藥袋に親んで居ると、おまへはいつも酒をたづさへてたづねてくれる。
(まことになつかしくおもふ。)それで牧豎だの樵童だのといふものはあてにならぬものどもであるから、彼等をして汝のところと往來するに必要な雲の梯をたちきらせてはならぬのである。

江雨、有懷鄭典設 江雨、鄭典設を懷ふ有り

春雨閣閣塞峽中

春雨閣閣峽中に塞る、

早晚來自楚王宮

早晚楚王の宮より來る。

亂波紛披已打岸

亂波紛披已に岸を打つ、

弱雲狼藉不禁風

弱雲狼藉風に禁へず。

龍光蕙葉與多碧

蕙葉に龍光して多碧を與へ、

點注桃花舒小紅

桃花に點注して小紅を舒べしむ。

谷口子眞正憶汝

谷口の子眞正に汝を憶ふ、

岸高瀼滑闊限西東

岸高く瀼滑「闊くして」西東を限る。

【一】 谷口子眞、漢の鄭典、字は子眞、長安の谷口に耕し賢を以てきこゆ。鄭姓の故事を用ふ。【二】 汝、鄭をさす。【三】 瀼滑、滑の字一に闊に作る、闊に従ふ。東瀼水のかははのひろきこと。【四】 限西東、作者は瀼西に住す、鄭は必ず瀼東に住するなり。

【題義】 江上の雨のをりに典設郎であつた鄭某のことをおもつて作り寄せた詩。大曆二年瀼西の作。

【詩意】 春の雨がくらつぱく峽中にふさがつてゐる、それはいつのまにか楚王の宮の方からやつてきたのである。亂れたつ波がばたばたと岸を打つし、力なげな雲もみだれ飛んで風に敵せぬ様子である。この雨は蕙葉に對しては特別のひいきをして多くの碧色を與へてくれるし、また桃の花のうへにぼちぼちとさしてはかすかな紅色を發揮させてゐる。谷口の子眞ともいふべき鄭君よ、自分はいまちやうど君をおもつてゐるのだが、岸は高く瀼水はひろくておたがひを西と東とにくぎりつけてゐるのでいたしかたがない。

熟食日、示宗文宗武

熟食日、宗文宗武に示す

消渴遊江漢、羈棲尙甲兵

消渴江漢に遊ぶ、羈棲尙は甲兵。

幾年逢熟食、萬里逼清明

幾年か熟食に逢ふ、萬里清明に逼る。

松柏邨山路、風花白帝城

松柏邨山の路、風花白帝城。

汝曹催我老、回首淚縱橫

汝が曹我が老ゆるを催す、首を回らして涙縱横たり。

江雨有懷鄭典設 熟食日示宗文宗武

【字解】【一】熱食日 即ち寒食節の異名なり。寒食節は冬至の後百四・五・六の三日の間食事に煮焚きをせぬ古来の習慣なり。唐亦然り、天寶十載二月の敕に曰く、禮部・納火之禁、謂有續疑之文、今後寒食、並禁、火三日、と。寒食を熱食とよぶは語矛盾するに似たるが其の説下のごとし。王洙が注に云ふ、熱食日は即ち寒食節なり、寒人は寒食を呼んで熱食日となす、其の煙火を動かさずして煮め熱食の物を辨じて節を過ごすを言ふなり。齊人は呼んで「冷節」となし又「禁煙節」といふ、と。【二】宗文宗武 作者の二子なり。【三】消渴 病名。【四】江漢 蜀地東部をいふ。【五】清明 節の名、寒食の明日なり。大約陽曆の四月十二三日頃にあたる。【六】松栢 墓樹なり。【七】邯山 山の名、北邯山は河南府偃師縣の北二里にあり、洛陽と近く墳墓多し、寒食清明の頃に墓参りの習俗あり。作者偃師縣に先塋あるによつて近地の邯山をあげ、歸郷して展墓するを得ざるをかなしめるなり。【八】風花 風にひるがへる花。【九】汝曹 なんぢら、二子なます。【一〇】他我老 子どもの成長につれて自己が老ゆるはこれ子等が老をもよほさしむるがごとし。【一一】回首 洛陽故郷の方へふりむく。

【題義】熱食 日即ち寒食節にあたりて宗文・宗武の二子にかきつけてみせた詩。大曆二年の作。【詩意】自分は消渴の病をいだいて江漢の地にあそび、たびすまひをしてゐるがまだ兵亂がつづいてゐる。幾年この熱食日にであふことか、またこの遠地で清明の節にならうとしてゐる。故郷では邯山の路に松栢がしげつてゐるであらう。ここの白帝城では落花が風にひるがへされてゐる。汝等をそだててかく年年寒食を迎へてゆくまに自然と自分は老いてゆく。それで故郷の方をよりむいてやたらに涙かながれでるのである。

又示兩兒

又た兩兒に示す

令節成吾老 他時見汝心

令節吾が老ゆるを成す、他時汝が心を見む。

浮生看物變 爲恨與年深

浮生物の變するを見る、恨を爲す年と深し。

長葛書難得 江州涕不禁

長葛書得難し、江州涕禁へず。

團圓思弟妹 行坐白頭吟

團圓弟妹を思ふ、行坐白頭の吟をす。

【字解】【一】兩兒 前篇の宗文宗武。【二】令節 佳節といふの類、こゝは寒食なます。唐にては中和・上巳・九日を三令節とす。【三】成吾老 成は成就の意、幾たびもの令節を經過するうちに完全に老いたるをいふ。【四】他時 異日。【五】見汝心 見字の主語、見汝心の内容につき諸家の説一ならず。趙彦材曰く、汝年少にして未だ老者の情を知らず、他日汝が輩老年、方に其の心我が今日の如くなるを見ん、と。王嗣興曰く、令節老を悲むこと、汝が曹は今日知らざるも、他時我が年に到らば當に自ら知るべきのみ、と。この趙・王の説は「汝の心を通して我が老情を見ん」といふ義とするなり。見字の主語は省略されたる「汝」。劉會孟曰く、「身後の寒食に、他時汝が思親の心を見ん」と。これは「見」字の主語を「我」とし、「草場のかげから自分は汝等が我を悲ふ心を見ん」との義とするなり。仇兆鰲曰く、「我は」老いて地に歸らず、他時汝が曹の奉先省墓に心を用ふるを見ん、と。これ亦「見」字の主語を「我」とし、「見」の省墓の心を見ん」との義とするなり。浦起龍曰く、吾は則ち老いたり、汝が曹今日は世輩として老も挂念なきも、而も他人の眷顧する無きを待ちて汝が心方に見出し來らん、と。これは「汝は汝の心につきて自覺するときあらん」とするなり。「見」の主語は「汝」。以上列記せる諸説中余は趙説が原意ならんと思ふ。之によれば字面は「見汝心」とあれども、意義は「見我心」とあると大差なきものにて「我心」の内容は「老人の情」なり。【六】物變 物とは事物。【七】爲恨 恨は老年事物に對する恨。【八】長葛 縣の名、齊州と近し、作者の弟齊州に在り。【九】江州 潯陽、今の九江、作者の妹饒離に在り、江州と近し。【一〇】涕不禁 涕は作者のなん

だ。禁は「たへる」。「二」團圓。まどろ。「三」弟妹。弟は長葛の句に、妹は江州の句に關す。「三」行坐。或はあるき或はす
わる。「二」白頭吟。白頭を以て作りし詩を吟す。この詩篇を吟するをいふ。

【詩意】自分は令節をたびかさねたので完全に老人になつた。この老人の心がどんなものかは他日汝等は汝等の心におもひあたつて發見することであらう。このうき世で自分はさまざまの事物の變化を看、恨みをいだくことは年とともに深くなつてくる。長葛にゐる弟からの手紙は得たくも得られぬ。江州に居る妹のことを思うては涙がこらへられぬ。どうかして一家うちそろうてまどろをしたいと弟妹の身のうへをかながへ、たつてもすわつてもゐたたまらずかやうな老人の詩をつくつて吟するのである。

得舍弟觀書自中都已達江陵今茲暮春月末行李合到夔州悲
喜相兼團圓可待賦詩即事情見乎詞

舍弟觀が書を得るに、中都より已に江陵に達し、今茲暮春の月末に行李合に夔州に到るべしといふ。悲喜相兼ぬ、團圓待つ可し、詩を賦し事に即す、情は詞に見ゆ

爾過江陵府何時到峽州。爾江陵府を過ぐと、何時か峽州に到らむ。
亂離生有別。聚集病應瘳。亂離には生に別有り、聚集せば病應に瘳ゆるなるべし。

颯颯開啼眼。朝朝上水樓。颯颯啼眼を開き、朝朝水樓に上る。

老身須付託。白骨更何憂。老身付託を須つ、白骨更に何をか憂へむ。

【字解】「一」舍弟。作者の弟名は觀。「二」中都。長安をさす。至德二載に西京(長安)を以て中京となす。中都は中京をいへり。「自中都」より「合到夔州」までは書中の意味なり。「三」江陵。荊州府江陵縣。「四」今茲。大曆二年。「五」行李。已に見ゆ。「六」は使者即ち觀が身をいふ。「七」賦詩即事。即事賦詩の意。「八」爾。汝、觀をさす。「九」峽州。湖北宜昌府東湖縣、江陵よりは上流にあたり、三峽の入り口なり。「一〇」颯颯。風の吹く貌、蓋し風に向ふをいふ。「一一」須付託。付託する必要あり、付託は身をあづけるをいふ。「一二」白骨。遺骸をいふ。

【題義】弟觀が手紙を得たところ、はや長安から江陵までとどいたから、今年の三月末には夔州へゆきつけるはずだとのことなので、うれしさと悲しさとが一つになり、まどろが待たれる、それでその事に即して詩をつくつた。自分の心もちは詩の文句にあらはされてゐるとほりだ。大曆二年の作。
【詩意】おまへは江陵府を過ぎたといふことだがいつごろ峽州へつくか。兵亂の際には生きながら別れるといふことがある、それが「しよに集まれるとなれば自分の病氣もなほつてしまふであらう。自分分は風の吹くとき啼きながらの眼を開いて、毎朝、水邊の樓にのぼつておまへがくるかくるかとながめやる。この老體はどうしてもだれかにあづけねばならぬのだ。おまへがきさへすれば白骨となつてもなにも心配するにはおよばぬ。

喜觀即到復題短篇二首

觀が即ち到らむとするを喜び、復た短篇を題す 二首

巫峽千山暗。終南萬里春。巫峽千山暗し、終南萬里春なり。

病中吾見弟。書到汝爲人。病中吾弟を見る、書到る汝は人爲り。

意答兒童問。來經戰伐新。意もて兒童の問ひに答ふ、來るは戰伐の新なるを経たり。

泊船悲喜後。欸欸話歸秦。船を泊す悲喜の後、欸欸歸秦を話せむ。

【字解】(一)終南 山の名、長安にあり。(二)吾見弟 弟を見るを得べきをいふなり。(三)汝爲人 愚案するに爲人とは鬼に非ざるをいふ、其の無事なるを驚喜せる語なり。(四)意答 黃生が注に、書を聞きしときに子節にありて觀が近狀を問へるにより且答へ且讀みしならんといへり。或は然らん。(五)戰伐新 是の年郭子儀、則智先を伐ち、大將渾瑊・李懷光に命じて渭上に軍せしむ。戰伐とは之をさす。(六)泊船 觀が船を豐州に泊するをいふ。(七)欸欸 ゆるやかな貌、欸は欸の俗字。(八)歸秦 長安へかへること。

【題義】觀がすぐにも到着することを喜んでまた短い詩をかきつけた。前篇と殆ど同時の作なるべし。

【詩意】巫峽は多くの山がとざしてくらい。終南山は萬里の遠きに在つて春になつてをる。病中ながら自分はおまへを見ることのできる。手紙がとどいてみるとおまへは鬼ともならず人間でゐてくれたのである。子どもらがおまへの様子を尋ねるので自分は臆測ながらおまへのことを答へてきかせる、

おまへは最近の戦亂のなかをくぐつてきたのだ。おまへの船が泊つたら一悲一喜ののちゆつくりと長安へ歸ることの話でもしよう。

〔一〕

〔二〕

待爾噴(噴)鳥鵲。拋書示鶴鶴。爾を待ちて鳥鵲を噴り、書を抛ちて鶴鶴に示す。

枝間喜不去。原上急曾經。枝間喜びて去らず、原上急會て經。

江閣嫌津柳。風帆數驛亭。江閣に津柳を嫌ふ、風帆に驛亭を數ふ。

應論十年事。愁絕始惺惺。應に十年の事を論じて、愁絶始めて惺惺たるなるべし。

【字解】(一)爾 爾をさす。(二)噴鳥鵲 噴は噴に作るべし、いかるしなり。「西京雜記」に乾鶴(噴鶴の義か)喚而行人至の辻あり、行人の歸り来るべき兆のみありて其の人のかへらざるによりいかるなり。(三)示鶴鶴 「常棣」の詩に鶴鶴在原、兄弟急難、不去、鳥鵲を承く。(四)急曾經 鶴鶴を承く。急難を經て助けあひしものなるに今は何とて弟の消息について知らぬかほなするかとの意ならん。「枝間」「原上」の二句共に鶴鶴を指していふと爲す顯微の説は取らず。(五)嫌津柳 柳の望眼を遮るをきらふなり。(六)驛津柳 柳の望眼を遮るをきらふなり。(七)十年事 乾元元年より大曆二年まで十年。(八)惺惺 心のさむる貌、はればれするをいふ。

【詩意】おまへがこぬのうれしさうな顔をして枝から去らぬから、自分は待ちあぐんで鳥鵲に對していかり、曾て原上で急難のをりに助けあうたくせにすこしもおまへの消息を知らせてくれぬから、

自分はおまへの手紙をはふりだして鶴鶴に見せて詰問する。江上の閣にのぼつてながめやればいまはしなくも津ばの柳がじやまになる。風をはらんだ帆のとほるのを見てはおまへがとまる驛亭をかぞへてゐる。おまへと逢うて十年このかたの事をかたりあうてこそ始めて自分の愁きはまつたころがはればれとすることであらう。

晚登瀼上堂

晩に瀼上の堂に登る

故躋瀼岸高。頗免崖石擁。故に躋る瀼岸の高きに、頗る免る崖石に擁せらるるを。
開襟野堂豁。繫馬林花動。襟を開く野堂の豁なるに、馬を繫げば林花動く。
雉堞粉如雲。山田麥無隴。雉堞粉雲の如し、山田麥隴無し。
春氣晚更生。江流靜猶湧。春氣晚に更に生ず、江流靜にして猶ほ湧く。
四序嬰我懷。羣盜久相踵。四序我が懷に嬰る、羣盜久しく相踵ぐ。
黎民困逆節。天子渴垂拱。黎民逆節に困しむ、天子垂拱に渴す。
所思注東北。深峽轉脩聳。所思東北に注ぐ、深峽轉た脩聳なり。
衰老自成病。郎官未爲宄。衰老自ら病を成す、郎官未だ宄なりと爲さず。

凄其望呂葛。不復夢周孔。

凄其呂葛を望む、復た周孔を夢みず。

濟世數嚮時。斯人各枯冢。

濟世嚮時を數ふれば、斯の人各枯冢なり。

楚星南天黑。蜀月西霧重。

楚星南天黒く、蜀月西霧重し。

安得隨鳥翎。迫此懼將恐。

安んぞ得む鳥翎に隨ふことを、此懼將た恐るるに迫らる。

【字解】

【一】瀼上堂 瀼上は瀼水のほとりないふ、瀼上堂は即ち瀼西の宅の堂。【二】故躋 深意ありて瀼西の高地にのぼる。
【三】崖石擁 前の住宅、西側の地は崖石に擁せられたり。【四】繫馬 この句は堂を出でたないふにはあらで此に來りて馬をつなぎしなないふ。「開襟」の句と前後置きかへてみるべし。【五】林花動 春節ないふ。【六】雉堞 堞は女牆、雉は横三丈、堅一丈の面積、城壁は雉を以て版築の單位となす。浦氏は夔州の城についていふとなす。【七】胡粉、石灰。【八】無隴 うれなし、山地高低により上下に圃をなすのみで、うれを作らず。【九】四序 春夏秋冬の節序。【一〇】嬰我懷 嬰はひつかかること、かかるものは下の羣盜の事なり。【一一】逆節 正道にさからうた道、安祿山・史思明以來の叛逆ないふ。【一二】渴垂拱 渴は渴望、垂拱は垂衣拱、手なり、人形のごとく靜立し、無爲にして天下治まるないふ。【一三】東北 洛陽の故郷ないふ。【一四】深峽 夔州のふかき峽。【一五】凄 傷、傷は永きこと、繫はそびゆる。【一六】郎官 工部員外郎ないふ。【一七】未爲宄 宄は餘りてあるむたなものないふ。【一八】凄 其 凄に寒き貌、其は助字。【一九】呂葛 呂尙(太公望)、諸葛亮。【二〇】夢周孔 周孔は周公且孔子、「論語」述而篇に孔子の語として吾不復夢見周公とあり。【二一】數嚮時 往昔の時をかぞへてみる。【二二】斯人 錢氏が「箋」に張綱・房琯・嚴武が輩をさすとし、浦氏は「八哀」詩にいへる諸賢をさすとせり。【二三】枯冢 其の人死して墳墓に入りたるないふ。【二四】楚星 楚地の星。【二五】南天・西霧 西南は上の「東北」に對していへり。【二六】蜀月 蜀の月、楚といひ蜀といふは共に夔州をさす。【二七】安得 希望の辭。【二八】隨鳥翎 鳥の羽にしたがひて東北に飛び歸るないふ。【二九】懼將恐 將懼將恐は詩經の句。

【題義】夕がた漢西の堂に登りてながめ感したることをのべた詩。大曆二年三月、赤甲より漢西に居を移せし當時の作。

【詩意】自分は思ふ仔細ありて漢水の岸の高いところのぼりすんだ、それですこしく崖石にとりかこまれることから免れることができた。ここへきて馬をつなぐと林の花が動く。野堂のひろびろとしたところで胸襟を開いてながめる。城の女牆の白壁は雲の様にみえる。山の麥田には隴といふものがない。夕がたであるために春の雲氣は更におこるし、江の流れは静ではあるがそれでも湧きたつてゐる。四季をとはず自分のむねにひつかかつてゐることはいろいろの盜賊どもが久しくあひついでおこつてゐることだ。人民は叛逆のために困しみ、天子は垂拱無爲の治平を渴望しておいでになる。自分の思ひは東北の故郷にそがれてそこへかへりたくおもうてゐるのだがこの深い峽はいよいよ永くまたそびえてゐる。自分は衰老で自然病氣にもなつてゐるが自分の辱も頂戴してをる郎官の職は決してむだなものではない、その職責を果さねばならぬのだ。それでものがなくも呂望や諸葛亮の様な人物がでてもらひたいと望んでゐるが、自分自身は衰へてわかい時の様に周公や孔子を夢に見ることもなくなつた。世を濟ふに足るほどの過去の人物をかぞへあげてみると、それらの人人は今ではそれぞれ墓場の骨となつてしまつてをる。自分の居る楚蜀西南の地ではいま星いでて天黒く、月かかつて霧が重くとさしてをる。この盜賊横行して恐懼すべき際に迫られてゐる自分は、どうにか

して鳥のつばさにもつきしたがうて故郷の方へ飛んでかへりたいとおもふのである。

寄薛三郎中璩〔據〕

薛三郎中璩〔據〕に寄す

人生無賢愚。飄飄若埃塵。	人生賢愚と無く、飄飄たること埃塵の若し。
自非得神仙。誰克免其身。	神仙を得るに非ざるよりは、誰か克く其の身を免れむや。
與子俱白頭。役役常苦辛。	子と俱に白頭、役役として常に苦辛す。
雖爲尙書郎。不及村野人。	尙書の郎爲りと雖も、及ばず村野の人に。」
憶昔村野人。其樂難具陳。	憶ふ昔村野の人、其の樂具に陳べ難し。
藹藹桑麻交。公侯爲等倫。	藹藹として桑麻交はる、公侯を等倫と爲す。
天未厭戎馬。我輩本常貧。	天未だ戎馬に厭かず、我が輩本と常に貧なり。
子尙客荊州。我亦滯江濱。	子尙は荊州に客たり、我も亦た江濱に滯る。」
峽中一臥病。瘡痍終冬春。	峽中一たび病に臥す、瘡痍冬春を終ふ。
春復加肺氣。此病蓋有因。	春復た肺氣を加ふ、此の病蓋し因有り。

早歲與蘇鄭痛飲情相親 早歲蘇鄭と、痛飲情相親しむ。

二公化爲土嗜酒不失眞 二公化して土と爲る、酒を嗜みて眞を失はず。

余今委脩短豈得恨命屯 余今脩短に委す、豈に得むや命の屯なるを恨むを。

聞子心甚壯所過信席珍 聞く子心甚だ壯なりと、過ぐる所信に席珍なり。

上馬不用扶每扶必怒嗔 馬に上るに扶けらるるを用ひず、每扶必ず怒嗔す。

賦詩賓客間揮灑動八垠 詩を賦す賓客の間、揮灑八垠を動かす。

乃知蓋代手才力老益神 乃ち知る蓋代の手、才力老いて益々神なるを。

青草洞庭湖東浮滄海濤 青草洞庭の湖よりして、東滄海の濤に浮ばむ。

君山可避暑況足采白蘋 君山には暑を避く可し、況んや白蘋を采るに足るをや。

子豈無扁舟往復江漢津 子豈に扁舟の、江漢の津に往復する無からむや。

我未下瞿唐空念禹功勤 我未だ瞿唐を下らず、空しく念ふ禹功の勤めたるを。

聽說松門峽吐藥攬衣巾 説ふを聽く松門峽、藥を吐きて衣巾を攬む。

高秋卻束帶鼓柶視青旻 高秋束帶を卻け、柶を鼓して青旻を視む。

鳳池日澄碧濟濟多士新 鳳池日に澄碧なり、濟濟として多士新なり。

余病不能起健者勿逡巡 余病みて起つ能はず、健者は逡巡する勿れ。

上有明哲君下有行化臣 上には明哲の君有り、下には行化の臣有り。

【字解】【一】薛三郎中暉、暉は暉に作るべし。據が事は已に屢見ゆ。前の「赤甲」七律によるに當時據は荊州の石首縣の縣令たりしが如し、此の篇の末段の意を推すに、或は中央に起用せられんとせしものか。【二】若埃塵、塵し飛びて滅するをいふ。【三】免其身、仇注に「免勞勞身」とさすたるは「かがのしもの」にや。これ埃塵の如く飛滅するを免れざるをいふなり。「嵩里曲」に人が冥土の鬼に呼びとらるることをのべて「免魂」云々とあると同意。【四】子、薛據をさす。【五】爲尙書郎、ともに尙書省の郎官となるをいふ。【六】藹藹、しやくやくとしげる貌。【七】等倫、同族のなかま。【八】江濱、聖州の江のほとり。【九】藪廣、おりのやまひ。マリアナなり。【一〇】肺氣、肺の病氣。【一一】蘇鄭、蘇源明・鄭虔、「八哀」詩其の他已に屢見ゆ。【一二】二公、蘇と鄭と。【一三】爲士、死をいふ。【一四】不失眞、情をいつはりかさねぬ。二公についていふ。【一五】委脩短、壽命の長短いづれにもまかす。【一六】命屯、屯は「易」の卦の名、險難の卦なり。命屯とは運命險難にあたるをいふ。【一七】所過、ゆくところ。【一八】席珍、「禮記」儒行篇の席上珍なり、珠璣の如き美玉をさす。卷三「上韋左相」二十韻詩の席上珍の句解(二五四頁)をみよ。【一九】扶、他人から手でたすけてもらふ。【二〇】飄飄、筆をふるひ墨汁をそそぐ。【二一】八垠、八方のはて。【二二】蓋代手、一世をおほよほどの作手。【二三】青草洞庭湖、青草も洞庭も湖の名、共に湖南省岳州府にあり。【二四】滄海濤、大海のほとり。【二五】君山、山の名、岳州府の西南洞庭湖中にある島山にして上に十二峰あり。堯の女湘君此に居るといひつたふ。【二六】采白蘋、蘋は水草、白花をつく。梁の柳惲が江南曲に汀洲採白蘋、日暖江南春、洞庭有歸客、瀟湘逢故人、云々とみゆ。【二七】子豈無扁舟、豈無の二字は次句にまでかかると。【二八】江漢津、江漢は東蜀の江水をさす、即ち作者の居處をさす。【二九】空念、禹、江なうがつと雖も未だ江流をして平かならしむる能はず、故に「空しく」といふ。【三〇】聽説、人のいふなき。【三一】松門峽、趙注には無所考といひ、「杜陵」には作者の松門

似「畫圖」の詩句を引き、蓋し灤江の下流にあらんといへり。諸注多く、杜廬に據れり。愚案するにこれは江西に在る松門山をさせるならん。「清一統志」に云ふ、松門山は江西省南康府都昌縣の南二十里の鄱陽湖中に在り、俗に岩壩山と名づく。又云ふ、寶宇記に其の山松多く、北大江及び彭蠡湖（即ち鄱陽湖）に臨む、山に石鏡あり、光明人を照らす。謝靈運が入彭蠡湖口詩にいふ、攀崖照石鏡、寒入松門。と。作者峽を下りて東南の遊を爲さんと欲せしにより謝詩によりて廣く此處に及びしものなるべし。【三二】吐藥含みたる藥を飲むことを中止して吐きたす。旅程にのぼらんとあせる様子なり。【三三】攬衣巾。衣類や頭巾をとりをさめる。【三四】高秋卻東帶。これ豫想をいふ。秋ともならず東帶を卻けての意、東帶を卻くるは旅裝にかふるなり。【三五】披襟。襟をなうがす。【三六】觀青曼。青き秋の天をみる。【三七】風池。宮中の池。【三八】濟濟。多き貌。【三九】健者。壯健なる者、操をさす。【四〇】遠遊。ためらふ貌。【四一】行化區。政教を用ひて變化を行ふ區。

【題義】 荊州に在りし薛據に寄せた詩。黃鶴は大曆二年の作となせり。

【詩意】 人の生命は賢となく愚となく、いづれもひらひらと塵埃の飛び滅する様にうせてゆくもので、仙人の術でも得たものでないかぎり、だれでも消滅することからのがれることはできぬ。自分もおまへとともども白頭となつてあくせくといつも辛苦をしてゐて、尙書の郎官などとなつてはをるが村野の人にも及ばぬありさまだ。村野の人といへば昔のことをおもひだすとこのの樂みは一一のべることはむつかしいくらゐだ。桑や麻がもやくやとしげりあうて、農民の富は公や侯と匹敵するばかりであつた。ところが天はまだ戎馬にはあきぬものとみえて騷亂をつづけさせてゐるし、我我ごときはもとよりいつも貧乏であることがきまりだ。おまへはいまだに荊州に客寓してゐるさうだが、自分もこの江濱に滯留してゐる。自分はここの峽中でひとたび病氣になつて瘡のため冬も春もすぎしてし

まつた。そのうへ春からは肺病が加はつたが、それには原因がある。若い時代自分は蘇源明や鄭虔と親しくしてひどく酒を飲んだ。彼等は天眞のままに酒をこのんでとうとう墓場の土となつた。自分も壽命は長くても短くてもかまはないことにしてゐる。逆境で貧病であるぐらゐは恨めるすぢではない。きけばおまへはなかなかの元氣で到るところ席上の珍として貴ばれてゐるといふではないか。それから馬にのらうとする時も人手は借らず、人が手だすけでもしようものならきつとおこりつけるといふ。又もし賓客の間で詩をつくれれば一なぐりにかきつけて八方を感動させるといふ。一世を壓倒するほどのおまへの腕前は年寄つてから一層不思議な才力をもつ様になつたことがわかる。おまへの居る方面を想ふと、青草湖や洞庭湖があり、それから東のかた大海のほとりに浮んでゆける。君山には暑を避けることもできる、まして瀟湘のあたりでは白蘋をも採ることができに於てをや。（そちらが羨しい。）おまへは扁舟に乗つて自分の居るこの江漢のわたりに往復するわけにはゆかぬか。自分はまだ瞿唐峽からくだることはできず、禹が骨を折つて江をほりわつてくれたものの自分にとつては無益であることをかんがへる。松門峽のうはさなど聞くと飲みかけた薬を吐きだして衣巾をとりつくろひすぐにも出ださうかとする。秋になつたらいかめしい禮裝をかなぐりすて澄みきつた青天をみつめて楫をうごかしてでかけようとおもふ。今京師の御所の鳳凰池の水はひにひにみどりに澄み、朝廷に事へてゐる人物は濟濟とたくさん新進のものがをる。自分は病氣で起てないが、おまへの様な

達者なものはぐづぐづせず、驅けてゆくがよい。上には聰明叡哲のわが君がおはすし、その下には徳化を行ふ臣下たちがゐるのである。」

送惠二歸故居

惠二が故居に歸るを送る

惠子白駒瘦。歸溪唯病身。

惠子白駒瘦せたり、溪に歸る唯だ病身。

皇天無老眼。空谷滯斯人。

皇天老眼無し、空谷斯の人を滯らしむ。

崖蜜松花熟。山杯竹葉新。

崖蜜松花熟す、山杯竹葉新なり。

柴門了無事。黃綺未稱臣。

柴門了に無事、黃綺未だ臣と稱せず。

【字解】「一」惠二 其人未だ詳ならず。「二」故居 もとの住居、黃鶴は此の詩の題一に「聞惠二東溪」と作れるによりて溪東を指すならんといへり。「三」白駒 「詩」に皎皎白駒、在彼空谷、とみゆ。白駒は賢人の騎れるこまなり。今借りて用ふ。「四」歸溪 上の黃鶴の説によれば溪は漢水をさすなり。「五」老眼 老練な見とほしのきく眼力。「六」空谷 上の詩經の語を用ひたり。「七」斯人 惠子をさす。「八」崖蜜 蜂が崖壁で釀す蜜。「九」松花熟 松花は蜜の黄色をいふ、松花のごとく熟するなり。「一〇」山杯 山中にて飲む杯。「一一」竹葉 酒の名なり。「一二」柴門 惠子が居の門をいふ。「一三」黃綺 商山の四皓の内の二人、夏黄公・綺里季。「一四」未稱臣 隱遁者も往往出でて仕ふるものあり、今惠子は出でて仕へず、故に臣と稱せずといふ。

【題義】 惠某がその舊住に歸るを送つた詩。此の詩は集外詩なり。黃鶴は大曆二年春の作なるべしとなせり。

なせり。

【詩意】 惠子が騎る白駒の瘦せてゐることよ、彼はその溪居へ歸つてきたが病氣の身ばかりをもつてもどつたのだ。皇天も老練な眼力がないのか、この様な賢人をさびしい谷にとどこほらせておく。今や崖蜜は松の花の色の様に熟し、杯にはできたての竹葉酒が盛られる。柴門はあくまでひっそりして何等の事務もない。彼は眞の黃・綺の徒であつて未だ朝廷へ仕へて臣禮をとらぬものである。

承聞河北諸道節度入朝歡喜口號絕句十二首

河北諸道の節度が入朝すと承聞し、歡喜して口號せる絶句 十二首

祿山作逆降天誅。

祿山逆を作ししも天誅降る。

更有思明亦已無。

更に思明有りしも亦た已に無し。

洵洵人寰猶不定。

洵洵として人寰猶は定まらず。

時時戰鬪欲何須。

時時戰鬪するは何を須たむとか欲する。

【字解】「一」河北諸道節度 河北の諸鎮の節度使なり。當時獨立して朝廷の命令をきかさざりしものどもなり。「二」祿山作逆 安祿山は天寶十四年十一月反し、父子位を僭すること凡そ三年にして乾元二年に滅亡す。「三」洵洵 彼のわきた

【題義】 いままで朝廷に反抗してゐた河北の節度使等が入朝する様になつたと聞いたので喜んで口す

送惠二歸故居 承聞河北諸道節度入朝歡喜口號絶句十二首

さんだ絶句十二首。大曆二年三月頃の作ならん。

【詩意】かつて安祿山が叛逆をしたが之に對して天誅が降つた。また史思明といふ者も有つたがそれも無くなつた。しかるにこの人間世界はまだ波の湧き立つごとく安定せず、時時戦鬪をやるが、いつたいいかなる必要があるのであるか。

〔二〕

〔二〕

社稷蒼生計必安。社稷蒼生計るに必ず安からむ。

蠻夷雜種錯相干。蠻夷雜種錯りて相干す。

周宣漢武今王是。周宣漢武は今王是れなり。

孝子忠臣後代看。孝子忠臣後代看む。

【字解】〔一〕計必安 計とは作者自ら計るをいふ。〔二〕蠻夷雜種 雜種とは安・史等をさす。安祿山は晉州柳城の雜種胡人なり、史思明は晉州寧州の突厥の雜種胡人なり。蠻夷は蓋し吐蕃・回紇・黨項等のえびすをさす。〔三〕錯相干 錯誤、無策のうへから内地の方を干犯し來る。これはとりなしつくりひて言へる辭なり。〔四〕周宣 周の宣王。〔五〕漢武 後漢の光武帝、宣王も光武も共に中興の英主なり。〔六〕今王 代宗をいふ。〔七〕孝子忠臣 歸順の諸節度使等をさしていふ。これまたとりつくりひたる辭なり。

【詩意】蠻夷や雜種が我が唐へ侵入してきたのは元來まちがつてさうしたのであるから、それが正道へもどれば天下も人民もきつと安泰であるであらう。周の宣王だの後漢の光武だのは中興の英主といはれてゐるが、吾が今の天子こそすなはち其人でおはすのである。この君の下に歸順する諸將等は後

代に至りて必ず孝子忠臣として仰ぎ看らるることであらう。

〔三〕

〔三〕

喧喧道路好童謠。喧喧道路童謠好し。

河北將軍盡入朝。河北の將軍盡く入朝すと。

自是乾坤王室正。自らは是れ乾坤王室正し。

卻教江漢客魂銷。卻つて江漢の客魂をして銷せしむ。

とくなるに至りしをいふ。【三】江漢客魂 作者自己の魂をいふ。蜀地に客寓してゐる者のたましひの義。

【詩意】うれしい童謠がやかましく道路につたへられる。そのうたの意味はこんど河北の將軍等が歸順してことごとく入朝したといふのである。それは自然この天地の間に於て王室が正位に復したのであるが、京師へかへれぬ自分としてはかへつて之を聞いて旅魂を銷さしむるのである。

〔四〕

〔四〕

不道諸公無表來。道はず諸公表の來る無しと。

茫茫庶事遣人猜。茫茫庶事をして猜せしむ。

【字解】〔一〕諸公 諸將をいふ。〔二〕表來 天子の毒を賣する表文をいふ。これは蓋し大曆元年十月代

擁兵相學干戈銳

兵を擁して相學ぶ干戈の銳なるを、

使者徒勞萬里迴

使者徒らに勞す萬里より廻ることを、

【詩意】 地方から諸將の賀表文が來ぬ(みやこへ)とはいはぬが、彼等の實際の態度をみると百事何が何やらさつぱりわけがわからぬので人に疑念をおこさせる。すなはち彼等は兵力を擁してたがひに就いて武器のするどからんことをまねしあひ、朝廷から勸告に出むいた使者はいたづらに骨折りをして萬里の遠方からたちかへるにすぎないのだ。

【字解】 〔一〕 鳴玉鏘金 金玉は諸將の佩用する物、鏘は玉の鳴る聲なり。〔二〕 正臣 正道を守る臣。〔三〕 修文偃武 尙書「尙書」武成篇に偃武修文とみゆ。武事をやめて文治を行ふをいふ。〔四〕 不無人 人と

〔五〕

〔五〕

鳴玉鏘金盡正臣

鳴玉鏘金盡く正臣なり、

修文偃武不無人

修文偃武人無きならず、

興王會靜妖氛氣

興王會す靜ならしめむ妖氛の氣、

聖壽宜過一萬春

聖壽宜しく過ぐべし一萬春、

は諸將にあてていふ。〔三〕 興王 新におこりし王、代宗をさす。〔四〕 會 必ず。

【詩意】 朝廷へ參向するために金玉の音をさらさら鳴らしてゆく諸將はみな正道を守る臣である。これ等の人が入朝する以上は武を偃せ文を修むるにおのづから人有りというてよろしい。新に興られた吾が君は必ず天下の惡氣をお靜めになるであらう。吾が君の御壽は一萬年以上にもこゆべきものである。

〔六〕

〔六〕

英雄見事若通神

英雄事を見る神に通ずるが若し、

聖哲爲心小一身

聖哲心を爲すは一身を小にす、

燕趙休矜出佳麗

燕趙矜るを休めよ佳麗を出すを、

宮闈不擬選才人

宮闈才人を選ばむと擬せず、

直隸省の北・中部の地。〔六〕 佳麗 美人、これは燕趙の地にあたる地方の節度使等美女を獻じて宮中へ取り入るものなどあるによりていへり。〔七〕 宮闈 闈は奥向きの門なり。〔八〕 才人 女官の階級の名、正四品の官。

【詩意】 英雄たるものは事情を見とほすことは神明に通ずる所あるかの様なものである。また聖哲の徳をそなへた天子はその心のもちかたは天下を重しとして一身を小とするものである。だから燕趙各

地のものよ、(その地の諸將たる英雄よ、)自己の土地から美人が出るなどとはこることをやめよ。いま御内儀では(聖哲の君の下にある)才人の官をお選びにならうといふ用意はあらせられぬのであるぞよ。

〔七〕

抱病江天白首郎。

病を抱く江天白首の郎、

空山樓閣暮春光。

空山の樓閣に春光暮る。

衣冠是日朝天子。

衣冠是の日天子に朝す、

草奏何時入帝鄉。

草奏何時か帝郷に入らむ。

〔七〕

【字解】〔一〕白首郎 自己をさす。〔二〕空山樓閣 聖州人家の一般の樓閣をいふ。〔三〕暮春光 春げしきのくれかかるをいふ。〔四〕衣冠 朝廷に参向する文官をいふ。〔五〕草奏 奏疏の文を起草するなり。

り。〔六〕帝郷 帝都をいふ。

【詩意】自分は江ぞひの天で病をいだいてをる白頭の郎官である。いまこの自分のすんでゐる夔州のさびしい山の諸處の樓閣には春景色がくれかかつてゐる。みやこではけふは衣冠をつけた文官が天子のごてんへ参内するのであるが、自分はいつになつたら帝都へはひつて奏疏を起草してたてまつることができらるであらうか。

〔八〕

瀟漫山東一百州。

瀟漫たり山東の一百州、

削成如案抱青丘。

削成案の如く青丘を抱く。

包茅重入歸關内。

包茅重ねて入りて關内に歸す、

王祭還供盡海頭。

王祭還た供するは海頭を盡す。

〔八〕

【字解】〔一〕瀟漫 廣く遠き貌。〔二〕山東 太行山以東の地をいふ。即ち大體に於て河北の地方なり。〔三〕一百州 卷二「兵車行」には夔家山東二百州とありたり。〔四〕削成如案 案は「つくみ」なり、つく

みを搦みし如く表面は平かなる地形をいふ。仇注に云ふ、削成、案、形勢、亦指削平、嶺、而言、と。〔一〕抱青丘 抱は諸州之を指してゐるをいふ。青丘は山東省青州府樂安縣治。〔二〕包茅 左傳、僖公四年に齊の桓公が楚の罪を責めたる辭に、汝貢包茅不入、王祭不供、無以縮酒、といへり。包茅は東にした茅なり。それをあみて祭祀に供する酒のかすをこすに用ふ。〔三〕重入 ふたたび朝廷へ貢入せらるるをいふ。〔四〕歸關内 歸は歸題、關内は長安なり。〔五〕王祭還供 上の「左傳」に本づく。王の祭りにまた供せらるるなり。〔六〕盡海頭 海のほとりまでをもつくす。海邊に及ぶまで朝廷へ歸服せしむ。

【詩意】廣く遠き山東地方の一百州は案の如く平かに削り成されて青丘をとりかこんでゐる。その地はこれまで朝廷にそむいてゐたのであるが、こんど昔楚が周室に對してなした如く、茅の東の貢物をふたたび入れる様になつてそれが關中に歸することになり、海邊のはてまで全體の地域にわたつて天子の祭祀の場合にその貢物を供給する様になつた。

〔九〕

〔九〕

承開河北諸道節度入朝歡喜口號絕句十二首

東逾遼水北溲沱

東は遼水を逾え北は溲沱

星象風雲喜共和

星象風雲共に和するを喜ぶ

紫氣關臨天地闊

紫氣關は天地の闊なるに臨み

黃金臺貯俊賢多

黃金臺は俊賢を貯ふる多し

【字解】(一) 遼水 今の遼東にある遼河。(二) 溲沱 河の名、直隸保定府東臨縣にあり。(三) 喜共和 喜とは作者がよろこぶなり。共和とは星象も風雲ともに平和なるなり。(四) 紫氣關 關は函谷關、紫氣といふは老子過關の故事によりてかくいへり。卷十七「秋興」八首の第五首、東來紫氣滿函關の句解(六三四頁)をみよ。(五) 關 天地間 關を以て内外を隔らざるの状をいへり。即ち朝廷の威徳河北一帯に通ずるに至りしをいふ。(六) 黃金臺 清一統志に云ふ、直隸易州の東南にありと。又太平寰宇記を引きていふ、易州の東南三十里にありと。即ち魏國の時燕の昭王が臺上に黄金を置きて賢者を延きし處なり。時に郭隗・樂毅・鄒衍・劇辛等皆燕に集まる。此の句は單に燕の一地について敘しあれども、ひろく河北諸國にわたって意を寓せしものにして苟くも藩鎮の在る所は同様なるの意を含めり。(七) 俊賢 才徳すぐれたる人物。郭隗等の如きものがそれなり。これまた天下の爲めに力を致すの人物をいへり。

【詩意】東は遼水を踰え、北は溲沱河を踰ゆる地方。この地方一體にわたつて、星象にも變異なく、風雲もおだやかに、共に平和になつたことは喜ばしい。それで今日は紫氣のたなびく函谷關が天地の闊大なるところを歴して突立つてをるし、また黃金臺(諸處の)では俊賢なる人物が多く貯へられて天下國家のためにつくさうとしてゐる。

〔十〕

〔十〕

漁陽突騎邯鄲兒

漁陽の突騎邯鄲の兒

酒酣竝轡金鞭垂

酒酣に轡を竝べて金鞭垂る

意氣卽歸雙闕舞

意氣卽し雙闕に歸して舞はば

雄豪復遣五陵知

雄豪復た五陵をして知らしめむ

【字解】(一) 漁陽 直隸順天府の地方、安祿山叛軍の據りし處。卷四「後出塞」詩の第四首句解(三三四頁)をみよ。(二) 突騎 總突する騎兵。(三) 邯鄲兒 邯鄲は直隸廣平府邯鄲縣、戰國の趙の都。兒は健兒。この健兒が漁陽の突騎となりしなり。舊解には「漁陽の突騎と邯鄲の兒」とみて二種のものとしり。今從はず。(四) 竝轡 手綱をならべる。(五) 金鞭垂 黄金を飾りしむちをなれる。鞭をつかはすしつと馬を驅るさま。(六) 意氣 健兒たる突騎の勇ましき元氣。(七) 卽歸 卽は「もし」の意、歸は歸服。(八) 雙闕 長安宮殿の左右のわきの小門。(九) 舞 拜舞するなり。(一〇) 雄豪 卽ち意氣のいさましきさま。(一一) 遣 俗語として「せしむ」なり。(一二) 五陵 漢の長陵・安陵・陽陵・茂陵・平陵、長安の豪傑の徒の住する區域なり。五陵とは五陵の俠徒等をいふ。末二句は健兒をおだてていふなり。

【詩意】邯鄲の健兒から出身して漁陽叛軍の突騎となつた荒武者ども。彼等は酒酔ひ機嫌で馬をそろへ手綱をならべて金鞭を垂らしてしつとやつてゐる。その意氣でもし京師の宮闕に歸服して舞でもまひだすならば、その雄豪のさまはさぞや意氣で鳴らしてゐる五陵の俠徒にまでも認めらるることであらう。

〔十一〕

〔十一〕

李相將軍擁薊門

李相將軍薊門を擁す

承聞河北諸道節度入朝歡喜口號絕句十二首

【字解】(一) 李相 李相は李光

白頭惟有赤心存。白頭惟だ赤心の存する有り。

竟能盡説諸侯入。竟に能く盡く諸侯に説きて入らしむ。

知有從來天子尊。知る從來天子の尊有るを。

劉、光弼は肅宗の朝に於て中書門下平章事・中書令となる、宰相の任なり。又范陽節度使・幽州大都督府長史となる。遂かに其の地を領せしと雖もまた新門を擁すといひ得べし。

【一】將軍 蔡夢弼曰く、將軍は河北諸道の節度使をいふなり、と。夢弼の解のごとくすれば李相と將軍とは二となりて次句の「白頭」へ接しがたし。諸家多く將軍を李相に屬せしめ、相にして將軍を兼ねる義とせり。今之に従ふ。【二】 薊門 薊門は薊の名、直隸順天府薊州にあり。據とは兵力を以て其の地方を擁護したるをいふ。【三】 白頭 老年をいふ。【四】 赤心存 忠誠の心の存在すること。卷十六「八哀」詩第二首の内省未入朝の句を併せ看よ。【五】 竟能 竟にとは其の結果は下の如くなりしといふなり。【六】 説諸侯入 諸侯は節度使等をいふ。説は道理をときつけること、入とは中央朝廷へ歸服入朝せしむること。此に疑問となるは説の字の主語なり。上文よりみ來るときは主語は李相なるに似たり、諸家亦多く此解を取れり。然れども李光弼は已に廣德二年（大曆二年より三年前）に卒したり、大曆二年に諸侯に説きつけることは不可能事なり。故に余はこの説字の主語は或人、即ち「大曆元年（此の作詩の前年、詩は前年の事をあてて賦せしものなれば）當時の其の事に當りし者」ならんと推定す。論者或は言はん、説者が李光弼と別人ならば此句と前二句とは何の關係か有る、と。答へて曰く、これ竟能の竟の字の要用なる所以なり、事の此に至りしは李相が先きに忠誠の模範を示しおきたる結果なりといふが作者の意なり、と。錢氏が「藝」に「舊唐書」を引きて、光弼、輕騎徐州に入る、田神功遂に河南に歸り、尙書・殷仲卿・來瑱、皆相繼ぎて關に赴くといへるもの、光弼が態度の他將に影響ありしを知るべし。【七】 知知の字の主語は作者、又は一般入。【八】 從來天子尊 唐の開初以來の天子の尊嚴。

【詩意】 李光弼は宰相として將軍の任を帯び、兵力を以て薊門の地方を擁護した。彼の晩年は白頭の身を以て唯だ忠誠の丹心が存するばかり他念はなかつた。光弼がかかる態度をもつてゐた結果はつひ

に能く今日「或人」をして諸將の全部を説きつけて入朝させるにいたらしめた。これによつて吾が唐朝には如何に開國の初以來の天子の尊嚴といふものがあるかが知らるのである。（故に今日諸將の歸順は天子の尊嚴と光弼往年の態度に本づく、との意なり。）

【十二】

【十二】

十二年來多戰場。十二年來戰場多し。

天威已息陣堂堂。天威已に息せしめて陣堂堂たり。

神靈漢代中興主。神靈なり漢代中興の主。

功業汾陽異姓王。功業あり汾陽の異姓王。

【字解】 【一】 十二年來 天寶十四載安祿山の叛きしより大曆二年まで前後十二箇年。【二】 天威 天子の威光。【三】 已息 息とは戦争を息止せしめしむをいふ。【四】 陣堂堂 「孫子」に無形無聲、堂堂之陣の語あり。堂堂は盛なる貌。こゝは正堂堂たる天子の軍をいふ。即ち上の天威はこの陣より生ず。【五】 神靈 天子の神聖靈妙の徳をいふ。【六】 漢代 作者常に中興の君として後漢の光武帝を譽ぐ、これ漢を借りて唐に比す。【七】 中興主 興運に申れる君主、唐の代宗をさす。【八】 功業 武功事業。郭子儀は安祿山・史思明等父子を討ち、回紇・吐蕃を制し、僕固懷恩を平げ、周智光等を斬る。功業甚だ大なり。【九】 汾陽異姓王 郭子儀をさす。子儀は功によりて代宗の寶應元年に汾陽郡王に爵を進めらる。異姓とは唐は李氏にして郭氏は李氏に非ざればこれ姓を異にするものなるをいふ。子儀は即ち異姓の汾陽王なり。皇族に非ずして王爵を賜はりしものなり。

【詩意】 十二年このかた天下に戰場が多かつた。ところが正堂堂の陣を有する天子の御威光によつてそれらの戦争はもはや止んでしまつた。事此に至つたのは、上には神靈の徳をそなへさせたまふ漢

代(唐)の中興の天子がおはしたことと、下には功業拔羣である異姓の汾陽王郭子儀が居たこととによるのである。

月三首

月三首

斷續巫山雨。天河此夜新。

斷續す巫山の雨、天河此の夜新なり。

若無青嶂月。愁殺白頭人。

若し青嶂の月無くんば、愁殺せむ白頭の人。

烟颯移深樹。蝦蟇沒(動)半輪。

烟颯深樹に移り、蝦蟇半輪(動)く。

故園當北斗。直想照西秦。

故園北斗に當る、直に想ふ西秦を照らさむことを。

【字解】(一)白頭人 自己をさす。(二)烟颯 水怪なり。「左傳」疏に川澤の神なりといひ、「淮南子」には狀、三歳の小兒の如く赤黒色にして赤目長耳美髮なりといへり。(三)移深樹 明處を避くるなり。(四)蝦蟇 「ひきがへる」なり。月中に金背の蝦蟇ありといひつたふ。こゝは直ちに月をさす。(五)沒半輪 此の句のままならば夜ふけて月が半ばかりれしをいふ。沒の字一に動に作る。動に従ふ。動半輪とは月の半輪の光がはたらき居るをいふ。他の半輪は沒せしなり。沒にても動にても事實は同じ。此語によりて月の上弦なるを知るといふ舊解は從ひがたし。(六)故園 長安の社曲をさす。(七)當北斗 長安城は上は北斗に當れり。(八)西秦 秦の西部、長安の西をいふ。

【題義】月をみてよめる詩、詩の内容によりて大曆二年六月、月明の時の作なるを知る。

【詩意】巫山の雨はふりみふらすみでいつはれるともないが、今夜こそは天の河もあらたになつた。若し青山にかかる月がなかつたならばこの白頭の老人をひどく愁へさせたことであらう。あまり明るいので烟颯は樹深きところへ場所がへをし、夜ふけて月の中にあるといふ「ひき」は半圓だけひかつてゐる。自分の故郷は北斗星の方位にあたつてゐるが、想ふにこの月影は故郷長安の西部を照らしてゐるであらう。

(一)

(二)

併照巫山出。新窺楚水清。

併せて巫山を照らし出し、新に窺ふ楚水の清きを。

羈棲愁裏見。二十四迴明。

羈棲愁裏に見る、二十四迴明かなり。

必驗升沈體。如知進退情。

必ず驗あり升沈の體、知るが如し進退の情。

不違銀漢落。亦伴玉繩橫。

銀漢に違ひては落ちず、亦た玉繩に伴ひて横はる。

【字解】(一)併照 併の字は前篇の西秦をうけていふ。彼の地をも照らし、こちらをも併せて照らすといふなり。(二)巫山出 出とは山峰を照らし出すをいふ。(三)新窺 窺とは月がのぞきこむをいふ。仇氏は窺を人に屬せしめたり。今從はず。(四)楚水 夔州の江水。(五)愁裏見 見とは作者之を見るなり。(六)二十四迴明 二周年をへしをいふ。(七)必驗 驗は人よりしていふ。人之を觀るに必ずそのしるしあるをいふ。升沈を誤らざるをいふなり。(八)升沈體 升沈は出沒をいふ。體はすがた。(九)如知知とは月之を知るをいふ。(一〇)進退情 仇氏云ふ、進退は盈虧(満つると缺けると)をいふと。愚案するに進退は即ち上句の升沈な

り。盈虧にては升沈といふ事實より推測し得べき限に在らず。情はこころもち。【二】不遺銀漢落 銀漢に透ひては落ちず。落つるときは銀漢とともに落つるの意。【三】亦伴玉繩橫 斗杓の三星を玉衡といひ、玉衡の北の兩星を玉繩といふ。横とは低くさがるな

【詩意】月は故郷とともに巫山をも照らしたし、あらたにこの地の江水の清きをのぞいてゐる。自分はこの月を旅すまひの愁のうちに見るが、二十四回明るくなつた。この月をみるに其の出没のすがたは必ずそのしるしがあつてまちがうたことはない。それから推すと月は自己が如何に進退すべきものであるかを知つてゐるかの様である。またこの月は落ちるときは銀漢とともにし、玉繩とともにし、自己だけ先きになることはない。

【三】

【四】

萬里瞿唐月、春來六上弦。 萬里瞿唐の月、春來六たび上弦。

時時開暗室、故故滿青天。 時時暗室を開き、故故青天に滿つ。

爽合風襟靜、高當淚臉懸。 爽かに風襟に合して靜に、高く涙臉に當りて懸る。

南飛有烏鵲、夜久落江邊。 南飛烏鵲有り、夜久しくして江邊に落つ。

【字解】(一) 春來六上弦 今年の春以來、上弦となること六回。上弦は新月以後、月の半圓形に達せざるあひだをいふ。さて「上弦」とあるにより作者の見たる月は上弦の時と考ふるものあり、更に第一首の「没(動)半輪」まで上弦とみんとするは、蓋し當ら

ず。三篇を通じて餘程光明くなりて後の月を詠じしものなることは推知し得、上弦は事のついでに言及びしのみ。【二】開暗室 譬喻なるべし。夔州巫山の雲雨陰鬱なるを暗室とみ、その暗さを破りて明るくすることを暗室を開くといひなせるならん。【三】故故 故は故意に。【四】爽合風襟靜 爽は月色の爽涼に感ぜらるること、(六月なれば夔州は暑氣あり、故に爽涼を喜ぶ)。風襟は風を受くる「えり」。合はびつたりと一致すること、靜は月影の靜かなるをいふ。【五】淚臉 涙をおびし「ほほ」。【六】烏鵲 魏の曹操の短歌行に、月明星稀、烏鵲南飛、繞樹三匝、何枝可レ依、とみゆ。暗に自己のよるべきさまを寓す。

【詩意】故郷から萬里の遠きにある瞿唐峽での月、この月は春からこのかた六たび上弦を経た。この月は土地の幽闇を破つて時時暗室を開けてくれ、ことさら意あるがごとく青天にみちかがやく。そのさわやかなことは襟もとにすすしい風が吹く心地としつくりあうて靜かに照らし、自分の涙をおびた顔つきのまうへにあたつて高く懸つてゐる。だんだん夜深になると烏鵲が南の方へと飛んでつひに江のほとりにおりるけはひがする。

晨雨

晨雨

小雨晨光内、初來葉上聞。 小雨晨光の内、初めて來りて葉上に聞ゆ。

霧交纒灑地、風折旋隨雲。 霧に交はりて纒に地に灑ぐ、風に折られて旋た雲に隨ふ。

暫起柴荆色、輕霑鳥獸羣。 暫く起す柴荆の色、輕く霑す鳥獸の羣。

月三首 晨雨

麝香山一半亭午未全分

麝香山一半亭午に未だ全く分れず。

【字解】【一】晨光 あさひのひかり。【二】風折 風のために逆路を逆にむけかへらるるをいふ。【三】起柴荆色 柴荆は柴門荆扉、起色とはしめりたるによりて色の生じまざるをいふ。【四】麝香山 清一統志に云ふ、奉節縣東四十里にありと。【五】亭午 正午をいふ。【六】未全分 分は分散、未分は集合をいふ。

【題義】ひのでのころ小雨のふりしさまをのべた詩。大曆二年の作とせらる。

【詩意】あさひのまだあるうちに小雨がふりだして、そのやつてきたことは先づ木の葉のうへの音で聞かれた。それから霧と交りてやつと地面にそそぎ、風勢に方向を轉じさせられて雲のあとについてゆく。おかげで暫しは茅屋も潤澤な色が出る。鳥獸のむれも軽くうるほされる。こんなありさまで、麝香山の半分は晝時になつても小雨がまだ散りさらすにゐる。

309
65

終